

黒の艦隊 裏切り戦線

ROGOSS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦場であの部隊を見ても、仲間だと思っではいけない。攻撃をしてくるわけではないが、援護をしてくれるわけではない。戦場において、あの部隊ほど勇ましく凛々しい兵士はいないが、同じだけ彼女たちほど悪で冷徹な者はいないのだからな。

彼女たちは命令を守り、戦い続けた。

それがどれほどの血と涙、そして少しばかりの裏切りで彩られた茨の道だとも知らずに……。

オリジナル用語が1つだけあります。

・戦闘機呐喊（ヤークト・イエーガー）

少数精鋭部隊が単独、敵本陣の奥深くにいる空母集団を殲滅すること。成功率極めて低く、高く見積もってわずか3%。しかし、第666部隊は成功率100%という驚異的な数字をほこっている。

年表

1941年 太平洋戦争勃発

1944年 人類史上初の未確認生物による攻撃を確認。以降、国際連盟呼称で「深海棲艦」と定める。人類と深海棲艦の戦いの始まり。太平洋戦争一時休戦。国連を中心に各国の一体化を推し進める

1952年 海難事故にあった少女を治療及び研究材料とする。艦娘技術の確立

1955年 艦娘「五月雨」が暴行を受け死亡。しかし、事故死とされたため一部の艦娘と艦娘シンパが武装蜂起。一時、各軍省を制圧するも代表格である「妙高」の死により、陸軍主導のもと鎮圧される。通称「血気の五月雨」

1956年 大日本帝国横須賀鎮守府が、国内で初めて国際連合との共同施設として開設される。第666戦術的高機動水上部隊設立

1960年 各国のシーレーンが事実上崩壊。海上の70%を深海棲艦に制圧される

1961年 陸上へ上がるタイプの深海棲艦が確認される。深海棲艦は占領した陸

地に前線基地を建設ことが可能だと判明する

1964 8月 人類の存亡をかけた「暗黒の彗星作戦」始動

目次

琉球諸島海域防衛作戦編	
プロローグ	1
鬼の上官	8
旧知	17
それぞれの戦い	24
政治将校	33
新たなる仲間	37
ブリーフィング	42
出会い	46
琉球諸島大規模漸減作戦始動	52
第666部隊であるならば	60
桜の木	66
忍び寄る影	75
沖縄戦線放棄	80
蠢く影	85
沖ノ鳥島前線編	
黒への期待	91
不穏な予感	95
激突	101
回避	109
猛攻	114
調略	119
奇策を講じて	124
唸る轟音	129

戦々恐々	134
撃墜、鉄槌	139
戦いの果てに	146
暴虐の狼煙 殲滅編	
永遠絶対の地獄	154
裏切りの刃	159
影は進撃ス	165
アナタにアイたい	170
そして運命は笑う	175
朽ち果てる、我が愛しの人	180
いつの日かと謳い続け	185
されど、踊り続けよ傀儡よ	191
命、散りゆき、悲しき思い出に	

捕虜の証	196
反撃の狼煙	208
反撃の狼煙 (2)	213
狂い咲く	219
卓越した信者達	224
魂の怒り	230
暴虐の狼煙 叛逆編	
叛逆の刻	235
馬の骨	240
南の島へ	245

プロローグ

1941年12月8日。晴天のハワイの空は、大日本帝国海軍戦闘機の攻撃により紅蓮の炎に包まれた。俗にいう、「真珠湾攻撃」である。

そして日本は、太平洋戦争へと突入した。

そして……1944年。

人類は初めて、未確認生物からの攻撃を受けた。

世界各国を巻き込んでいた大戦は一時休戦となり、世界は一つとなるためある組織を作った。

国際連合。

その機関主導による、大規模未確認生物通称「深海棲艦」の殲滅作戦が展開されるも、各地で人類は敗戦を重ね続けた。

大日本帝国は、ドイツ、ソ連、アメリカとより強固な技術提供条約を結び対深海棲艦兵器の開発を行った。

そして生まれたのは、少女を媒体として完成する兵器、艦娘だった。

皮肉にも、当時の世界情勢では人道的ではないなどと叫ぶ声は皆無に等しかった。

艦娘の技術はすぐに、世界各国へ提供され人類は反撃の機会を窺い続けていた。時は流れ、1967年10月。

人類は過去に例を見せないほどの大反抗作戦。

オペレーション・ダークネスコメット

暗黒の彗星作戦を発動したのであった。

これは、人に翻弄され、裏切られながらも深海棲艦と闘い続ける少女達の物語である。

○○●○○●

M S 作戦海域 日本帝国海軍所属戦艦羽走艦内^{ははしり}

艦内には危険を知らせるサイレンが鳴り響いている。

だが、誰しもが怯えを隠せないまでも逃げようとはしなかった。

ここでこの艦が退いてしまえば、後方に控えている主力艦隊に大打撃が与えられてしまうことを理解しているからだ。

ゆえに、故郷へ帰れるのかと焦る思いを抱きつつも、船員たちは黙々と作業を続けていた。

「艦長！ もう、持ちません！」

悲痛な叫びを副艦長があげる。

壮年の艦長はただ、無言で頷くことしかできなかった。

太平洋戦争を生き延びた、歴戦の猛者の一人である彼も、人類ではない生命体との戦

いなど未知の領域だった。

「堪えてくれ……！　この船はまだやれる！」

「ですが……！」

「我々は、この海域を離れるわけにはいかない。ここを越えられたら後方に控えている部隊に大打撃が出てしまう。それは、君もわかっているだろう」

「そ、そうだとしても！　ジリ貧です。もう、限界です……」

「いいか、身を賭してここを死守せよ！　これは命令だ」

「……わかりました」

わかっている。

この副艦長は、決して臆病風に吹かれたわけではない。

ここをこの艦が退くことなどありえないことを誰よりも理解している。

それでも、誰かが退くことを提案しなければならなかった。誰かが聞かなければおさまりがつかなかった。たとえば、不可能なことだとしても艦長の口から直接告げられるまでは諦めきれないのだ。

「砲兵に伝達！　再度敵の姿を確認次第攻撃を開始せよ！」

艦長が命令を出したその時。

艦橋の兵士が、叫び声をあげた。

「右舷からスクリュー音です！」

「なにつ！ 全員、対シヨック姿勢！」

羽走が、大きな音を立てながら左右に揺れた。

続いて2発3発と揺れが続く。サイレンの音はさらに音を増し、艦の寿命が根こそぎ削られたことを示し続けた。

「被害報告！」

「右舷スクリュー被弾、弾薬庫からの出火を確認！ 航行不能です！」

「くっ……！」

「さらにスクリュー音確認……これは、魚雷ではありません。味方です！ 味方の識別信号を発信しています！」

「どこの部隊だ！」

「帝国海軍所属第666部隊です！」

「第666部隊……」

終わった。艦長の小さな嘆きに、副艦長は目を見開いた。

なぜ助けを呼ばない。ここで援軍を要請すれば、周囲の深海棲艦を一掃できるかもしれない。

一人でも多くの乗員の命を救えるかもしれない。なのに、なぜ……。

「援軍を要請しましょう！　まだ、今なら間に合います！」

「ならん」

「艦長っ！　面子にこだわっている場合ではありません！　今は、たとえ女子供だとしても助けをつ！」

「そうではない！　彼女たちは……救援を求めたところで来ないさ」

辛そうに言葉を続ける艦長の言動が理解できなかった。

結束力の高い、誇り高き大日本帝国海軍が味方の救援を無視する？　ありえない。断じてありえてはならない。

なぜ、そこまで真っ向から否定できるのだ。

「なぜ、断定するのですか！　艦娘の部隊なのですよ！　我々、人間の生命を優先するはずではっ！」

「ああ、そうだ。通常の艦娘の部隊ならばそうだろう」

「通常の艦娘の部隊ならば……？」

「いいか、よく聞け。戦場であの部隊を見ても、仲間だと思っではいけない。攻撃をしてくるわけではないが、援護をしてくれるわけではない。戦場において、あの部隊ほど勇ましく凛々しい兵士はいないが、同じだけ彼女たちほど悪で冷徹な者はいないのだから」

「馬鹿な……そんな部隊が……本当に存在するとしても……？」

「スクリーン音口スト！ 去っていきました」

その報告を聞き、副艦長はガツクリと項垂れた。

一瞬でも希望を見てしまった。

それゆえのショックは大きい。自分の計り知れない何かが、同じ海軍に存在している。

背筋が寒くなった。恐ろしい、憎らしい、恨めしい。

「この状況が見えているはずなのに……本当に何もしてくれないなどと……」

「あれは隠密部隊。我々のことなど、視界にすら入れていないのだよ」

項垂れる副艦長の肩に、艦長はソツと手をのせる。

その手もわずかに震えてはいたが、艦長の目はまだ諦めてはいない。

ここからどうにかして生きて帰ってやろう、という意思を感じられる。

「良いじゃないか、これでなんの憂いもなく戦える。下手な希望をもって、この世に未練を残すよりは……良いだろう？」

「艦長……」

「最後の反抗としゃれこむぞ。生きてる砲塔を起こせ！ 弾はけちるなよ！」

「……砲撃準備完了！」

「撃てっ！」

琉球諸島海域防衛作戦編

鬼の上官

横須賀鎮守府 1967年 10月24日

「那智大尉！」

第666部隊専用のドックに、まだ若々しい声が響いた。

声の主は、黒の艦隊などという異名には不釣り合いな聡明さを持っている。

髪は黒く、幼さを残すその顔立ちからしてまだ任官し立てだということが容易に想像できる。

「なんだ、吹雪」

「私は……あんなこと認めません！」

「何の話をしている」

「どうして……どうして、羽走を見捨てたのですか！ あの船には……まだ、多くの船員の方が残っていたのですよ！」

「阿呆が……」

「ちよ、ちよつと吹雪！」

「ふん……」

深い海色の髪をツインテールにした少女とピンク色の髪をポニーテールでまとめている少女が走ってきた。

ツインテールは心配そうな表情を浮かべているが、ポニーテールはどこか迷惑そうな目で吹雪を見つめていた。

那智は、ふんと鼻で笑うと淡々と答える。

「愚問だな。我々の任務を覚えているか」

「……海域深層に残存する敵機動部隊の壊滅です」

「そうだ。我々が早急にその任を行わなくては、帝国海軍はさらに多くの装備と人員を失っていた。一隻の船と数隻の軍艦。数十人の将兵の命と数百人の将兵の命。天秤にかけた時、どちらを優先するかは明白だ」

「ですが！ あの時、隊を二分することも可能だったはず！ 救助を行うこともできたはずです！」

「時間の無駄だ。そんなことをして何になる」

「そんなことはありません！ 人の命が関わっていたのですよ！」

「人の命が関わるというならば、私の行動を間違っていたと貴様は批判できるのか？」

どちらも人命が関わっていたことは同じ。ゆえに先も言ったが、機動部隊を排除するこ

とが優先された」

「それでも！」

未だに嘯みつく吹雪に、ツイントールが実力行使に出る。

といつても、殴る蹴るなどの暴行を加えるわけではない。

後ろから羽交い締めにして、口をふさぎ無理矢理黙らせるだけだ。

出撃の度に、吹雪と那智は口論になり、それを止めるのが彼女、五十鈴の仕事となる。

何もかもいつも通りだった。

「もう、ストップストップ！一回やめよ？　ね？」

「くだらない。吹雪、貴官は軍人ならば、命令は絶対だと教わらなかったのか」

軍艦色の制服と帽子をかぶったマックスが静かに告げる。

いつの間にか来ていたドイツの政治将校は、いい加減こいつをつまみ出せ、などと物

騒なことも言い出した。

それも仕方ないのであろう。

この部隊の技術の多くは、ドイツから提供されたものだ。

そのため、部隊の規律が乱れることがないよう政治将校という監視まで派遣されてい

るくらいである。

そんなところに、平和ボケした思想を持つ吹雪のような艦娘は不必要などと判断され

るのは必然だった。

ようやく口を閉じた吹雪に、マックスはさらに追い打ちをかける。

「……」

「命など関係ない。命令されたことか否か、そのみが最重要項目だ」

「……でも」

「でももくそもあるか！」

「時間がない。話はこれで終わりだ。マックス中尉、行つて良いですね？」

「……わかった」

「大尉！ ……くっ」

離れていく那智の背中に声を掛けようとするも、寸前で吹雪は思い留まる。

これ以上ことを荒立て、隊のメンバーに迷惑はかけたくなかった。

その様子を見ると、残っていた隊員たちもその場を後にしていく。

「吹雪も早く、艦装を外しなよ」

「不知火ちゃん……」

「じゃあ」

「……どうして……どうしてみんなそうやって割り切れるの」

私はおかしいのだろうか？

私は不良品なのだろうか？

そんなことはない。間違ったことなど言っていない……。

吹雪は拳を血が滲むほど握り締めた。



柔らかな秋の日差しが執務室に差し込んでいた。

提督は机に向かいながらも、那智の報告に耳を傾けていた。

「……だ。本作戦の最大目標であった、敵機動部隊の艦載機の漸減ぜんげん及び空母の撃沈に成

功した」

「……そうか。ご苦労。」

陸軍上がりの提督。

当初は海軍とそりが合わなかったようだが、今ではその手腕も認められ第666部隊の指揮官として信用されている。

過去に何があったかは知らないが、陸軍からの派遣となっているとすると、それなりにドロドロとした何かを経験しているのだろう。

報告が終わっても立ち去ろうとしない那智に、提督「橋本」は不審そうに声をかけた。

「どうでした」

「また、言われた。命を軽視していると」

「……吹雪か」

「ああ」

思わずため息が出る。

いつもこうだ。大きな作戦のあと、那智は普段は気丈に振る舞っているその姿からは想像できないほど、弱い姿を見せる。

その原因が、過去にあるのか？ それとも新任の吹雪にあるのか？ そもそも、那智の心の問題ではないのか？ 様々考えられたが、どれもしつくりとした回答を得ることができないでいた。

「……まだ、彼女は新任だ。この部隊の存続意義を完全に把握していないのだろう。大目に見てやって欲しい。それに、那智も気にすることはない」

「そうは言ってもだな……」

「第666部隊は、たださえ部隊損耗率が異常に激しい。それは、我々が無理難題の任務を命じているからにほかならない。だがな、補充要員が入るたびに気にしていても仕方がないぞ」

「言われなくても、わかっているつもりだ。だが……」

今日はいつともよりも酷いな。

そう思うも、適当にあしらうことはできない。

那智のすべてを知っている上官として、部下の憂いを払うことも仕事だと橋本は心得ている。

「……お前のことは俺たちがよくわかっている。お前の無念も恨みも悲しみも。お前が本当は、誰よりも命を尊んでいることも」

「……」

「苦勞をかけているな」

「いや、私こそすまない。提督にいらぬ心配をかけた」

「……」

「……私は提督を信頼している。その期待にはかならず応えたい」

「その結果、全ての命をもてあそぶこととなってもか」

橋本の質問に那智は黙る。

だが、答えは既に決まっているようだ。

その解を口にすることが、どれだけ恐ろしいことかを橋本は知っている。知っているが、問わねばならない。そして、答えなくてはいけないのが部隊を率いる隊長の義務

でもある。

「……提督が望むなら構わない」

「そうか。那智、妙高には会いに行ったのか？」

「……もちろんだ」

「嘘をつくな。お前が会いに行くわけがないだろ」

姉として慕っていた妙高に那智が会いに行くわけがない。

意地の悪い質問だと、橋本も思っていた。

「……お前が責任を感じることはない。アイツは……アイツの任をこなしたんだ」

「……馬鹿野郎。命を捨ててまで……どうしてあんなものを守ったんだ」

「愚問だな。その答えは、自分が一番わかっているだろ」

「頭でわかっていても……心が理解してくれないものだ」

「吹雪が言いそうなことだ」

その言葉に、那智は思わず頬を緩める。

今、一番の問題児である彼女と同じようなこと言っているなど……とんだ皮肉じゃないか。

「確かに。私も、部隊長でありながら甘いところが多い様だ」

「……気にするな。お前たちは兵器ではない」

「提督が言うのならば、その言葉で十分だ。失礼する」

「大鳳が会いたがっていたぞ」

かつての同僚の名を挙げられ、那智は笑みを消す。

進んで会いたい相手ではなかった。

しかし、わざわざ橋本から言われたとあつては断ることもできない。

その辺のことを大鳳も狙っているのだろう。

まったく、変なところで頭のキレる奴だ。

「わかった。後で時間を作ろう。では」

那智の姿が完全に見えなくなることを確認すると、橋本は背もたれに寄り掛かった。

年季の入った椅子が、ギイと不穏な音を立てる。

「……現実はお前が思っているほど、優しくはない。だがな、そう諦めることもないのだ。いい加減自分を許せ、那智」

旧知

食堂は人で賑わっていた。

給仕係、整備係、通信係、一般海軍兵。

誰もが、せめて食事のひと時だけは戦争を忘れようとしているかのようになり、無理に笑顔を作り会話を弾ませていた。

しかし、吹雪が傍を通るとその机の人々は押し黙った。

吹雪だけではない。

艦娘が通るときはいつもそうだった。

人体実験によって生まれた兵器。

人か物か、曖昧なもの。

死ぬことがない、不気味な存在。

その理由は様々だ。

もつとも、ほかの鎮守府では心無い人により艦娘へ虐待をするところもあるらしく、それに比べればこの鎮守府は何倍も治安は良いと言えるだろう。

「あ、夕張さんー！」

袖を引かれ振り向いた先には、第666部隊専属整備兵夕張技術大尉がいた。

複雑な艦装の仕組みは艦娘にしか理解できない、という上層部の判断で整備兵までもが艦娘なのだろうが、その決定が彼女達をより、人から遠ざけていた。

「あ、吹雪ちゃんじゃんー！ 一緒に食べる？」

「良いですか？」

「いいよ、おいでおいで」

手招きをされ席に座る。

夕張はニコニコとしたままそばをすすり続けた。

「また、蕎麦食べてるんですか？」

「当り前じゃん。明日死ぬとしても、私は蕎麦を食べるね」

「あはは……何ていうか……すごいですね」

「そうかな？ などと言って、夕張は首をかしげる。

なぜ好きなのかは夕張もわからないらしい。

過去の軍艦の魂を埋め込まれている艦娘は、その当時の軍艦の艦長や乗組員の気質などが顕著に表れるらしいが……夕張はそのくちなのだろう。

「私なんて、毎日食べるモノ変えないと飽きちゃいますよ」

「ふーん。だけどき、今日はいつもより食べる量少ないね」

「あ……はい……」

「何かあった？ 私が話をしつかり聞いてあげるよ？」

真剣な眼差しを向ける夕張に、吹雪はかなわれないなと思いつつながらポツリポツリと話し始めた。

「夕張さん……命についてどう思いますか？」

「命？」

「はい……命に……重いつてあるんでしょか……。多くの命が救えればいい、だから少ない命は見殺しにして良いなんてあるんでしょか？」

「ははん……また、大尉と何かあったんでしょ」

「……」

「MS作戦関係かな？」

「やつぱり、わかりますか……？」

「あつたりまえじゃん。私は前線にはあまり出ないけれど、大尉との関係は長いのよ？」

「そう……ですよね」

「そうだ。彼女は、私よりも大尉との付き合いが長いのだ。」

それに有事の際には、彼女自身も前線に出ることがあるんだ。

私よりも……よっぽど兵士らしい。尊敬すべき軍人なんだ……。

「大尉はね、いつもあんな風に強がってはいるけど本当は繊細な人なんだよ」

「繊細……ですか？ とてもそういう風には……」

「皆の前では強がってるだけ。誰よりも、命の重さを知っている。だけど、知っているからこそ冷静に、冷酷な判断ができる。あの人は……そんな自分を嫌いみたいけど」

「そうだったんですか……？」

初耳だった。

芯を持った己を曲げない人。

指揮官としては優秀でも、人間としては決して見習いたくはない人。

そうでしかなかった那智への印象が徐々に変わっていく。

「誰かが判断しなきゃいけないことなんて、たくさんあるよね？ でも、皆はそれを嫌がる。責任を持ちたくないからね。だから、誰に嫌われているのかと恨まれているのかと……本当は怖いはずなのに、その気持ちを隠して判断ができる大尉って……凄いなと思わない？」

「あ……」

「誤解されやすい人だけどき、吹雪ちゃん、大尉のことしつかり見てあげて」

「はい……！」

まだ大尉の判断を認めただけではない。

でも、それでも、理由はわからないけれども大尉にもそういう感情があることが嬉しく思えた。

そういう人を本当は敬うべきではないかと思えた。

吹雪の感動をよそに、夕張はため息をつくとゆつくりと後ろを振り向いた。

「つて言う話をしてるんだけど……盗み聞きはよくないよ、五十鈴」

「ば、ばれてたか……」

「もう」

「五十鈴中尉……」

ツインテールを揺らしながら、ヒョコツと飛び出してきた五十鈴は照れ臭そうに笑った。

空の食器を乗せたおぼんをもっているのを見ると、たまたま見かけて近づいてきたのだろう。

「あー、そういう階級呼びは作戦の時だけでいいよ。私、そういうの嫌いなんだよね」

「あ、前にも言っていましたよね。すみません……」

「五十鈴はね、逆に階級呼びしなすぎで大尉にメチャクチャしごかれてたんだよ」

「ちよ、余計なこと言わない！」

「さあて、何の話かね？」

「もう、夕張なんか大っ嫌い！」

「そういう事言っちゃうかー。じゃあ……私が何言ってもいいよね？」

夕張の一言に五十鈴が顔色を変え、すがりつく。

この二人は同じ訓練学校出身なこともあり、大の仲良しだ。

こんなほのぼのとした姿を見られるのは、ここでは珍しい。

「ごめんなさい……！　もう、言わないから……！」

「それでよし！」

「あはは、面白いですね」

「ちよっと、何笑ってんのよ！　吹雪が初陣で漏らしたこと言うわよ」

「い、五十鈴さん！　それは、やめてください！」

「なにになに？　気になるなー」

突然話のネタにされ、顔を赤らめる吹雪。

五十鈴はどうしよつかかな？　などと言って話を伸ばし、夕張は教えなさいと連呼した。

こう見れば、彼女達は年相応の少女だということがわかる。

陸おかに上がれば、彼女達はひ弱な女性であり、本来軍人が守らなければならない笑顔を持つているのだ。

「吹雪はね、初陣の時敵の卜級と戦っててさ……」

「五十鈴さん！」

吹雪の絶叫が食堂に響き渡った。

それぞれ戦い

大日本帝国は今や、極東においての最大軍事国として東シナ海、日本海、太平洋の3つの海を防衛する重要な要となっている。

しかし、深海棲艦の猛攻で劣勢に立たされていながらも、大国であるソ連やアメリカ合衆国からの支援が望めない今、大日本帝国はその力を徐々に失いつつあった。

そんな時、アジア圏で初となる国軍と国連軍の共同開発基地が建設された。

それこそが、大日本帝国横須賀鎮守府である。

その面積は既存の海上設備を数倍にも拡大した巨大なものとなっておいた。

しかし、国連軍と大日本帝国海軍の仲が良好か？ と聞かれれば首を振らざるを得ない。

扉一枚を挟んで、反対側はグレーと黒の鉄骨が向き出しである大日本帝国側と白を基調に丁寧に塗装されている国連軍側で別れているところから、一目瞭然である。

かつての戦友であり、艦娘になる前からの親友である大鳳は国連軍教導隊の教官となっていた。

前線から離れた職場にいるが、かつては出撃のたびに戦艦級を数隻必ず撃沈するエー

スとして活躍していた。

扉を抜けると、国連軍の奇異の視線が痛いほど突き刺さった。

しかし、そんなことなど気にもせず那智は進んでいく。教導隊詰所をノックすると、案の定返事は帰ってこない。

「ん？ 誰」

「私だ」

「入っていいよ」

「ああ」

来客を予想していたのだろう。

突然部屋に入ったというのに、大鳳は驚いた様子を見せることなく那智に座るよう勧めてきた。

素直に行為を受け取る。

「久しぶりだな、那智」

「……一人か」

「そうよ。今、お茶出すから」

「長居するつもりはない」

聞こえているのかいないのか、大鳳は返事をすることなく台所へと姿を消した。

那智はため息をつくも、黙って待つことを決める。

「……教導隊は忙しいか？」

「どうだろうね。前線ほどではないよ」

「そうか……」

「はい。持ってきたよ」

「ありが……」

「……？」

目の前に差し出されたものを指差しながら、那智は尋ねる。

「本当にこれでおかしくないと思っいぶかているのか？ それとも私の目がおかしいのか？」

訝いぶかしむ那智を大鳳はキョトンとしながら見つめた。

「なあ」

「なに？」

「これはなんだ」

「お茶」

「どうみても、カレーなのだが」

「大鳳カレーだよ」

「大鳳……カレー？」

「おいしいから、大丈夫」

「そ、そうか……」

そうだ彼女はそういう人だった。

何かと自作のカレーを出して自慢したがるのであった。

久しぶりの友人のテンションに戸惑いつつも、那智は茶の湯に入っているカレーをすすする。

味は悪くない。むしろ、大日本帝海軍の食堂で出るカレーよりも数段おいしい。

「で、何の用？」

「貴様が私を呼びつけたのだろうか？」

「ああ……：そういういえばそうだった。吹雪のことを聞こうと思つて。優秀だけど純粹でしょ？」

「貴様が教官だったのか……」

大鳳は何も言わずに悪戯っぽく笑うと、那智の目の前に座る。

感情丸出しの表情をしているのか、那智は唐突に当ててあげようか？ などと言いだした。

「あの子は、妙高に似てる。だから、放つてはおけないけど怖くて直には触れられない。違う？」

「それは……」

「わかるよー。物腰はすごく丁寧なのに、たまにすごく強気に出るところとか。戦争に正義を求めるところとか。誰よりも仲間を想うところとか……」

「やめてくれ」

那智が机を叩く。

上に置いてある灰皿が音を立てて床へと落ちていった。

聞きたくない。

姉さんの話は聞きたくない。その話だけは、誰からも聞きたくはないのだ……。

「そんな話は……聞きたくない」

「あれは……妙高自身が決めたこと。だから、いつまでも那智がウジウジしていても仕方ない」

「……わかってる」

「……まあ、いいや。で、使えそう？ 吹雪は」

神妙な顔つきをやめると大鳳は話題を変えた。

那智も深呼吸をして気持ち落ち着かせると、正確に吹雪のことを思い出す。

彼女の技術、思想、装備……すべてから事象から導き出すとするも、まだ一緒の部隊となつてから一か月も経っていない彼女を、何もかも把握することができていなかった

た。

「わからない。使えなくはないと思うが」

「戦いに感情を持ちこんじゃうからね、あの子。多分、本人もそれじゃダメだってわかっているとと思うよ。だけど、やめられない。ううん、やめることを怖がっている。やめたら、ただの兵器になると思っっているから」

「ただの兵器……」

「そんなことはない……って教えてあげるのが、部隊長の責任だよ？」

「言われずとも、わかっている」

「だったら、どうして避けるの？　那智……あなた変われないままじゃ、誰も救えないよ？」

「わかっている！　私だって……これでも変わった」

「……そうだね、ごめん。那智は変わったよ。すごく強くなった。私みたいに、前線から逃げて教導隊になった人から見れば尊敬に値するよ」

あの事件で傷ついたのは、何も那智だけではない。

そんなことは那智自身が一番わかっていた。

妙高は誰からも慕われていたし、誰よりも責任感が強かった。

だからこそ、不正を見て嘆く友たちの代表として立ち上がったのだろう。

悲しそうな笑みを浮かべたまま、大鳳は言葉が続けた。

「だけどね。私も教導隊になって、教官になったら感じるが増えた。教え子には死んでほしくない。だから、那智大尉。吹雪少尉の成長に手を差しのべていただけないでしょうか」

「……もとより、そのつもりだ」

気まずい沈黙が流れる。

先に我慢できなくなったのは那智のほうだった。

「もう、前線にはでないのか？」

「どうか。ついこの間もインド洋に展開していた中国軍の空母艦隊がやられたしね……。戦場じゃ、私みたいなガス空母でも引つ張りだこになるだろうね。多分……吹雪たちの代が最後の教え子かな。現に、今は担当は持つていないしね」

「いけるのか？」

「大丈夫。教導隊は、エリート中のエリートなんだよ？ 余裕だよ」

カラリと笑う大鳳に那智は何度目かわからないため息をつく。

彼女の前にいると、どうしても弱音を吐きたくなる。

そうなつては駄目だと喝を入れると、那智はなるべく小さな声で話し始めた。

「……最近、^{シユクタイジ}国家保安省の動きが気になる」

「ドイツが？ 確か、あなたの隊にも政治将校がいたわね」

「ああ。しかも、近いうちに琉球諸島海域にある補給基地の奪還を行うらしい」

「今更……？ もうあそこは数か月以上も前に壊滅したはずじゃ」

「おそらく……真の目的は」

「……東シナ海海底にあるとされる化石燃料か」

那智の顔色から何を言わんとするか読み取ると、大鳳は大げさに手を広げた。

こんな時でも、化石燃料の取り合い合戦が行われているのだ。

どの国よりもより多くの資源を。

国のお偉いがたは何を考えているのだろうか？

東シナ海よりも今は沖縄にいる島民の安全を確保するためにも、絶対防衛線の押し上げに努めるべきではないのか。

「ああ……戦後のことでも考えているんだろうがただの馬鹿だ。今じゃ、あの周辺には深海棲艦の機動基地があるかもしれないとされているのに」

「…馬鹿だよ。まだ、深海棲艦にまともに勝ったこともないのに戦後の世界の覇権争いを始めようとしてるんだもん。それに、ドイツも嘸んでるってことは……これじゃ第二次世界大戦もいつまた始まるかわからないね」

「気をつけろよ、大鳳。お前は、まだまだ後進の育成に励むべき優秀な軍人だ」
「那智こそ気をつけてね。あなたは、世界のために戦うべき大事な存在よ」

政治将校

この部屋は嫌いだ。

窓にはブラインドがかかり、空気は重い。

どこか血生臭さが漂ってきている節さえある。

この部屋、横須賀鎮守府政治特別将校室のどこかに拷問部屋と言われる場所に通じる秘密の通路があるという噂は、存外に本当のことなのかもしれない。

「さて……」

「はい……」

「何か言うことはあるかね？」

海軍の正式軍服である白色ではなく、ダークグレーの制服を着た筋肉質の男は、目の前にいるマックスへと鋭い視線を向けた。

マックスには怯えたような表情が見られるが、同じように逃げられないという諦めた様子さえある。

「申し訳ありません」

「君の言葉はもういい。行動で示したまえ。いつも言ってるだろう」

「はい……必ず」

「君の役目はわかっているだろう？ あの部隊の統制と指揮権の奪取。いつたい、どれだけ時間をかけているのかね？ しかも、どうやら反戦的思想を持つ者もいるらしいではないか」

「本当に申し訳ありません、シュミット大佐」

シュミット・マルクス情報大佐。

若干32歳という若さで、極東にいる全政治将校のトップを務めているエリートだ。

裏には黒い噂が絶えないが、それに言及したものはいない。

かつて、その件について調べていた記者が、新聞局ごと潰されたらしい。

マックスの任務は、ドイツ帝国の技術を全面提供している第666部隊の指揮権を、大日本帝国海軍からドイツ情報局へ奪取することだ。

さらに言うならば、反戦的思想の兵士の摘発も任務としていた。

マックスの頭を悩ませているのは、他でもない吹雪の存在だった。

だが、副隊長でしかない彼女が勝手に吹雪を除隊させることなど出来ない。

「もう、良い。行きたまえ」

「はい。失礼します……」

「そういえば……君の部隊はまた、ヤマトイェーガー戦闘機呐喊を成功させたみたいではないか」

解放されたことに安堵のため息をつき、部屋を出ていこうとするマックスにシユミツトは声をかけた。

「……はい」

「素晴らしいではないか。さすがは、我がドイツ帝国の技術の粋を集めた装備と大日本帝国の精鋭部隊……といったところかね？」

「精鋭……ですか」

「そうだ。さあ、君も胸を張りたまえ。その精鋭の一員であることに」

「……はい」

突然の優しさに、マックスは言葉を失う。

怖い。

率直な感想だった。

この上官の甘い言葉には、必ず何か裏がある。

「自信を持ちたまえ。マックス中尉殿」

「はっ」

「我がドイツ帝国は、今では日本に次ぐ世界第二位の艦娘保有国となっている。それは日本とドイツ帝国、お互いの技術提供があつてこそだ。あのアメリカですら……我々の足元にも及ばない」

「……」

「しつかり、頼むぞ」

そうか。

彼はさらに私に重大な任務をこなしていることを自覚させようとしているのだ。

そして……失敗したら……そのあとは……。

「長話が過ぎたようだ。すまないね。戻りたまえ」

「はっ」

敬礼を返し、マックスが部屋を出ていくの確認するとシユミットは葉巻に火をつけた。

その顔に先ほどまでの優しさなどどこにもない。

「……ふん。小娘め。隊一つまともにコントロールできないとは……使えんな。替えはいくらでもいるというのに」

新たな仲間

1967年10月26日

大日本帝国側の施設にしては比較的綺麗に作られているブリーフィングルームに、第666部隊の面々は集まっていた。

那智以外の全員は椅子に腰かけており、その目の前で那智はこれからの会議での司会を務めようとしていた。

「よし、全員そろったな」

「はっ、全員そろいました」

実質副隊長の役目を担っている五十鈴が、敬礼を返しながら報告をしたことでブリーフィングが始まる。

「かねてより欠員がある我が隊に、補充要員が来ることとなった。と、いつでも彼女は何度も前線に出撃している玄人だ。新人ではない。戦闘機^{ヤクスト・インペガ}の経験もある。全員、良い刺激を受けるように」

「はっ！」

「入ってきてくれ。」

世界的に見ても、戦闘機^{ヤークト・イーガー}の経験がある部隊は少ない。

生存率が極端に低い作戦を行い、貴重な人員と装備を失うのであれば、例え制空権を取られようとも、近海の警備を嚴重にするほうが良いという考えが一般的だ。

ドイツやアメリカ、大日本帝国の命知らずの部隊だけが、今でも制空権確保のために四苦八苦しているのだ。

その事実には思わず眉をひそめたくなるも、吹雪は我慢する。

こんな部隊に異動になるなんて、実質死刑宣告されたも同然だ。

扉が開き、現れたのは黒髪で全身インナーを着た駆逐艦だった。

「なっ！」

なぜか五十鈴が驚きの声を上げる。

一瞬だが、その声に反応した彼女が嫌そうな顔をしたのを、吹雪は見逃さなかった。

彼女は那智に一礼すると、自己紹介を始める。

「秋月型防空駆逐艦、四番艦の初月だ。よろしく」

「初月!!」

「ちっ……」

我慢できなくなったのか、那智の目の前だというのに五十鈴が初月へと飛びかかる。

「おい、離せ！」

ガツチリとホールドされた初月が嫌がり続けるも、五十鈴は熱い愛の抱擁をやめる素振りを見せない。

「知り合いなの？」

「うんうん！」

夕張の問いに五十鈴が嬉しそうに答える。

吹雪の隣では、不知火が目を見開きながら小さく呟く。

「……すごい人が来た」

「すごい人？」

「単艦で、12隻の深海棲艦とやりあって帰ってきた人だから。有名だよ」

「す、すごいね……でも、不知火ちゃんも負けてないよね！」

不知火にもそれなりの逸話がある。

なぜか不知火は、唇を震わせながら吹雪から視線を逸らす。

マックスが我慢できなくなつたのか、怒鳴り声をあげると場がシンと静まり返つた。

「同志中尉！ いい加減にしろ！ 作戦会議中だぞ！」

「す、すみません……」

「ふむ。では、私が補足しよう。初月は以前、『帝国海軍第45機動空母部隊』に所属していたのだが……先の戦いで部隊の主力空母が大破してな。その影響で部隊が解散し

「たため、ここに転属してきたということなのだが……五十鈴とは知り合いなのか？」

「まあ……腐れ縁みたいなものです」

「そうか。その話は、後で詳しく聞かせてもらおう。今日からよろしく頼む、初月少尉」

「はっ！」

「左から順にマックス中尉」

「……政治将校のマックスよ。反戦思想は許さない。覚悟しなさい」

「五十鈴中尉」

「久しぶり！」

「夕張技術中尉」

「よろしくね！」

「不知火少尉」

「不知火だよ。よろしく」

「吹雪少尉」

「よろしくお願ひします！」

「そして、私を含めた6人が第666部隊のメンバーだ」

「はっ！ よろしくお願ひします！」

那智が紹介を終えると、初月は吹雪達へ敬礼をする。

その姿は歴戦の猛者の如く、勇猛果敢なオーラが滲み出ている。

「さて、……さっそくだが次の作戦命令が下った。これより、ブリーフィングを始める」
部屋の明かりが消され、スクリーンが下がっていく。

心なしか、全員の顔が緊張していた。

「今回の作戦は、大規模作戦前に行われる敵艦載機の漸減さんげんが目的だ」

ブリーフィング

「今回の作戦は、大規模作戦前に行われる敵艦載機の漸減が目的だ」

「漸減……？」

聞きなれない単語に吹雪は聞き返す。

那智は何か納得のいったような顔を見ると、説明を始める。

「そうか、吹雪は初めて聞くのか。初月はわかるか？」

「存じております」

「では、吹雪のために簡単に説明をしよう。知つての通り、艦隊決戦において制空権の有無は重要だ。だが、今や我が帝国海軍だけでなく世界中の海軍が、その制空権を維持できていない。理由は簡単だ。深海棲艦の圧倒的な物量に押されているからにほかならない。それを少しでも改善するため、大規模作戦前は、近海の敵空母部隊に戦闘機唎喊をしかけ次回の作戦時に参加する敵艦載機の数を減らしている。今回の作戦の目的がまさにそれだ」

那智は吹雪に視線を向けると話を続ける。

「我々の今回の作戦海域は太平洋南海だ。目標数は、3000だ」

「3000!?!」

「ちよ、多すぎませんか!?!」

目標数3000。

その数を僅か1時間足らずで行えと言っているのだ。

五十鈴と夕張が驚きの声を上げるのもおかしな話ではなかった。

「それほど次回の作戦は、重要だということだ」

「1隻の空母に約50機の艦載機があるとして……およそ60隻ですか……」

「……すげえ」

初月の補足に不知火も目を見開く。

そもそも60隻も敵空母がいる海域に呐喊するなど、本格的に自殺しに行くようなものだ。

大本営はいったい何を考えているのか。

那智以外はその疑問を浮かべていた。

「もちろん、この数字は目標数字であり、作戦終了時間になり次第、目標数に達していかくとも作戦終了とする。わかっていると思うが、戦闘機呐喊の際の制空権は敵が握っている。支援砲撃はあるが、基本的にはそれぞれの部隊の地力で完遂しなくてはならない」

「他の参加部隊にはどのようなものがあるのでしょうか？」

「良い質問だ五十鈴。呉鎮守府から第22水上艦隊、第45戦闘機唎喊艦隊、舞鶴鎮守府から第33機動部隊、第2水上打撃連隊、中国海軍から第88水上大隊が陽動及び戦闘機唎喊に参加する手はずになっている」

「補足だが、兵站に関しては今回は中国海軍との共同作戦となっている」

「……中国海軍」

「大丈夫かな……」

マックスの捕捉に夕張が不安そうな声を上げる。

中国海軍。

世界の中でもかなりの数の戦力を保有している軍事大国の一つである。

しかしながら、その装備のほとんどがソ連から卸された旧式の装備であり質という面ではいささか不安を感じさせることが多々あった。

それでも、圧倒的に数の少ない日本海軍としては中国海軍の力を借りざるを得なくなっていた。

「合計で90隻以上の艦艇、5000人以上の将兵が参加する大規模漸減作戦だ。いいか！ 我ら第666部隊の誇りと意地、そして先立って行った者たちの屈辱を晴らすため、必ず成功させるぞ！」

「おお！」

「部隊則……はじめ！」

「己の力の限りを高め使え！」

「死を望まず拒み、生ある限り立ち続けろ！」

「我らは守護せし者なり！」

「敬礼っ！ ……なおれ！」

「以上だ、解散！」

出合い

「60隻もの敵空母の轟沈か……」

初めての出撃を体験したのが僅か2か月前。

そんな新兵である私が、今回のような大事な作戦に関わらなくてはいけないという事態だけで今の人類が、大日本帝国が危機的状況に置かれていることは理解できた。

未だに、部隊の足を引っ張り続ける私なんかに参加していいのだろうか？

私以外の皆は、誰もがかなりの実力を持っており別部隊に配属されていたら、確実に部隊長クラスへと昇進しているものばかりのはずだ。

そんな中で一人、私なんかいたら……。

大日本帝国海軍創設以来、初となる大規模作戦の前に吹雪は責任に押し潰されそうになつていた。

これからは、もつと激しい戦闘となるだろう。

今回の作戦よりもさらに大規模なものが発令されるかもしれない。

その時、私はどうすればいいのか？ どうすれば誰にも迷惑をかけることのないように振る舞えるのか？

「考えて簡単にでるようなものじゃないよね……」

ため息をつくくと吹雪は自室へと足を進める。

第666部隊は、その任務の危険度の高さから自室が与えられていた。

いつ死ぬかわからない彼女たちへのほんのささやかな気遣いだった。

もつとも、その気遣いのせいで集団生活を強いられている他の部隊からは目の敵にさ

れているわけだが……。

「仲間同士で争つても仕方ないのに……うわっ！」

「おっと」

角を曲がった瞬間、誰かにぶつかり吹雪は転びかける。

しかし、大きな手のひらは吹雪を優しく掴むとゆっくりと引つ張り上げた。

恐る恐る顔を上げる。

そこには、くたびれた作業着を着た中年の男が立っていた。

筋肉質であり、体は今では珍しい武人体質となっている。

作業員の人……？

その格好と、歩いてきた方角に艦娘のドックがあることから吹雪は推測する。

「あ、あの……」

「すまない。よそ見をしていたようだ」

「あ……いえ、私こそごめんなさい」

どうして私にタメ口なのだろうか？ 作業員であるなら、少尉である私にそんな口調を聞くことが出来ないはずなのに……もしかして、国連軍のスパイ……？

訝しむ吹雪に男は笑うと、懐から帽子を取り出した。

純白に輝き、中央に碓のマークがあしらってあるその帽子を横須賀鎮守府で被ることを許される人物を吹雪は一人しか知らない。

「あ……えっ!？」

「驚かせたようだね」

横須賀鎮守府大日本帝国提督、はしもと いさお橋本勲。

陸軍士官学校を卒業して以来、数々の戦場に赴き英雄として崇められた大日本帝国軍の生きながらの軍神の一人。そして、大日本国内最大のクーデターである「血の五月雨」事件を裏で解決したとされる謎の人物。

今では、第666部隊をはじめとする横須賀鎮守府の全艦隊の指揮権を持っている提督となっていた。

陸軍出身の将校が何故、海軍の施設にいるのかは謎だが、その手腕は陸海空軍のどの元帥もが評価していた。

まさに、生まれるべくして生まれた英雄。

軍神橋本勲。はしもと いさお

そんな男が、まさか作業着を着ているなど誰が想像できるといふのだろうか。

吹雪はとつきに敬礼をする。

「し、失礼しました提督！」

「……気にするな」

橋本の口調が変わる。

心なしか、目つきもさきほどよりも鋭いものとなつていふような気がした。

殺気を帯びた破壊の眼。まなこ

睨まれただけで委縮してしまうようなその眼は、先ほどまでの気弱な整備兵からは想像できないほどの圧倒的カリスマ性を秘めていた。

この眼に死地へ行けと命令されたとしても決して歯向かうことはないだろう。むしろ、喜んで行きたくなってしまうような悪魔の魅力を持っている。

「君は……吹雪か？」

「はっ！ 第666戦術的高機動水上部隊所属吹雪少尉であります！」

「そうか……那智には随分と苦勞をかけているようだな」

「も、申し訳ありません！」

「頭を下げることはない。上官に迷惑をかけながらも成長しているのならば、それで良

い。屈強な兵士に必要なものは経験と尊敬すべき上官だ」

「尊敬すべき上官……」

橋本は帽子を脱ぐと再び懐へとしまう。

幾分か顔から険が取れ、優しい顔つきになったように感じるのは私だけではないはずだ。

「何度でもぶつかり、自分の納得する答えを出せ。答えを見出せないものは、迷いに殺されるぞで」

「迷いに殺されるでありますか……」

「今はただ命令に従うだけでも構わない。だが、なぜ従っているのか、従うことで自分は何をなせるのか。飾り物ではない頭であることを証明しろ。人間である証を示せ。それが出来てこそ、一人前の兵士であり艦娘だ」

「一人前になるための条件、のようなものでありますね……」

「誰かを守りたいのなら、まずは生き延びる術を学ぶんだ。戦う力がなれければ、絶望的な戦況をひっくり返すことは出来ない」

「……」

「少し話すぎたようだ」

橋本はそうとうと吹雪の横を通り過ぎる。

不思議な人だった。

提督としての陽と陰と併せ持ったような男。

こういう人が誰からも信用される軍人となるのだろう。

吹雪は、遠くなつていく橋本の背中が見えなくなるまで敬礼を続けた。

琉球諸島大規模漸減作戦始動

10月27日 作戦海域

「はあ……はあ……」

息が乱れる。手が汗ばむ。

緊張していることが自分でもわかる。

このまま、心臓が口から飛び出してきてしまいそうだ。

周りを見る。

精鋭揃いの第666部隊とはいえ、この瞬間は誰の顔にも緊張の色が滲み出していた。

ただ一人、部隊長である那智だけは目をジッと瞑りその時を静かに待っていた。

作戦が開始されて既に1時間以上が立っていたが、未だに前線の状況を把握できてい

ない。

深呼吸をする。

その時だった。唐突に鳴り響く通信機から聞こえてきたのは。

『HQより、第666戦術的機動水上部隊へ、応答せよ』

「第666戦術的機動部隊隊長那智より、HQどうぞ」

『HQより、ブラッディ1。目標である敵空母の護衛部隊が中国海軍所属の第88大隊の追撃を開始。これにより、第22水上艦隊が敵護衛部隊への攻撃を開始した。まもなく、第45戦闘機唵喊艦隊が戦闘機唵喊を東側32地点より開始する。ブラッディ隊は、西地点より存在が確認されている敵大型空母を撃破せよ。繰り返し、西地点より侵入し、敵空母を撃破せよ』

「ブラッディ1了解。聞いていたな、間もなく狩りの時間だ。陣形は楔^{アローヘッド・ワン}型先頭を五十鈴、右翼をマックス中尉、不知火、左翼を私と吹雪が、後方を初月が担当しろ」

「了解！」

『HQより、第666戦術的機動水上部隊へ。定刻となった、作戦行動を開始せよ。繰り返し、作戦行動を開始せよ』

「ブラッディ1了解。行くぞ、お待ちかねの狩りの時間だ！ 一機も残さずたいらげろ！」

那智の掛け声とともに、第666部隊が一斉に行動を開始する。

矢のような陣形は、速度と攻撃力を重視した結果出来たものだ。

前衛に最も索敵能力の秀でた者を置くことで、察知した敵を後続の者が叩いていき一気に戦場を駆け抜ける。

半面、攻撃力に特化したこの陣形は防御力が無いが、そもそも深海棲艦のど真ん中に突っ込んでいくというのに、防御力など気にしてもしかたないことだ。

一秒でも早く「敵戦闘機及び空母を叩き離脱する」、という神業に近い戦闘機唎喊をする際には、この陣形は欠かせないものだった。

敵陣深くに進むにつれ、当然のように深海棲艦の攻撃は激しさを増していった。

『H Qより、ブラッディ1。第45戦闘機唎喊艦隊が敵空母と接敵。繰り返す、敵空母と接敵』

「ブラッディ1了解。不知火、次の空母予測地点を割り出せ」

「ブラッディ4了解。データリンクより、敵の規模及び初動配置の予測を開始……距離およそ6000m先に敵空母機動部隊の姿を確認。大尉、予想通りです」

「よくやった。五十鈴、初月。対空戦闘準備」

「了解」

五十鈴と初月、対空砲の準備を始める。

それに合わせ、残りの者は全周警戒をさらに強めた。

一度艦載機の群れに見つかってしまっただけは、その攻撃から抜けるのは至難の技だ。

それを防ぐためにも、少数で来る敵偵察部隊を早く叩き、母艦の空母に情報を伝えさせない必要があった。

対空戦闘を任される艦娘は、その部隊のエース級の者たちとなるのが通例だ。

「5時の方角から敵爆撃部隊接近」

「よし、マックス中尉、不知火迎撃開始」

「言われなくても……!」

高角斜砲が火を噴く。

重い爆弾を抱えている爆撃機は、回避行動すら取ることを許されず墮ちていく。

取り逃した機体には、初月と五十鈴の追加攻撃が待っていた。

「あははは! どんどん行くよ!」

「やらせはしない!」

「す、すごい……!」

「ブラッディ5! 吹雪ブーツとするな! 来てるぞ!」

「は、はい!」

那智の一喝で我に返ると、吹雪も高角斜砲を構える。

しかし、その必要はなくなっていた。

目の前で煙を出しながらも爆撃のタイミングを窺っていた爆撃機は、隣で普段見せないハイな姿になっている五十鈴が撃ち落としていった。

五十鈴はガッツポーズをする。

どこか嬉しそうな様子に吹雪は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「おい、このままだと空母の群れに何もしないまま」

「構わないさ、中尉。行くぞ！ 全員15cm砲を構えろ！」

「了解！」

「正気かつ!？」

五十鈴はどこか不満そうに、高角斜砲での攻撃を終了させると主砲を構えた。

反対に不知火がどこか嬉しそうにしている。

彼女は、戦闘機を狩るよりも空母を狩るほうが好きなのだ。

本当に変わり者の部隊だ、言葉に出さずに吹雪はソツと心でつぶやいた。

「砲撃開始！」

速度を落とすことなく、空母の群れへと突進を続けながら第666部隊の砲撃が始まる。

敵空母は、どこともなく現れた部隊に混乱したように艦載機を発艦させ始めた。

既に護衛護衛は、陽動部隊の作戦によりこの海域にはいない。

丸裸状態の空母を守るものは、何もない。

雑多な火器で深海棲艦は応戦をするも、彼女たちの前には無力だった。

「魚雷発射用意！ 発射タイミングは各自に任せ。奴らの横っ腹に風穴を開けてやれ

！

「了解！」

すれ違う間際、魚雷が一齐に発射される。

ほぼ0距離射撃からの射撃となった魚雷を許容量以上に食らった敵空母達は、雄たけびをあげながら沈んでいった。

那智は何の感慨もなさそうに轟沈を確認すると、通信を始める。

「ブラッディーより、H Q。敵空母ヲ級の轟沈を確認」

『H Qより、ブラッディー。よくやった。ポイントDー5にて補給を開始し別名を待て』

「ブラッディー了解。全員、ポイントDー5へ向かうぞ。警戒を怠るな」

「よし、あとは別動隊が戦闘機唖喊艦隊を成功させて残りの主力艦隊を叩くだけ」

「無駄な話をするな！ くそっ……黄色サル共め」

「……相変わらず怖い怖い」

「不知火少尉……」

「みなさん……すごいです！ あんなにも、いともたやすく成功させるなんて」

僅かに漂う険悪な雰囲気の中、吹雪は呆けた表情で呟く。

本当にすごい。

これが第666部隊、大日本帝国海軍最強の部隊。

「何言ってるのさ」

「え？」

吹雪の言葉に五十鈴がニヤリと笑う。

「吹雪も、その成功させた部隊の一員なんだよ？ 自信持ちなつて」

「五十鈴中尉……」

「そうだよ。僕たちは場数をこなしているから経験がある。だけど、吹雪はまだまだ新任だ。これかもつと強くなれる可能性を秘めている」

「初月少尉……はい！」

『H Qより、全主力艦隊に告ぐ。現時刻をもって大規模漸減作戦が終了。これより、第二フェイズへ移行。敵戦艦級以下の残存兵力の殲滅作戦を開始する。繰り返す、現時刻をもって……』

「殲滅戦が始まった」

「万事順調だ。」

「気は抜くなよ。なにがあるかは、誰にもわからない。吹雪」

「は、はい！」

「だが、よくやった。最後の雷撃は良かったぞ」

「おお、大尉がほめるなんて」

「あ、ありがとうございます！」

大尉に褒められた。

どれだけぶつかっていても、尊敬に値すべき人に変わりはない。

大尉に褒められることが、どれだけ大きなことかは理解しているつもりだ。

この時、吹雪はまったく予想していなかった。

この後何が起きるかを……。

第666部隊であるならば

「よし、各小隊ごとに残弾が少ない者から補給を開始しろ」

「了解」

空中投下された補給用のコンテナに直接艦装を連結させるような形で、補給を開始する。

艦装という鎧が開発された際に最も問題視されたのは、その稼働方法だった。

ガソリン、電気、太陽光。

様々な方法が試されたが、既にシーレーンが崩壊しようとしていた当時にガソリンの入手は難しく、同じく帝国内ですら行き渡っていない電気を一人の兵士に使うことは渋られた。

そこで考案されたのが、電池パックだ。

作戦地域に太陽光で発電することのできるコンテナをばらまき、残量が少なくなつた部隊はコンテナから補給することで艦装を動かし続ける。

一見非効率に見えるが、実際この方法を採用してからというもの深海棲艦の撃破率が飛躍的に向上していた。

国内では、太陽光発電の装置を国内の産業のために使ってほしいという国民の声も多
くあるが、軍部は完全に黙殺していた、

「吹雪、お前からだ」

「はい」

吹雪は海上に浮かぶ補給コンテナに艦装を連結させる。

各砲の砲弾とマガジンを取り出して、付属している弾薬庫から直接手に取り補充して
いった。

手際の良い者たちはすでに、魚雷の換装まで始めていた。

未だに慣れない手つきで時間をかけている吹雪は、急かすことなく待っている那智に
内心感謝した。

決して言葉には出さない。

出してしまえば罵倒されると思ってしまう。

その大きな背中を超えることの出来る日はいつか来るのだろうか……？

メーターが限界まで振り切ったことを確認すると、吹雪は連結を解除した。

「大尉、補給終了しました」

「よし、交代だ。警戒を怠るな」

「はいっ」

那智が砲弾のマガジンを手にしたその時だった。

ノイズが走り、とぎれとぎれの通信が入る。

今は停戦命令が出ているはずだ。

だが、ノイズと共に聞こえてくる砲撃音は今も戦闘が続いていることを証明していた。

『こち……第45……呐喊艦隊……副隊長……雪……、誰か……返事……さい』

「第45戦闘機呐喊艦隊か？」

「なにかあったみたいだね。」

第45戦闘機呐喊艦隊は、今回第666部隊と同じく敵空母の殲滅を担っている重要な部隊だ。

マックスが難しい顔をする。

吹雪の背中に冷や汗が流れ始めた、

「こちら、特殊連隊第666部隊旗艦那智だ」

『こち……、第45戦闘機……艦隊白雪です……。至急援軍を』

「白雪……もしかして」

「白雪……ちゃん……？」

吹雪は妹の顔を思い浮かべる。

彼女が同じく呐喊艦隊にいるなど初耳だ。

だが、今の声は間違ひなく私の妹の白雪だ。

那智がチラリと吹雪を見る。

「状況を説明せよ。」

『戦闘機呐喊後帰還中、未確認……戦闘機部隊と接触……我が艦隊……甚大な損害を受けた……至急援軍を……頼みます。急いで……ださい』

「わかった、もう少し待つてくれ。H Qに取り次ぐ。ブラッデーよりH Q。第45戦闘機呐喊艦隊が未確認の戦闘機部隊と接触し壊滅的な損害を受けた模様、援軍の許可を求む」

『H Qよりブラッデー。状況は把握している。だが、援軍は許可できない。貴官らは、撤退の遅れている中国海軍第88大隊及び帝国海軍主力部隊第22水上艦隊の援護に回れ。繰り返す、撤退の遅れている中国海軍第88大隊及び帝国海軍主力部隊第22水上艦隊の援護に回れ』

「……ブラッデー、りよう」

「だめです！ このままじゃ……白雪ちゃんたちが……！」

わかっていると言わんばかりの視線を那智は向ける。

マックス以外の誰もが吹雪から顔を背けた。

どう言葉をかければいい思いつかないのだ。

「いい加減にしろ！ 命令に従わないつもりか！」

「でもっ！」

マックスの雄叫びに吹雪が抗議の声を上げる。

やがて諦めたようにため息をつくとき、初月は口を開いた。

身内と同じ部隊で亡くした経験を持つ彼女から出てきた言葉に、吹雪は納得はいかないものの従わざるを得ない何かを感じる。

「辛いことをさせようとしているのはわかる。だが、命令は絶対だ」

「……………」

「多くの艦娘は、姉妹たちの危機に何も出来ないものだ！ 姉妹に限らず、友だろうとも恩師だろうと家族だろうと何も出来ないのだ。見捨てる決断は……勇氣だ」

「私は……私はそれでも……………」

「ちよ、ちよつと我が儘はよくないよ」

珍しく五十鈴が吹雪を窘める^{たしな}。

彼女もまた、同じ戦場で多くの友を失っていた。

「だけどー！」

『H Qよりブラッディー。どうした、応答せよ』

「大尉、私はっ！」

その時、那智の鋭い平手打ちが吹雪の頬に決まった。

吹雪は打たれた頬を抑え、無言で立ち尽くす。

「いいか、肉親だろうと恋人だろうと親友だろうと今は忘れろ。少数の命を捨てて多くの命を救う。それが私たちの使命だ。それが戦争というものだ。それが生き残るための、勝つための手段だ。戦争に……道徳などという贅沢なものはない」

「くっ……っ！」

「ブラッディーよりHQ。了解した。これより撤退の援護に向かう」

桜の木

同日 前線基地 作戦終了後

姉妹仲はすこぶる良いほうだと思う。

もつとも、艦娘となった彼女たちの最初の家族である姉妹という存在を嫌う者などいないだろうが。

戦争の、闘争の、抗争の兵器となった自分を温かく迎え入れてくれる存在。

共に訓練をし、苦しい時も悲しい時も辛い時も手を取り合い、励ましあった存在。

特に吹雪型一番艦である私にとって、ほかの艦よりも多くの妹を持てたこと何物にも代えがたい幸せだと思っていた。

そう、幸せだと思っていたのだ……。

○●○○●○

部隊の誰も口を開くことなく、ドックからブリーフィングルームへの長い道を歩いていた。

廊下には多くの負傷した将兵、艦娘が横たわっている。

ある者は手や足がなく、ある者は腹から内臓を出し、ある者は全身血まみれでピクリ

とも動きはしていない。

生と死が入り交じる場所。

普段は、幾分か活気のある場所がまさに地獄と化していた。

野戦病院に入りきららない、生きながら苦しむ者たちの巣窟。

その中の一人が、吹雪の姿を確認すると走ってきた。

「深雪ちゃん……」

吹雪が名前を言い終わらぬうちに、鋭い平手打ちが吹雪の頬に炸裂する。

いったい今日、何度目になるのだろうか。

呆然としながら、どうしようもないことを考えていると思う。

恐る恐る深雪の顔を吹雪は見る。

そこには怒りと悲しみが混じり合った、複雑な表情を浮かべた深雪がいた。

「……深雪ちゃん」

「どうしてだあ！ お前が……お前が助けに来ていたら！ 白雪は……白雪は死なずに

済んだんだっ！」

「そ、それは……」

「白雪だけじゃない、磯波も、曙も……部隊のみんなが死んだのはお前のせいだ！」

「だ、だから！」

「なにが特型駆逐艦だよ！　なにが吹雪型だよ！　なにが私たちのお姉ちゃんだよ！　一人だけ、特殊部隊に行つていい気になつてるんじゃないやねえ！　妹を見捨てるような奴は姉貴なんかじゃない！」

その言葉に吹雪は何も言い返すことができなかった。

深雪はさらに大粒の涙を流しながら訴え続ける。

「お前たちは……獣だ。味方すら見捨てる……それをお前たちは平気で正しいっていう。獣……化け物め！」

「そ、そんなことはっ！」

「二度と帰つてくるな！　お前なんか……お前なんか大嫌いだ！」

「深雪ちゃんっ！」

深雪はそう言う走り去つていった。

あとを追うことはできない。追つてはいけないと思う。

吹雪は一人涙を流し始めた。

こうなるかもしれないことはわかつていたはずだ。

わかつていても、それを理解して納得することとは別物のはずだ。

「私だつて……私だつてしたくしてしたわけじゃないのに……どうして」

「吹雪少尉」

そんな吹雪の肩に初月がそつと手をのせる。

ビクツと震わせながらも吹雪は初月の顔を見た。

普段の厳しい顔つきからは想像できない柔和な表情を浮かべた初月が居る。

「少し、付き合ってくれないか。大尉、いいでしょうか」

「かまわん」

那智はそう言うのと部隊を引き連れどこかへ去っていった。

「さあ、行こうか」

吹雪は初月の後に続き、階段を上り始める。

深雪に叩かれた頬がまだジンジンと痛み続けていた。

体が痛いのか、それとも心が痛いのか。理解が追い付かない。

「ついた」

初月に連れられ屋上へと上がる。

日は西に傾き始めていた。

綺麗なオレンジ色が空に広がり、それを映すかのように海もオレンジ色に染まってくる。
美しい夕焼けだ。

「君は今回の件について、大尉を恨んでいるかい」

「え……」

「大尉があの時、第45戦闘機呐喊艦隊の救援に向かつていれば、こうはならなかっただろう」

「そうですね。だけど……あの際の大尉を判断は間違つて……間違つてなんかないです。私たちは……少数よりもより多くの命を救ったんですから……！ 救えたんですから！ だから……」

「そう、泣きながら言うな」

初月の手が吹雪の頭の上に乗る。

優しく大きくて暖かい手だった。

背も歳もそれほど大差はないはずだ。それでも吹雪は、初月の姿に何か大きなものを感じていた。

「……2年前。僕がいた部隊が壊滅した」

「え……」

「哨戒任務を終え帰投している時だった。近くにいる部隊から救援要請が来た。あの時、僕は姉妹3人しかいなかった。とてもじゃないが、自分たちだけを守るだけで精一杯の戦力しかない。だけど、命は見捨てられない、などとほざきながら旗艦だった僕は、

秋月と照月……ああ、姉妹の名前なんだけどの意見を遮って現場へ向かった」

「どう……なつたんですか」

「救助を求めた部隊の救出に成功。あとは本当に帰るだけ。そんな時だった敵の主力艦隊に出会ったのは」

「主力艦隊……」

「みんな一生懸命に戦った。だけど3対15の戦いだ。圧倒的な力の前にどうにかなるものか。目の前でまずは、照月が。次に秋月が沈んでいった。僕の目の前で」

「目の……前で」

「僕は必死になって戦った。例の1対12の噂。あれは、この時のものさ。数分だったか数十分だったのか、それとも数時間だったのか。ハッキリとはわからない。だけど、僕は立っていた。独り……血まみれで立っていたんだ」

初月は夕日を見るのをやめ、吹雪に視線を向ける。

何か光るようなものが瞳にあるのは勘違いではないだろう。

彼女は、自分の選択で姉妹を失っているのだ。私も、大尉を説得するという選択を捨ててしまったからこそ、姉妹を失ったのだ。

「鎮守府に戻って初めに思ったこととは何だと思う？」

「……わかりません」

「姉妹はいつ帰ってくるのかな、だ」

「現実を受け入れられなかった、受け入れたくなかった。僕の間違った独断のせい、僕の判断ミスで姉妹を沈めたなんて認めたくなかった。だけど……彼女たちが還ってくることはなかった」

「……少尉」

「現実なんてそんなものさ。みんな、必ずどこかで大切な人をなくしている。僕は、実は幸せ者なんだ。姉妹が、どうして、どこで、どのように逝ってしまったのか知っているんだから。この激戦りの中。そんな些細な事、姉妹がどこで死んだかさえない艦娘や人は本当に多い」

「……何も知らない人が多い。」

「いいかい、吹雪。助けたいって気持ちはなくしちゃだめだ。その気持ちはこれから、どんな時でも必要なものになるから。だけど、助けられなかったなんて気持ちは忘れるべきだよ。そんな後ろ向きな思い持っても……誰も喜ばないからね」

「……前を向き続けるのは生者の義務」

初月は何も言わずに笑みを返し、吹雪の後ろを指す。

吹雪が振り返ると、驚いた顔をしたマックスが立っていた。

マックスは咳ばらいをすると、レコーダーを吹雪へと手渡す。

不審に思うも、マックスにせかさされ、吹雪はレコーダーのスイッチを押した。砂嵐と共に、二度と聞くことはないと思っていた声が聞こえてくる。

『吹雪お姉ちゃん……任務頑張つてね。本当は最後にもう一度会いたかったな……。だけれど、しようがないよ。私は恨んでないよ？ お姉ちゃんが、より多くの命を救うならば……すごく嬉しいよ。だから……お姉ちゃんも前向きに生きてね？ お姉ちゃんのこと大好きだよ……。深雪はもしかして、お姉ちゃんに突つかかるかもしれない……。だけれど、受け止めてあげてください。お姉ちゃんも辛いかもしれない……。だけれど私は……深雪を置いて行ったのは私の責任だから……。深雪も辛いはずなんだ……。お姉ちゃん……私を助けようとお願ひしてくれてありがとう……。平和になったらもう一度会おうね。那智大尉……最後の言葉を残させてくれて……。ありがとうございます。お姉ちゃん……またね』

「く……う……う……う……」

「白雪少尉からの伝言だ。確かに渡したからな」

「中尉！ 白雪ちゃんは……幸せに死ねたのでしょうか……？」

「……死ぬことに幸せなんてあつてたまるか。だけれど……彼女はきつと吹雪少尉に言葉を残せて、満足したはずだ。あとは、貴様がどう生きるか次第だ」

「はい……！ マックス中尉はお優しいんですね」

「こ、これは公務じゃないからだ！ ……大尉には私から言っておく。後で来い」

吹雪は無言でうなずくと、白雪の言葉を再び噛みしめながら録音を聞き直し始めた。その目には大粒の涙が流れていた。

横浜鎮守府では、作戦で散っていった者たちを正門の前の桜の木に埋めるらしい。

もちろん、死体がなくとも彼女たちの意思は、死後そこに集まり、平和な世界を夢見続けるのだ。

「会いに行こう」

忍び寄る影

「ふん。噂よりも汚らしい所ね」

「仕方ありませんよ。所詮は、野蛮な黄色猿の国ですから」

金髪の女性のボヤキに、茶髪の少女がヤレヤレといった様子で答える。

彼女たちの所属するドイツ海軍の方が、より最新の設備が整っており衛生環境も良かった。

兵の士気を高めるためには、多少金がかかったとしても一定の水準を保った清潔な環境が必要だということに未だこの国は気が付いていないのだろうか？

「愚かな国だ」

「お姉さま、そうおっしゃらないでください。この国の諺ことわざに障子に耳あり壁に目ありというものがありません。どこで誰が聞いているかわかりませんよ。何せ、敵国でスパイが悠々と闊歩できる数少ない国なのですから」

「それを言うならば、障子に目あり壁に耳ありだ」

銀髪の少女が小さく突っ込みを入れる。

彼女たちは排気管が？き出しのままの無機質な廊下を進み続けた。

「ユーはどうした」

「ドックの方を見に行くと行っていたが。レーベを監視につけたから、おかしい真似はしないだろう」

「相変わらず勝手な奴だ。まあ、いい。コチラはコチラで始めようか」

「もちろんですよ。お姉さま」

やがて重厚な樫の木でできた扉の前にやってくると、見張りの兵が身分証の提示を求めてきた。素直に差し出すと、兵士は見事な敬礼をする。

こんなところまで日本人の生真面目さというものが出ているのだろうか？

思わず込み上げてきた嘲笑に似た笑みを銀髪の少女は抑えることができなかった。

「ビスマルク准佐にグラーフ中尉、プリンツ少尉でありますね？」

「そうだ、シユミット大佐はいっらしやるか？」

「はっ。閣下はお待ちであります」

「ご苦労」

「お疲れ様です」

「……」

「何をきよろきよろしている」

忙しなく動く兵士の視線に我慢できなくなったグラーフが質問をする。

兵士は視線を止めると、深々と頭を下げた。

「し、失礼いたしました！ 報告によると、レーベ少尉とユー特務中尉もいらつしやると聞いていたのですが……いったいどちらに？」

「彼女たちは今、別任務に当たっている。遅れて来るだろう」

「別任務……でありますか？」

「内容を知る権限をお前は持っていません。理解……できますね？」

軍刀に手をかけ、すぐむプリンツに兵士はただ平謝りを繰り返した。

普段はおっとりとした性格であり、とてもドイツ海軍親衛隊特務機関^{トイテン}の一員には見えないプリンツであるが、特殊な訓練を受けているだけあり、オンとオフの使い分けが上手い。

兵士は最後にもう一度敬礼をすると、扉を開き彼女たちを中へと案内した。

「も、申し訳ありませんでした！ こちらへ」

扉が閉まり兵士の姿が見えなくなるのを確認すると、グラーフは悪態をつく。

「ふん。サルはすぐに謝る」

「ビスマルクお姉さまもグラーフ中尉も、あまりいじめてはいけませんよ」

「プリンツが言えるような立場でもないだろう」

「そんなことはありませんよ」

回廊を歩いていく。照明は一切なく、ほぼ暗闇と言つても過言ではない。

「よく来た」

開けた場所に出る。

そこには、数々の書物と立派な机を設えた一室があつた。

窓から見える景色は、横須賀基地の港を一望できるところになつている。回廊はわずかに傾斜がついており、グラフ達は今、3階に当たる場所にいた。

書類を机の上に放り投げ、ダークグレーの政治将校士官の制服を着たシュミットが鋭い視線を彼女たちに向ける。

いくつもの戦場を渡ってきた艦娘である彼女たちも、シュミットのその視線には思わず震え上がってしまう。

「さて。君たちを呼んだのはほかでもない。ついに、この国でも決行することとなつた」
「では……横須賀鎮守府はその拠点と理解していいのでしょうか？」

「そうだな。それは少し違う。ここが堕ちれば、帝国海軍は滅亡する。いや、国連軍との共同基地となつている横須賀が我々の色に染まつたとき……どうなるかは想像に難しくないだろう」

「ドイツが世界を握る」

「国連軍などと名ばかりだが、それでも世界を統べている機関に変わりはない。その国

連の施設が我々の物になるのだ。もはや、どう足掻こうともドイツが世界を取ったという事実は動かせん」

「いかにも」

「さつそくだが、始めてくれ。目障りな特殊部隊は今、いない」

シユミットがニヤリと笑う。

「マックスはどうしますか？ 確か、今はここの政治将校をしていると聞いていますが」

「ああ、気になるかグラーフ」

「同志ですのぞ」

「……使える、と言えば嘘となるな。だが、利用価値は十分にある。彼女もこちらへ引き

込め」

「了解」
ヤポール

「さて……血の五月雨事件の再来といこうじゃないか」

沖繩戦線放棄

10月28日 琉球諸島前線基地 黒の艦隊司令室

司令室は外の喧騒とは打って変わり、静かなものだった。

まるでここだけ、時の流れが何倍も遅く流れているかのようだ。

簡素な椅子ながらも、それなりの威厳をまとった椅子に深々と座った橋本に、那智は昨日の戦果を報告していた。既に耳に入っていることもあるだろうが、橋本は口を挟むことなく最後まで耳を傾けている。

「黒の艦隊は作戦予想以上の敵の撃破に成功。さらに、撤退中の部隊と交戦していた敵主力艦隊級の撃破にも成功。琉球諸島戦線に展開していた、敵機動部隊は大損害を被つたと考えている」

「そうだな。大方、その報告に間違いはないだろう。尤も、我々の戦果が公になることは一生ないがな」

「そんなことを今さら気にしたりはしない。それよりも、大方正しいとはどういう意味だ？」

「……第45戦闘機唎喊艦隊が壊滅したのは残念だった」

「そうだな。帝国海軍の呐喊部隊は数が少ない。そのうえで大隊規模の損失は相当な傷となるはずだ。他国の部隊を無事に返すために必要な犠牲と言うには……大きすぎる」
そうだな、と小さくため息をつく。

橋本は引き出しの中から特秘と書かれた書類を出すと、那智へと渡す。一部隊の隊長でしかない彼女ならば、本来見ることのできない作戦指令書だ。

そこには、信じられないような内容が書かれていた。

「これはいつ……」

「先ほど使者から届いた。上はお前たちの持ち場は綺麗に片づけるはできたが、第45戦闘機呐喊艦隊に限らず、各戦域で人類は敗北したのだよ。もう、いくつかの離島は深海棲艦の手に落ちており、前線基地と姿を変えられているだろう」

「だから、この戦線を……沖繩を放棄するというのかっ!」

「そうだ。沖繩が落ちた時、次に狙われるのは九州最南端の鹿児島だろう。九州全体が前線基地とされた場合、本土決戦となることは間違いない」

「いったい何だこの茶番は。今回の大規模漸減作戦を実行する前に退却など……それでは、命を落とした者たちは無駄死にじゃないか!」

「那智……」

橋本の悲痛な顔を見て、那智は落ち着きを取り戻した。

陸軍出身であり、なおかつ特殊部隊の提督である橋本が通常、作戦会議に呼ばれることはない。陸軍の犬は上の命令に黙って聞いていなければならない、というのが今の実態だった。

そんな中でも、横須賀鎮守府の提督は珍しいの中に入るのだろう。彼は、毎回欠かさず橋本を作戦会議に読んでいた。

「第45戦闘機呐喊艦隊は優秀な部隊だったと聞いている。それにあそこには……」

「その件は、初月とマックス中尉がどうかしてくれている……はずだ」

「政治将校殿が？意外だな」

「通信を録音できるのは、部隊長と政治将校の特権だからな。それに、マックスはこちらへと入りたがっているように見える」

「なるほど。彼女も、人間らしいところがあるじゃないか。それで、お前はいいのか？」

「……私が行ったところで、出来ることは落ち度を責める説教くらいなものだ」

「何を言っているのだ……まったく」

部隊長である、私が吹雪のサポートに行くのは当然のことだ。しかし、足が彼女のほうへ動こうとしない。あの澄んだ目を見なくてはいけないと、人間として正しいことを言っている彼女の姿を見ることがとても苦痛だった。思い出したくない、それでも忘れ

てはいけない姉を見ているようだったからだ。

これだけ戦場に出ているのに、小娘一人に恐れているなんてな。

自虐的な笑みが浮かぶ。

それと同じく、橋本にも今、深海棲艦との闘い以上に気がかりなことがあった。

「今回の大規模漸減作戦は、中国海軍が半数以上轟沈、第45戦闘機唎喊艦隊全滅。中国海軍はいつものことだが、しかしながら、あの物量国家はすぐに態勢を整えるだろ」

「そうだろうな」

「大営本部は、琉球諸島戦線を放棄し、我々を太平洋防衛にあてるようだ。現在、鬼級を旗艦とする部隊の侵攻が認められているらしい」

「太平洋だどっ?! あそこは」

「驚くのも無理はない。そもそも、大規模作戦に参加した部隊には数週間の休暇を与えるものだからな。そして、太平洋といえど今回の戦場の次にホットな場所だ。我々に頼らなくてははいけないほど、本部も焦らなくてははいけない事情があるということだろう」

「なるほどな……」

「さらに、今回の作戦には大洗鎮守府から第六駆逐艦を含む高速機動大隊、銚子鎮守府からは第3主力艦隊、仙台鎮守府からは第46空母機動大隊・第71整備機動師団、大間鎮守府から第21主力艦隊、第12空母護衛及び機動艦隊が徴収された」

那智は、橋本のお話を聞きながらと眉をひそめる。

どうにもおかしな話だ。

橋本は気づいたか、と言わんばかりに那智を見つめ返した。

「東日本ばかりだな。それでは、太平洋側の最終国土防衛ラインを維持できない。負けたらどうするつもりなんだ」

「ああ。ただの迎撃作戦の割には規模がでかく、それに東日本の鎮守府からばかり選ばれている。鬼級だとは言え警戒しすぎだ。この部隊選択の裏にはシユタージが絡んでいる、なんて噂もあるほどだ」

「そういえば、今は特使などと名前だけのドイツ艦娘達が来ていたな」

「ああ。まずは、至急横須賀鎮守府に戻ってもらいたい。ひと悶着ありそうだ」

「了解した。」

「気を付けてくれ。先の大規模漸減にはドイツ海軍も参加を表明したが、帝国海軍が断ったことにより一触即発の事態になったばかりだ。今や日本とドイツはまた戦争を始めてもおおかしくないんだからな」

蠢く影

10月29日 横須賀鎮守府国連軍提督室

「失礼します」

「入りたまえ」

横須賀鎮守府国連海軍提督葛城雅治かつらぎまさはるはいつもの如く、本を片手に大鳳を招き入れた。

部屋の扉はいっ見ても開け放たれており、不用心すぎると何度も大鳳は注意したがその癖を治すつもりはないようだった。

「お呼びでしようか、提督」

「うむ、大鳳。最近はどうかね？」

「どう、とは……？」

「色々騒がしくなってきたのではないか？」

「……ここでその話は」

「元秘書艦としての意見を聞きたくてね」

「私が秘書艦を務めたのは数か月だけです」

懐かしいことを言うものだ。

かつて大日本帝国海軍のエースの一人として海を駆けていたが、妙高が死んだことをきっかけに国連軍へ転属となった頃の話だった。

何をして身が入らず、無意味な毎日を過ごしていた私に葛城は「秘書艦にならないか」と声をかけてきた。

はじめは何かの冗談かと思ったが、何回も来るアプローチについては根負けして秘書艦へと私はなった。

慣れない事務仕事は、普段使っている神経とは別のものを使い苦労したが今では良い思い出。しかし、現場氣質が抜けない私はある日秘書艦を辞めたいと申し出た。

最初こそ悲しそうな顔をしていた葛城だったが、今の教導隊への推薦状を書き笑顔で送り出してくれたのも、また彼だった。

葛城には感謝してもしきれない恩があると大鳳は感じていた。

「正直、現場に出ている者たちは人類の敗北を悟っています。私が教えていた教え子たちも、どこか戦うためではなく、死に行くための覚悟を決め卒業していきましたし」
「……そうか。黒の艦隊の活躍だけでは、希望を見せることはできないか」

「彼女たちの働きの裏にある死体の数があまりにも多すぎます」

「覚悟はしていたが……橋本あいつには悪いが、やはり我々も正式に動き出さなくてはいけないようだ」

「そうですね。下では……ドイツからの特使が来ていますし」

「私のことを言っているのかね」

突然の声に大鳳は振り返る。

ブロンドの髪をたなびかせながら、ビスマルクが堂々と提督室へと入ってくる。

嫌みの一つでも言おうかと思つたが、葛城が目で制しているのに気が付くと、大鳳は口をつぐんだ。

その様子を見て、何がおかしいのかビスマルクはニヤリと笑みを浮かべる。

「お初目にかかります。私、ドイツ海軍特使のビスマルク大尉です」

「横須賀鎮守府国連海軍提督の葛城中佐だ。それで……突然、なんの用かね？」

「今度の太平洋側作戦に、ぜひともご協力をと思ひまして」

「あいにくだが、国連軍は国連総会の決議を取らなくては動かせないのだよ」

「それならご安心を。ここに命令書がありますので」

「なに……？」

ビスマルクが一枚の書類を机の上に置く。

それは真正正銘、国連総本部からの指令であつた。

だが、奇妙なことに具体的な艦娘や編成まで書かれており、何か裏に意図があるのではないかと疑いたくなるほどであつた。

「私も行くのですか……?」

「かつての海の撃墜女王の活躍を期待しているぞ。大鳳軍曹」

「……提督」

「仕方あるまい。これは紛れもない本物だ。どうやってこいつを作ったのかは知らないが……今は従わざるを得ないだろう」

「おかしな言い方はやめていただきたい。我らドイツがどうこうしたわけではないのですから」

「……よく言う」

大鳳の呟きをビスマルクは聞き逃さなかつた。

目にもとまらぬ速さで大鳳を床へ倒すと、腰のホルスターからワルサーを取り出し大鳳のこめかみへと押し当てる。

どう足掻いてもビスマルクの固め技から大鳳は逃れることはできなかつた。

「口を慎め、サルどもが! 貴様らのクーデターを沈めてやった恩を忘れたのか? 我がドイツこそが世界の覇権を握るのにふさわしいのだよ」

「まだ……そんなことをっ!」

「ビスマルク大尉。大鳳軍曹が気に障るようなことを言ったのなら謝罪しよう。それでもだ、ここで銃を取り出すということがどういふことか……本当に理解しているんだ

な？ 国連側の兵士を撃つてみる。ドイツごと潰されるぞ」

「……これは失礼しました。私としたことがついカツとなつてしまいました。ここで退散させていただきます」

ビスマルクはそう言うのと扉のほうへと歩き始める。

「そうそう。まもなく、沖繩戦線の負傷者たちが帰つてくるようですね。その数はあまりに多いとか……微力ながら、我がドイツ海軍も手当てをお手伝いしますよ」

「余計なことは無用だ」

「そうおっしゃらずに」

高笑いをしながら去っていくビスマルクに葛城はため息をつく。

「血の五月雨」という帝国最大のクーデターを鎮圧するのに協力して以来、ドイツはどこか日本を見下すような態度を取っていた。

「私のせいで」

「気にするな。それよりも大鳳」

「……はい」

「死ぬなよ。必ず生きて帰ってこい。お前とは、まだまだ話すことがたくさんある」

「……当り前じゃないですか。教官を辞めたら、今度こそ身も心も秘書艦にする予定なんですから。まだ、その席は空いていますよね？」

「ああ……しっかり取ってあるぞ」

沖ノ鳥島前線編

黒への期待

11月1日

僅かな休暇を得ることも叶わず、黒の艦隊の面々は太平洋側戦線において重要な要所である「南沖の鳥島基地」へと派遣されていた。

常に臨戦態勢ということからなのか、鎮守府よりも全体的にピリついた雰囲気は漂っている。

それでも、極東の防衛拠点である日本の最後の砦ということもあり、帝国海軍だけではなく、連合国軍の海軍もその基地に常時いるからなのか、国連軍と帝国海軍という軍の垣根を超えた連携には舌を巻かざる負えなかった。

簡素な作りの司令室には、一人の女性がいた。

かつて、その高い攻撃力から「狩人」と言われ崇められた艦娘。

「お久しぶりです、提督」

「……やめてください。私は今では、あなたの提督ではありませんよ長門中佐」

「……そうか。なんだか照れくさいものだな。かつての上官にこうしてまた出会えると

いうのは」

「そんなこと言わないでくださいよ……第666戦術的高機動部隊、ただいま着任いたしました」

「南沖ノ鳥島基地司令長門だ」

吹雪も話だけは聞いたことがあった。

南沖ノ鳥島基地は、女性士官が司令をつとめているという噂は本当だったらしい。

見事なまでの敬礼をお互いにかわし、長門は机の上に広げてある地図へと目を落とし、黒と白の駒が置かれており、それが人類側と深海棲艦側を表しているのは一目瞭然だった。

「まさか、ここの司令になつているとは思いませんでしたよ」

「……そうだな。負傷した私は二度と艦娘として出撃することは叶わなくなった。だが、どうやら私の戦術知識が買われたようだね。こうして、貧乏くじを引かされているわけだ」

「では、内地で勤務したかったと？」

「馬鹿を言うな。私は一生、前線で戦い続ける女だ」

長門がニヤリと笑う。

橋本もその反応を予測していたのだろう。安心したような顔を見ると、彼もまた地図

へと視線を落とした。

「今の大日本帝国の状況を整理する。まずは北だが……正直、ソ連頼みだ。北海道に配備されている第4旅団も善戦しているが、ソ連の武力介入がなくなれば、一気に前線は瓦解するだろう。同じく、西の私たちも同じことが言える。後ろの補給線が絶たれば、数日と持たず太平洋側から本土に深海棲艦は上陸を開始する」

「そして、南は先の沖繩戦線崩壊によつて深海棲艦は鹿児島へ向けて進撃中。残存した沖繩戦線防衛隊の活躍で、今は何とか食い止めているが……いつまで持つかまったく予想できない。強いて言うならば、東側が比較的安全といえるか……」

「そうだな。どういうわけか、今回は太平洋側に面している鎮守府の兵力が南沖ノ鳥島基地に集中している。万が一にでもこの前線を抜かれたら……」

「太平洋側から深海棲艦は一気に上陸。首都東京は崩壊、大日本帝国の滅亡……か」
わかつていても言葉にされると重いものがあつた。

ただでさえ、戦力の一点集中を行っている今、どれだけ重大な任務を与えられているかを吹雪は再認識した。

那智や不知火、初月はもちろんのことムードメーカーである五十鈴も今ばかりは、緊張の色を浮かべている。

「今回、我々に下された命令は接近中である鬼級の完全撃破だ。そのためにわざわざな

けなしの戦力をこちらに回してもらったわけなのだが……」

長門が不意に言葉を切る。

その表情を見るに、彼女のこの命令に疑問を抱いているのだろう。あるいは、裏でシユタージが絡んでいるかもしれないことまで知っているかもしれない。

マックスがいる前では不用意なことを言うことはできない。

橋本は那智と目くばせをすると口を噤んだ。

「なににせよ、合同作戦会議は明日からだ。今日は一日休んでくれ。ああ、そうそう。教導隊からこちらへ来てくれている者たちもいる。ありがたい話だ」

「それって……」

那智は言いかけると口を閉じた。

ますますおかしな話だ。

本土決戦ならば話は別にせよ、前線基地にエリート中のエリートである教導隊を派遣するものなのだろうか？

疑問を抱えたまま、橋本を残し黒の艦隊は長門の部屋を後にした。

不穏な予感

「行ったか」

「……そのようだ」

「長門中佐」

「勘弁してくれ。提督と二人きりの時くらい、長門でいい。私は、あなたに提督と呼ばれるほど立派な人間じゃない。私はあの事件で……」

長門はそこで言葉を切ると俯いた。

橋本と長門は最初、敵同士として出会った。

かたや海軍の反乱を鎮圧するためのいち指揮官として。そして、かたや不条理な艦娘の運命を変えようと立ち上がった者として。

事件の結末は至極簡単なものであり、簡単だからこそ複雑でもあった。

首謀者の一人の暗殺。

今でも誰が妙高を殺したのかはわからない。

一対一の話の場での静かな殺人。

妙高を失ったことで統率を失った蜂起軍は散り散りになりながら逃げ出した。

しかし、長門の率いていた部隊だけは最後まで組織的反抗を続けていた。最終的には橋本の率いる特殊鎮圧部隊によって全員捕縛されたわけだが、長門の高い指揮能力を橋本は買っていた。

やや強引とも言える手段で独房から連れ出すと、橋本は長門を自分の部下にした。それから2年。

様々なことがあったが、橋本と長門は最高のパートナーになれたかもしれなかった。

「懐かしいな」

「そうだ。私がああの海域でケガさえしなければ」

「過ぎたことは忘れてくれ。命あつての体だ。本当になくしてはいけないものを見失うな」

「……わかつている」

そう言うのと長門は急に部屋の隅を指差した。

それだけで橋本は何が言いたいかを察する。

この部屋は盗聴されている。

おおよそ、誰が盗聴しているかは見当がつく。いつからかまでは知らないが、ドイツの政治将校が我が物顔で仕掛けていったのだろう。

机の上に置いてある紙に橋本はメッセージを書くとき長門へと手渡した。

筆談という原始的な方法だが、わざわざ場所を変えなくても良いという点では最良の手段だ。

『それで。今回の作戦の立案者は』

『参謀本部に問い合わせたが有耶無耶にされて終わってしまった。提督は何か知っているか?』

『裏にシユタージが絡んでいることくらいだ。今、横須賀鎮守府にドイツから特使という名目で艦娘が来ているが……』

『威力偵察。あるいは何かしらの妨害工作を仕掛けてきたと?』

『艦娘技術が真に浸透しているのはドイツと日本だけだ。アメリカでさえ、まだ一步出遅れている。今のうちに日本を潰し、艦娘技術という絶対的な力でドイツは世界を握りたいのだろう。愚かなことだ。人間同士の戦争などしているほど暇ではないのに』

橋本は筆を置くとため息をついた。

本当に愚かしい。

「最善を尽くし、ここを守り切る他に道はないか」

「ああ……頼むぞ提督。頼りにしている」

「よしてくれ」

橋本は何か言いたそうにするも、そこで口をつぐむ。

よしてくれ。俺はそんなに立派な人間じゃないんだ。

○●○○●○

夜の人影はない。

深海棲艦との戦いが始まってからというもの、極端に外国からの物資が手に入らなくなったため、大日本帝国では「欲しがりません、勝つまでは」などという標語が流行っているほど、国内流通は落ち込んでいた。

だが、闇を好む人間にとっては国家そのものが希望を見失い暗くなっているほうが都合だ。

現に、公園のベンチで一人意気揚々と人を待ち続けている彼女は、今の戦いが永遠に続けば良いと思っている。

その彼女の真後ろにあるベンチに誰かが腰かけた。

数秒の静寂の後、彼女……唯一陸軍に所属している艦娘「あきつ丸」は口を開いた。

「お待ちしていたでありますよ、プリンツ少尉」

「あまり長居はしたくありません。早く情報を」

「まあまあ、そう急かすことはないでありますよ。まずは、お互いの親睦を深めるために

……」

「ふざけているのですか？」

あきつ丸の言葉を遮るようにプリンツが睨みを聞かせながら、あきつ丸の背中に銃口を突きつける。

あきつ丸はやれやれとでも言いたげに首を振りながら、紙の束をプリンツへと投げつけた。

あきつ丸なりのせめてもの仕返しだ。

「先の沖繩戦線においての戦死者とその親類の現状でありますな」

「……深雪」

「圧倒的な武功と実力を持つ黒の艦隊を信仰するものは存外に多い。では、弱点はどこにあるか？」

それは、命令のためならば仲間であろうとも姉妹であろうとも切り捨ててしまう、その冷酷さ。ここにつけているしかあるまい」

「なるほど、わかりましたよ。要は、私たちに深雪かのじよを利用しろとおっしゃるのですね」

「さてさて……それは断言しかねるでありますよ」

「まあ、いいでしょう。わかりました。まったく、あなた方は変わっている」

「変わっている？」

あきつ丸はきよとんと首を傾げた。

それが演技に見えたからなのか？ それとも、本当に自覚がなくやっていることに対

して不快感を持ったからのか、プリンツはあからさまに顔をしかめた。

「同じ日本の軍人でしょう。どうして海軍を潰したいのですか？」

「少尉、簡単なお話です。一国の中に最強の軍は一つあれば十分。我々陸軍がすべての兵を統率するべきだと考えているだけでありますよ。ゆえに、私は裏で動き回りますとも。いつか日の目を見る日を夢見て」

激突

『お前なんかお姉ちゃんじゃない!』

「違う……違うよ。私だってあなた達を助けたいって思ってた……」

『それでも来なかった! 現実には来なかったんだ!』

「深雪ちゃん……」

「吹雪、なにをボサツとしている」

「は、はい! すみません!」

不知火の言葉で我に返ると、吹雪もまた全周警戒を始める。

深雪からかけられた言葉が頭から離れない。同時に、自分もまた身内を任務のために見捨てたという自責の念に駆られる。仕方のないことであり、一度は吹っ切れたはずだったがそう簡単に彼女の言葉を受け止めることはできない。

帝国海軍側の先遣部隊が深海棲艦と接敵したのが2時間前。そこから、第一次機動艦隊が派遣され、今は、威力偵察として黒の艦隊と仙台鎮守府から派遣された艦娘達が大海原を駆けていた。

絶対防御線の遙か手前で敵を見つけることができたのはとても大きい。防御線まで

の間に四重に部隊を展開することができたことにより、今や沖ノ鳥島前線基地そのものが堅牢な要塞と化していた。

先遣部隊の派遣のタイミングや迅速な対応。その功労者は間違いなく、長門である。

「間もなく接敵海域に突入します」

「全員、警戒を厳に。必ず現れるぞ」

那智の言葉を聞き返事をする。

硝煙と血の匂いがここで激戦が繰り広げられていたことを物語っている。僅かに立ち上っている煙を抜けた先で黒の艦隊が見たものは……

「う、？でしよ……？」

「馬鹿なっ！ 完璧な指示だったではないか！」

「那智大尉！ 上空2000！ 敵艦上爆撃機！」

「五十鈴、吹雪、不知火は対空砲一斉射！ 残りは目の前のハイエナどもを食らうぞ！」
先遣部隊と第一次機動艦隊全滅。

目の前に広がっている惨状がいやでもそう伝えていた。深海棲艦達は海に浮かんでいる艦娘達に最後のとどめを刺すべく回っている最中だった。

上空には艦上爆撃機が飛び回り、海上では重巡級の深海棲艦が這い回る様子は間違い

なく地獄だ。近年類に見ない大敗北。

しかし、それを本部は知らない。何の知らせもない。事実、それが原因として黒の艦隊は威力偵察として派遣されているのだから当然のことだろう。

「隊長！ 仙台からの部隊から応援要請！ やはりこの戦場は……死んでいる！」

「やってくれるじゃないか、深海棲艦！ 無線封鎖解除。マックス中尉は本部との連絡を取り続けてくれ」

「今やっている」

「総員、陣形アローヘッドワン！ 一気に駆け抜ける！ 殿しんがりは初月、不知火に頼んだ」

「了解っ！」

今現在、優先される事項は大きく二つ。一つはこのノイズの多い戦場でなんとしても本部へとリアルタイムの状況を伝えること。先遣部隊の全滅を知らないままでは、次なる作戦を立てることができない。おまけに、深海棲艦の機動部隊が生きていることはなんとすることも必ず伝えなくてはいけない事項だ。

もう一つは、仙台の部隊との合流。黒の艦隊の面々でさえ、この戦場を後退するのは難しい。いくら仙台エリート部隊であろうとも自力で抜け出すことはまず無理だろう。ゆえに、二つの部隊で力を合わせるしかない。

だが、これはあくまでも賭けだ。仙台の部隊が黒の艦隊が到着するまで耐えていると

いう前提の話だ。そもそも、黒の艦隊がそこまでたどり着けるかさえ怪しい。

それでも、那智は必ずやり遂げるといふ確信めいたものを持っていた。

この作戦は自分たちがやらなければいけない。他人にはまずできないことだ。経験と実績がそれを物語っている。

「仙台部隊を発見！ 全員大破寸前です！」

「照明弾撃て！ こちらに注意を引け」

「正気か貴様！ それではこちらの位置がまるわかりだぞ！」

「マックス中尉。今更じたばたしても逃れることはできない」

「……くっ」

照明弾が一斉に撃ち上がる。

仙台の部隊からは歓声が上がリ、深海棲艦からは咆哮が上がった。軽巡級が一斉に黒の艦隊へと襲い掛かる。

「撃ち方はじめっ！」

軽巡の脇をすり抜けゼロ距離からの発砲を開始する。

下手に停止して撃つよりは、速度に乗っている今、流れに任せて懐に飛び込んだほうが数倍も安全だった。

「黒の艦隊長、那智だ」

「ぞ、増援感謝するクマ！ 仙台より派遣された第三偵察部隊隊長球磨」

「よし。これより脱出をはかるぞ」

「そ、それは難しいクマ！ 見ての通り、こちらは手負いばかりクマ……」

「……よし。ここで本部からの増援が来るまで耐える」

終わりの見えない戦いが幕を開けた。

ト級の群れの数にものを言わせる攻撃が続いていた。しかし、これに耐えなければ希望への一縷の望みさえ絶たれてしまう。

「魚雷が尽きたよー！」

「了解！ 不知火と初月が魚雷を撃ちます」

「わかった」

酸素魚雷がト級へと命中し、爆散する。

幸いにも敵からの魚雷攻撃はない。黒の艦隊は砲弾を対空砲で撃ち落とすという神業に近いことをしながら、なんとか難をしのいでいた。

しかし、それもそう長く続くものではない。

補給が見込めない今。先に力尽きるのがどちらかなど明白だった。

「那智大尉！ これからどうするのだっ！」

「……くっ。来ないのかっ！」

「吹雪っ！」

五十鈴の叫び声が響き渡る。

「へっ……っ？」

吹雪がふと真上を見ると、どこから来たのか爆撃機が急降下を始めていた。

今から迎撃したとしても間に合わない。

時が止まる。

スローモーションで迫る爆撃機に吹雪は不思議と恐怖を感じなかった。それどころか、どこか安心したような、あたたかい温もりがある。

「そうかこれで……」

これで私も皆に会いに行ける。怒られるかもしれないけれど、ちゃんと謝りに行ける。だったら、ここで死んでもいいじゃないか。

「吹雪っ！ かわせ！」

「大尉……」

那智の焦った顔を初めて見た気がする。

ああ、ごめんなさい大尉。私は最後までダメな部下のままでした。あなたが正しいのかもしれないとわかっていながらも、戦争だから見捨ててもいいという業を認められなかった弱虫なんです。

エンジン音がはつきりと聞こえる。

もう、これで……

「何を諦めとるんだ！」

「へっ……？」

「……遅いぞ」

爆撃機へ急速接近する烈風が射撃を始める。

降下態勢に入っていた爆撃機はかわすことができず、そのまま撃墜され海の藻屑となった。

続々と大日本帝国海軍自慢の戦闘機が登場していく。

流星、烈風、彗星。

これだけの装備を整えているのは、間違いなく精鋭部隊だ。それも、ただの精鋭ではない。全国から集められたエリート中のエリート。

吹雪はそんな人達がいる部隊を一つしか知らない。

「教導隊……？」

「吹雪！」

その声に吹雪は振り返る。

わずかにはにかみながら立っている彼女に思わず涙が溢れてきた。

「遅いぞ、大鳳」

「いろいろあったんだ、許してくれ。さあ、ここから逆襲といきましようか」

回避

「全流星発艦完了！」

「わかりました。瑞鶴、翔鶴は後退開始。仙台部隊は随時帰島してください」

「お、恩にきるクマー！」

球磨を旗艦とする仙台部隊が撤退を開始する。彼女たちの直上には万が一に備えて数機の烈風が待機していた。

教導隊から派遣されていたのは、全員が横須賀鎮守府に所属している面々だった。瑞鶴、翔鶴とは直接的な関わりはないが、臨時教官に任命されるほどの実力があることは知っていた。彼女たちが航空援護をする戦闘空域では、通常の2割以下の損失しかでないらしい。特に、姉妹そろっての出撃となると、損害が一桁なんてこともままあるらしい。

大鳳に関しては言わずもがな。黒の艦隊を含む多くの隊員の指導もしているベテラン教官だ。実戦で吹雪が彼女を目にするのは初めてだが、的確な判断力や強大な力は那智にも引けをとらないレベルだ。

そういえば、那智と大鳳は昔、同じ部隊に所属していたらしい。

そんなことを考えていると、那智から怒号が飛んできた。

「吹雪！ 何をしている！ 部隊に一人でも欠員が出てしまえば、それだけ多くの犠牲をほかの奴が負うことになることすらわからないのか！」

「あ……………うっ……………」

「謝罪の言葉などいらん。行動で示せ。必ず、ここから生きて脱出するぞ」

「……………了解っ！」

那智の言っていることはもつともだ。

一瞬、あのまま死んでしまえば姉妹に示しがつくのではないかと考えてしまった。だが、そうではない。それではいけないのだ。私は今、黒の艦隊に所属している。相容れない仲間がいても、艦隊メンバーは友達以上であり家族同然だ。私は、また家族を窮地へ陥れるようなことをしようとしたのだ。情けない、なんて情けない。

「だから、ここから挽回して見せる……………吹雪前線復帰します！」

「不知火は一度下がるよ」

不知火のポジションに吹雪がつく。

目に付く限り、深海棲艦は確実にその数を減らしているようだ。最初の段階で、どれだけの数がいたかは定かではないが、100近くはいたはずだ。

無限ではない砲弾や魚雷から考えるにして、全員、ほぼ百発百中して見せているのだ

ろう。

私だつてここの一員なんだ。できるはずだ。

これは決して驕りではない。短い期間であろうとも、同じ訓練を受け、同じ任務を生き抜いてきたことから来る自信だ。

目の前のト級に15cm砲を放つ。放物線を描き飛んでいく砲弾は、ト級の顔のような場所に命中するとそれを爆散させた。

いける。私はまだいける。

適切な航空援護のおかげで、艦上爆撃機に意識を割かなくて済むのも戦いやすい理由の一つだろう。

「五十鈴、そつち行つたよ」

「任せてっ！」

「初月少尉！」

「了解したよ」

唐突に、背後から照明弾が撃ち上がった。

敵の増援か？ 霧の中では撃ち上がったことはわかるが、その意味する内容までは正確に読むことができなかった。

「不知火、私は後方警戒」

「わかったよ」

不気味な静けさが戦場を包み込む。

知性はないとされている深海棲艦であるが、本能的に何か感じ取ったのであろう、攻撃の手を止め警戒態勢へと移行している。

水上を進む音が徐々に近づいていて来る。独特のスクリュウ音がないことからして、潜水艦の類ではなさそうだ。そもそも、潜水艦ならば水中を進めば良いだけの話であるが……。

「増援部隊到着！ 繰り返します、増援部隊到着！」

戦闘にしているのは、先ほど撤退したはずの球磨だ。

撤退中に別部隊と合流して引き返してきたのだろう。

黒の艦隊と教導隊が活気づく。数で優勢を取り続けていた深海棲艦であったが、今の戦闘で増援部隊よりも少なくなっている。

ここを逃さぬ機会はない。

球磨の後ろには、呉や銚子に所属している金剛型や高雄型といった高火力の艦娘の姿が見える。

「Hey!! あなたたちが黒の艦隊ね！ 私たちが来たからには安心デース」

「助力感謝する」

「No problem! 仲間なら当然ネ! いくよ、攻撃開始!」

退却を始めていた深海棲艦に砲弾の雨あられが降り注ぐ。

第一次防衛ラインの戦闘は、人類側に多大な損害をもたらしながらも、辛勝する結果となった。これにより、仙台部隊を救い、僅かな手勢で増援到着まで持ちこたえた黒の艦隊並びに教導隊は勲章を受章することとなった。

しかし、黒の艦隊はこれを拒否。

我々あくまでも、公になつてはいけない部隊。神話として、誰かの希望として、そして死を振りまく悪魔として居続けるのが義務、というのが彼女たちの見解らしい。

猛攻

南沖の鳥島 前線基地司令部

11月10日

太平洋側での戦闘が始まり、すでに10日が経過していた。最初に、前線基地へと入った時よりも、明らかに人員が減っている。

艦娘、一般兵、衛生兵。どの兵科の人員もごっそりと、今は深い海の底へと沈んでいくのだと考えるだけで、背筋が凍りついていく幻覚に襲われる。

しかし、そうであっても諦めるわけにはいかない。

未だに確認できない重巡棲鬼の存在が、見えない圧力として防衛軍にかかっていた。

大規模な戦闘は初日以来起きてはいないが、散発的な戦闘が繰り返し続き、兵の士気は下がる一方だった。かろうじて、人間よりも頑強に作られている艦娘たちはいつでも出撃できる態勢を整えているが、それもいつまで続くか、時間の問題となっていた。

深海棲艦が有利な状況に変わりはしない。そうである限り、今回の討伐対象である重巡棲鬼は絶対に出てこない。逆説的に言うならば、重巡棲鬼さえ倒せば、深海棲艦側の指揮官はいなくなり、一気に瓦解させることが可能となる。

ならば、深海棲艦陣営に黒の艦隊でも吶喊させればいいのか？ 吶喊させ大将首を上げさせるか？

そんな無茶をさせられるわけがない。

「詰んでいる。人類から手出しをできない状況であるが、いつまでも戦線（まかせ）を維持することもできない」

長門は机を思わず殴り続ける。

撤退という選択肢はない。

島国である大日本帝国は一か所だけでも、完全に深海棲艦の侵入を許すようなことがあれば、半日と持たずに東日本と西日本は分断され、深海棲艦の陸上前線基地へと姿を変えることとなるだろう。

「ならば、どうする……どうすればいい？」

有力な駒は3つ。

大鳳を旗艦とする教導隊によって編成された航空部隊。かつて一騎当千と言われた猛者たちによって作られた部隊だ。しばらく、実戦から離れていたとはいえなんのブラックにもならないだろう。

もう一つは、銚子や呉から派遣された金剛型戦艦からなる主力艦隊だ。目立った活躍は響いていないが、沖縄防衛戦では小さな戦闘に介入し続け確実な勝利を積み重ねて

いつていた。旗艦である金剛にある天性のカリスマ性。それを支える姉妹たちの働きが実に連携の取れている良い部隊だ。

最後は、言わずもがな黒の艦隊だ。今や、大日本帝国の最終兵器と形容しても過言ではないだろう。彼女たちを失うことは何としても避けなくてはいけなく、また、彼女たちの力を借りなければ、勝利はあり得ない。

「まったく。これだけの部隊を持っていながら、こんなところで足踏みしているとは……私の無能さのせいか」

思わず弱音が出る。

今は部屋に一人いるだけだ。こんな時くらい、弱音を吐いても誰も文句は言わないだろう。

「待てよ……」

かつて……まだ、葛城の下で艦娘として働いていた頃の写真が目に入り、長門は考え込む。

妙案であり、愚策。人間が指揮をしている戦場ではありえないような作戦を、長門は立案しようとしていた。

クスリと笑みがこぼれる。

これを知った現場指揮官たちはどんな顔をするだろうか？ 驚くか、怒るか、喜ぶか？

「まあ、いいさ。では、さっそく事務仕事を片付けようじゃないか」

○ ○ ○

彼女たちに休息は必要ない。

だが、無意味な戦闘をダラダラと続ける愚かさを彼女たちはよく理解していた。

ゆえに、導き出した答えは波状攻撃。一定の間隔をあげ、攻撃を続けることで確実に相手方を疲弊させる単純かつ明確な戦果を期待できる作戦。

彼女たちの中に、初日から微動だにしない者がいた。

長い蛇のような艤装を身にまとい、片足だけニーソを履いている異様な容姿。全身が白という白で覆われている。

彼女が出撃する機会はおそらくないだろう。人間側が、深海棲艦の最終防衛ラインを突破したなどということがあれば、出撃するのもやぶさかではないが。

「バカ……メ……」

重巡棲鬼は無感動に言葉を発する。

感情が彼女たちにあるかは知らない。それでも、人が今の様子を見た時、そう表現するしかないであろうことは想像に難しくない。

また深海棲艦の一群が前線へと出撃を開始した。
重巡棲鬼は黙ってそれを見つめていた。

「マタ……オオクノムスメガシズム……」

調略

「ん……」

「お目覚めになられたでありますか？」

未だに痛む頭を抱えながら、深雪はゆっくりと覚醒を始めた。

湿気の多い部屋、窓一つ見当たらない。目の前にはステンレス製の机が置かれている。天井には、裸電球が一つ。この部屋を彼女の知っている範囲で例えらるとするならば……

「と、取調室?! うっ……いつつ……」

「まだ騒がれない方がよろしいですよ。抵抗が激しかったため、こちらも少々強引な方法を取らざるを得ませんでしたから」

深雪は初めて、目の前にいる少女へ視線を向けた。

艦装を装備していないが、何となく彼女が艦娘であることはわかる。異様なまでに色の白い肌。それよりも白い軍服を、どこか誇らしげに着ている。

それでいて……その目は、深雪を人間や艦娘として見ているわけではなく、まるで道具として見ているような冷たさを孕んでいた。

公安……？ 諜報系の部署に所属している艦娘？ だけど、海軍のそんな艦娘がいるなんて話を聞いたことはないのだけど……。

「どうかされましたか？」

「あ、いや……別に……」

「まだ、痛みますか？ まったく、あとできつく言っておきますね。あ、それとも……もういつそ、いらなかな？」

不穏なことを口走る少女に深雪は苦笑する。

そうしてようやく、深雪は何が起きたのかを思い出した。

姉を失ったショックで生きがいを見失い、訓練をサボり一人町に出ていた時のことだった。いかにも、という男たちから声をかけられ、反撃をしていたところ、後ろから殴られたのだった。

では、その男たちは目の前にいる彼女の部下だということのか……？

「あの……ここはどこですか……？」

「それは言えないでありますな」

「私……何かしましたか？」

「ん？ なるほど、なるほど。大丈夫ですよ」

少女は笑いながら、懐から名刺を取り出した。

陸軍参謀所属あきつ丸、と書かれていた。

少し前、陸軍にも艦娘が配備されたと風の噂で聞いたことがあったが、どうやら彼女がそのあきつ丸らしい。

「ご心配なく、などとあきつ丸は言う。

「私に何の用ですか……?」

「単刀直入に言いますと……深雪さん、あなたにご協力していただきたい」

「何を?」

「横須賀鎮守府を落とす協力を」

「はあ?!」

我ながらなんと間拔けな声を出したのだろうか?

しかし、そうなってしまうほどのことをあきつ丸は、あっさりと言って見せたのだ。

横須賀鎮守府が仮に落とされた場合、大日本帝国は丸裸同然となることは幼子でも知っている事実だ。だというのに、あきつ丸はそれを落とそうなどと言っているのだ。

「あそこが落ちれば日本は……!」

「ご安心ください。あそこがなくなろうとも、我々陸軍は密かに進めているドイツとの同盟があります。大日本帝国が負ける、などということは決してない」

「それもそうですけど! そもそも……同じ軍なのに……!」

「同じ軍？　はて……何を言っておられるのですか？」

あきつ丸は立ち上がると、深雪の耳元へ口を近づけた。

嫌な臭いではない。だが、身の毛のよだつような気配を感じ、深雪は動けなくなる。

裸電球が奇妙な音を立てながら、チカチカと点滅を始めた。

「海軍は腐りきっている。己の欲望を満たすためならば、何でもする。現に……あなたのお姉さんも、そのせいで死んだのですから」

「え……」

「国連軍と海軍上層部は黒い繋がりがある。そして、先の共同作戦。海軍は自国の軍人を守ればいいものを、メンツのために中国軍の援護へと向かった。その結果は……あなたがよくご存じでありますな？」

喉が異様に乾く。

どれだけ唾を飲み込んでも、カラカラのままだ。

もしも、あきつ丸の言っていることが本当だとしたら、国連軍と海軍の黒い繋がりさえ無ければ、私はこんなにも辛い思いをしないで済んだのかもしれない……？　否、確実にしないで済んだのだ。真に恨むべきは、吹雪ではない。もつと、大きなものであり……。

「我々陸軍は、長年に渡り調査を続けました。そして、ついにその証拠を掴み海軍へと突

きつけた。ですが……それが表で出ることにはなかった。握りつぶされてしまったので「す」

「海軍の上層部は腐っている……？」

「まさにその通りであります。あれは癌です。早めに切除しなくては、体中が侵されてしまう。ゆえに、まずは最も侵されている横須賀を落とすのですよ。ご協力……ただけますよね？」

「それ、は……」

協力すれば、私は二度と海軍だと胸を張って名乗ることはできないだろう。

最悪、今の隊の仲間を売ることになるかもしれない。

でも、もし、ここで協力を拒んだとしたら？ 目の前にある巨悪の存在を知りながら、積み重なる屍を見続けることができるだろうか？ 正門の下の桜の木に埋まっている英霊たちの前を歩けるだろうか？ 放っておけば、癌によって死ぬ者が後を絶たなくなる。ならば……私の答えは……

「わかりました……協力させてください」

「ありがとうございます。聡明なお方だと信じていたでありますよ」

その時、深雪は自分の選択に対する後悔からか、一瞬あきつ丸から目を逸らした。ゆえに、見る事ができなかつたのだ。本当に癌がある場所を……。

奇策を講じて

南沖の鳥島 前線基地司令部

11月13日

「全部隊に召集がかかっているんですよ？」

「そうみたいだね。まあ、そろそろこの戦線の維持も難しくなってきたし、案外撤退命令が出るのかもしれないね」

「五十鈴中尉……冗談でも、あまりそういうことを言うのはよくないですよ」

「ははは、相変わらず吹雪は固いね」

「五十鈴中尉が空気を読めなさすぎるだけだと、不知火は思いますけど」

周囲のざわめきが消える。

巨大な集会所の檀上には長門が上がっていた。隣には彼女の秘書らしき人物が緊張の面持ちでいる。集会場の隅には、橋本が静かに立っていた。

「全体、気を付けい！」

号令と共に長門へ敬礼をする。長門はゆっくりとその姿を見渡すと、敬礼をやめるように促した。

案外、本当に撤退が指示されるのかもしれない。そう思っている吹雪の耳に、予想外の言葉が飛び込んできた。

「皆、よく戦ってくれている。私はこの戦いに終止符を打ちたいと思う。逃げるのではない、トドメを刺すぞ！」

那智の眉がピクリと動く。隣にいる大鳳に何事か話すと、頷き、再び直立不動の体勢へと戻った。

「我々はこれより、最後の攻勢へと向かうこととする！ 目標は、敵旗艦重巡棲鬼だ！」

こいつを叩くことができれば、残りの有象無象など放置していても勝手に自滅する！」
驚きの声があがる。当たり前だ。今や、この南沖ノ鳥島前線基地に残されている戦力は、全盛期の半数以下だ。今までも全力で攻撃に当たってきたというのに、重巡棲鬼の目撃情報すらないのだ。圧倒的戦力不足と情報不足。これが破れかぶれのただの突撃ならば、批判が出て当然だ。

長門はしばらく壇上からざわめきを名眺めていたが、静かに手をあげそれを制した。「勝算がないわけではない。しかし、限りなく低いことは認めよう。ゆえに、ここで本作戦に関しては辞退を認める。軍の規範に縛られることはない。例え辞退したとしても、私は責めはしない。皆も、責めてはいけない。この戦いに意味を見い出せないことは罪ではない。むしろ、このような作戦しか立案できない私を責めてくれ。今、ここで問う。

辞退するものはこの場から退場せよ」

静寂が集会場を包む。

長門は約束を破るような人ではない。指揮官として信用に値するだけのカリスマ性を持つている。それは、長年ここで戦友として戦っている者がよく知っているだろう。

那智は動く気配を見せない。すなわちそれは、黒の艦隊はこの作戦に参加することを意味していた。

怖くないといえは嘘になる。本当は怖いし、逃げ出したい。だが、どこへ逃げるというのだ？ 妹を切った私にはもう、黒の艦隊しか居場所はないのだ。ここを居場所に私は選んだのだ。

「吹雪さんはこのままでいいのですか？」

「え……う？」

声の方へ振り向くと、翔鶴が柔和な笑みを浮かべていた。

単純に気になったのだらう。あるいは、吹雪が自覚していないだけで、顔には逃げたいと書いてあるのかもしれない。

「私はここにいたいんです。黒の艦隊は私の居場所なんです。そういう翔鶴さんは？」

「私も同じですよ。大鳳軍曹にはお世話になっているし、瑞鶴がいるならここを離れるわけにはいかないわ」

「お互いに……ここに残る理由があるということですね」

「そうね。でも……それは、私たちだけじゃないわよ」

「え……？」

「水臭いですよ！ 長門司令官！」

唐突に集会場の一角から声上がる。それに呼応するように、長門を支持する声が次々と湧き上がってきた。あまりにも突拍子もない出来事に、長門は目を丸くしてフリーズしていた。

「いいのか……それで……お前たち……」

「いいに決まっているじゃないですか！ 俺たちは、長門司令官についていきたいんです！」

「……くつ、馬鹿どもが……これより作戦名を発表する！ 作戦名はア号23、呼称ロン

ギヌスだ」

神を貫く槍、ロンギヌス。神すらも殺すロンギヌス。その一撃の強大な破壊力で、圧倒的な戦力を蹴散らし、勝利を集中に収める。なるほど、悪くない作戦名だ。

「我々は全戦力を持つて、まずは各防御拠点で攻撃を開始！ 遅滞戦術を展開する。ここからが本番だ。派遣された黒の艦隊、教導空母艦隊、主力戦艦部隊を持つて、特殊水団を形成！ 遅滞戦術によって戦力が分散されている間に本陣へ正面突破を行う！」

もちろん、これには多くの犠牲及び弾薬が必要となるが……補給は難しい。これは無謀な突貫と思うかもしれないが、こちらも精いっぱい支援はする。その一つとして、私が率いる中隊で途中までの道は切り開こう」

橋本の体に電流が走る。

長門が出撃する？ 既に現役を引退した彼女が？ 止める……いや、しかし。ここで止めてしまうのは、彼女に対して失礼なのかもしれない。

「本部は私の出撃により、一時がら空きになるが……なに、私の部下は優秀だ。副官に指揮権を一時預けることとする。作戦開始は明日〇七〇〇。最後の大攻勢……必ずやり遂げるぞ！ 大日本帝国の未来は……我々が守り切ってみせる！」

唸る轟音

波のさざめきが異様にうるさい。

胸の鼓動が高鳴る。

幾人もの武人と艦娘は今、棲艦が陣取っている孤島へと進撃を続けていた。

朝靄に紛れての進軍は敵から姿を隠すことができるが、同時に仲間同士の姿を認識できなくなるといふ不具合を抱えている。

『全艦、停止』

長門の通信により歩みが止まる。

朝日が水面を照らし出す。

棲艦の群れが姿を現す。

その数は今まで駆けて続けた戦場とひけをとらない。これから、特別編成として組み込まれている那智率いる黒の艦隊・金剛率いる主力艦隊・大鳳率いる教導隊は敵陣奥地にいるとされる重巡^{じゅうじゆんせいぎ}棲鬼を撃退しなければいけない。

握りしてめいる拳が震える。それが武者震いだと信じてる。沖縄で悲惨な戦場を目にしてきた。妹を失った。姉としての威厳と尊厳を亡くした。それでも今、私はここに

立っている。信頼できる先輩達と共に、強大な敵に立ち向かう覚悟を決めている。大丈夫、私はもう二度と絶対に間違えない。

「震えはきつと運動だ」

「え……？」

振り向くといつも殿を任されている初月が吹雪を見つめていた。

「戦いの前には柔軟運動をすると良いというからな。もつと振るえてみるといいんじゃないか？」

「……」

「なぜ黙る」

「初月が意外にも意外なことをいうから、吹雪がびっくりしちやつてるじゃん」

「うるさいっ！ 柄にもないことを言っている自覚は私にもある」

「へえー……てつきり、今更ながらにイメチェンでも始めたのかと思つたよー」

「五十鈴……いつも私を苛立たせるなっ！」

「お前達っ！ 何をじゃれあつている！」

五十鈴と初月の言い合いにマックスが一括を入れる。

どこまでが先輩達の仕込んでいたことなのかはわからない。それでも、心が軽くなつた。私にはまだ、守るべき人達がいることを改めて自覚できた。

『これより、敵重巡棲鬼じゆじゆんせいぎの撃破及びロンギヌスを敢行する！我々は死ぬ行くのではない！この戦いを経て、太平洋の安寧を取り戻し、待たせている者がいる祖国へと帰還するのだ！いわば、この戦いは愛しい者達への土産話となるであろう一戦であるっ！我ら一騎当千の猛者達が勇姿を私は最も近い場所で見届けるっ！行くぞ、朝日が昇るっ！』

「おおおおおおおおお！！！！」

艦娘の人の咆吼ほが上がる。

『攻撃開始っ！』

「行くぞっ！」

那智を戦鬪に敵陣への呐喊が始まる。

「後方からの一斉射は任せるネッ！」

45口径の大砲が火を噴く。

目の前に陣取っていたト級は為す術なく爆発四散していく。

「私達はちよつと足が遅いネ！黒の艦隊、戦法は任せるネッ！暴れるよ、比叡、榛名、

霧島！」

「了解しました、お姉様っ！」

戦艦の援護を受けながら、黒の艦隊と教導隊の混成部隊が進軍を続ける。

「雲行きが怪しくなってきましたね」

「やっぱりそう思う?」

「なら、私達の出番ですね」

瑞鶴が編隊を離脱し、こちらに近づいてきていることに吹雪は気がつく。

「どうかしましたか?」

「これからは爆弾の雨が降るって那智大尉に伝えておいてね、新人くん」

「えっ? は、はいっ!」

「よろしくね、期待しているよ。なんとって大鳳軍曹の教え子なんだからさ」

瑞鶴はそれだけをいうと元の編隊へと戻っていった。

吹雪は急いで通信を那智へと繋げ、伝言をありのままに伝える。

「わかった。大鳳、任せたぞ。全隊全速前進! 暴雨に巻き込まれるなっ!」

「了解っ!」

次の瞬間、雲間から敵戦闘機の群れが現れた。それぞれが魚雷や爆弾を腹一杯に抱えているのが目に入る。

「遅れないで、吹雪っ!」

不知火の声で我に戻ると吹雪は精一杯に水面を蹴る。

爆弾が投下される……そう思った瞬間、彗星が敵戦闘機を打ち落とし始めていた。重

武装により足が遅くなっている戦闘機の前には、最新鋭の彗星は余裕の表情で打ち落と
し続けている。

「突っ込むぞっ！」

棲艦の合間を抜け続け、どれだけの時間が経ったのかわからない。

しかし、永遠とも思える進軍にゴールが見えてきた。この後は待ち受ける重巡棲艦じゅうじゆんせいぎを
討って戦いに終止符を打つ。

そう意気込んでいた。

目の前に広がる様子に黒の艦隊の誰もが絶句した。

「なんだこれ……」

「ヨウコソオロカモノ、サヨウナラ」

戦々恐々

「これは……どういふことだ……！」

那智までもが感嘆の声を漏らす。

目の前に広がる光景は一種の神々しきすら持つていた。誰が見たとしても、その光景には驚きと嘆き、そして美しさを感じるにせう。

ネ級が20隻以上、ト級を40隻以上を従えている重巡棲鬼じゆうじゆんせいぎが静かに立つていた。彼女はこちらに一瞬だけ視線を向けると、笑った。笑い声は聞こえない。口角が少しだけ上がっているだけだった。

「バカナヤツラメ……ココニキタラシヌシカナイノニ」

重巡棲鬼が右手を高々と上げる。数秒後、その手は振り下ろされネ級とト級が一斉に進軍を開始する。

「回避、回避よ！ いったん退さがるわよ！」

マックスが悲痛の声をあげる。その声にはじき出されるように、不知火・初月・吹雪の順番で後退を始める。どう見てもこのままでは物量という壁で殺されるのは目に見えていた。

「待てっ！ このまま迎え撃つ！」

「何を言ってるのよ！ 数の暴力に負けるだけよ！」

「マックス中尉落ち着いてください！ 那智大尉のお話を聞いてください！」

「……まさか奇策でもあるの？」

マックスの目が希望に輝く。

しかし、反対に那智の目は未だに晴れやかなものとならない。

こうしている間にも深海棲鬼の軍勢は向かってきていた。

「マックス中尉、期待をかけてしまったのなら申し訳ない。私には一切、この戦況を打開する策は思い浮かんでいない。しかし我々がここで退却することは、ここまでの道のりを築き上げてくれた戦友の意思を踏みにじることとなる。故に、安易に後退をするとは許すことが出来ない」

「とり狂ったの?!」

マックスが砲塔を那智へと向ける。

彼女の怯えている様子は目に見えて明らかだった。

当たり前だ。

どれだけ同じ量の訓練を積んでいようと、どれだけ同じ数の戦況を駆け抜けていようと、この部隊にいる理由はあくまでも政治将校として部隊の統制をはかるためにい

るのだ。後ろにある大日本帝国は彼女の愛する祖国ではない。守るべき人もものもないだろう。命をかけてまで、この戦場に立ち続ける理由は今の彼女には存在しなかった。

「中尉、落ち着いてください。不知火もこのまま残ることが最善だとは思いませんが那智大尉に対してあまりにも度が過ぎる行動です！」

不知火もマックスにならうように砲塔を向ける。

めちやくちやだった。

絶望を目の前にして、部隊の統制が完全に乱れていた。

こんなことは初めてだ。

吹雪は困惑するしかない。

「いい加減にしなさいっ！」

一括を入れたのはいつも陽気な笑みを浮かべている五十鈴だった。

迫力にマックスと不知火は五十鈴の顔を見つめることしかできないでいた。

「マックス中尉、貴官には申し訳ないが、ここは死に場所となることを覚悟して欲しい」

「なっ……」

「ここは戦場であり、後ろにある国は中尉の祖国ではない。しかし、今、この黒の艦隊にいるということは大日本帝国の全てを守るためにいることと心得て欲しい。政治将校

として有能である貴官の覚悟を……見せて欲しい」

「……」

マックスが黙り込む。

何を考えているのかは誰もわからない。

確かにこの部隊にいる理由は他の部隊員とは違うかもしれない。それでも彼女もまた、仲間であることに変わりはないのだ。

那智大尉は信じているのだろう。マックス中尉が必ず選択をすることを……その選択が正しかろうと正しくなろうとも誰も咎めることがないことを。

「マックス中尉。私は……私はここにしっかりと戦い続けます。マックス中尉がもし帰還するとしても私は絶対に恨んだりしません。マックス中尉の抜けてしまった分だけ戦います。安心してください」

吹雪が笑顔になる。

「……わかったわよ！ わかっているわよ、やるわよ。誰も逃げるだなんて言っていないじゃない。このまま戦い続けるわよ。勝手に私を部隊から外さないでくれる！」

マックスが吹雪に詰め寄る。

「さっきまでビビってしまった人には思えないわね」

「初月少尉、貴女、今の声はしっかり録音しているわよ」

「え……」

「これで珍しく初月少尉の弱みを掴むことができたわね」

「それ、ついでに私にもくれますか？」

「五十鈴中尉……調子にのらないでもらえませんか？」

部隊に笑みがこぼれる。

さあ、ゆつくと話し込んでしまったがあまりに敵は本当の意味で目の前にまで迫っている。

「雑談は終わりだ。行くぞ。全ての敵を倒しつくす。狩りの時間だ。食い殺すぞっ！」

撃墜、鉄槌

目の前に広がる光景に今度は私が驚いている。

その事実が信じられない。

つい先刻まで彼女たちは眼前に広がる圧倒的な敵の物量に圧倒され、絶望していたはずだ。

そうだというのに、今はそれぞれが奮闘をし、深海棲艦の数は最初の3分2になる程に減少している。

それでも私の考えは変わらない。愚かな娘達。その評価に変化がおきるわけなどない。

私がどこで生まれ、どのように沈み、そして深海棲艦となったのかはわからない。ただ、ひたむき戦えば戦う程、どうしようもなく己の手は血で塗れ、死は近づいてくる。私もそうだったのだらう。だから私は死んだ。死んで地獄の底より新たな生命体の形として蘇った。

「負ケル訳ガナイ」

私は信号弾を打つ。

布石はこれで十分だ。

そろそろ本場に終わりにしよう。

○○●○○●

「不知火っ！ そつち来てるよ！」

「了解。初月、右舷から敵の魚雷」

「わかった。吹雪、迎撃するぞ」

「了解です！」

「1時の方向、深海棲艦撃沈！」

「弾薬が残り好くなってきたよ！」

「まだ行くぞ！ 後続部隊が到着するまで粘るんだ！」

雨あられのごとく砲弾が弾薬が前方に広がる絶望へ向けて撃ち放たれる。

どれだけ数がいようと有象無象の集団。

修練に修練を重ね、ありとあらゆる窮地から脱してきた黒の艦隊の敵ではなかった。

それでも残りの備蓄弾薬数という点から言うならば、彼女たちは未だに窮地を脱して
いなかった。元々迎撃を選択した時点で時間との勝負なることは誰でもわかることだ。

しかし、下手にケチるような使い方をしまえば、あつという間に勢いに呑み込まれ全滅

という未来に行き着く。だからこそ、今まで通りの迎撃手段しか取れない。信じるのは、後続部隊が一秒でも早く到着すること。仮に、もしも後続部隊すら全滅していたとしたら……彼女たちは逃げ場のない海上で彼女たちは深海棲艦憎い荒らされるのを受け入れるしなくなる。

「しまった！」

先に異変に気がついたのは吹雪だった。

弾薬が切れ、防空網に穴が空く。その隙をぬって砲弾が飛んできていた。

「くっ！」

咄嗟に初月が前に出ると、吹雪の分のカバーをするように対空砲を連射し始めた。飛んできていた砲弾は銃弾の嵐に巻き込まれ、空中で爆発する。

「すみません」

「怪我がないならなによりだ。対空砲が尽きたのなら五十鈴中尉と一緒に艦の迎撃に当たって欲しい」

「了解です！」

吹雪は急いで五十鈴の元へと駆け寄った。

五十鈴は吹雪の到着と同時に矢継ぎ早に指示を出す。いつもならば笑って部隊を和ませるムードメーカーの彼女にすら緊張の色が走っている。

この終わりが見えない戦いの後、どこへ逃げれば生き残ることが出来るのか。副隊長である彼女も、那智と議論を交わせるように戦いながら考えているのは明白だった。

「嘘、嘘でしょ！」

「マックス中尉、どうした」

「あれを見なさい大尉！」

マックスが指をさす。その先には今まで居なかつた深海棲艦の空母が現れていた。順次に敵戦闘機が発艦していく。

ただでさえ対空戦闘に適しているのは初月だけなのだ。たしかに、戦闘機^{ヤクト・イエーガー}を常にこなしている部隊であるが、この距離と敵の厚さでは突破する前に餌食される。

「……までなのか……！」

那智が弱音を吐く。

それを聞いている者はいない。

彼女は部隊長として最後まで毅然とした態度を隊員には見せることを誓っている。

言葉にした音は決して誰にも届かないようにしている。

「妙高……」

脳裏に浮かんだ彼女。

冷たくなってしまった彼女。

私が殺してしまつた彼女。

私が謝りたい彼女。

これが走馬燈だらうか。だとしたら、死ぬ間にみるしてはあまりにも冷たすぎる。どこにも華やかな様子は無い。ただ冷たく、かつては彼女だったはずの肉の塊の情景しか浮かばない。なぜだらうか。私はもはや、彼女の、妙高の動いている姿すら思い出すことができないというのだらうか。

那智の目の前が阿鼻叫喚となる。

吹雪はついに頭を抱えている。初月もまた、死んでいった妹達を思い出しているのか呆然としている。五十鈴も険しい顔のまま動こうとしない。マックスは本部に連絡を取ろうとしている。

一瞬の静寂。

死ぬことへの覚悟戦場で初めて決めた瞬間。

それでも彼女は諦めない。

絶対に生き抜くという意思がある。

それが彼女にできる唯一無二の贖罪であるからこそ。

「生きることを諦めるなっ！」

那智の言葉で再び統率が蘇る。

この戦場で2度目の鼓舞をすることとなるとは思いもしなかった。

「戦えっ！ 戦って戦って戦って、運命に負けるなっ！」

「……了解っ！」

皆が立ち上がる。

運命には負けたくない。

敗北することはいい。敗北という運命に自ら降伏することだけは絶対にしたくない。

轟音がする。

遙か彼方にすら感じられていた深海棲艦の空母が炎上していた。迫ってきていた敵

戦闘機が灰燼となり、落ちていく。

「待たせたなっ！」

「長門司令っ！」

「随分と遅くなっちゃった。もちろん援軍も呼んでいる」

「雲龍型航空母艦天城です」

「同じく雲龍型航空母艦3番艦葛城だ」

「長門司令の指揮のもと、舞鶴鎮守府より参戦しました！ 長門司令には以前の第2打

撃大隊の際に大変お世話になりましたから」

「随分と昔の話を言うじゃないか」

「そう昔でもないでしょ。だって、あの事件の時だってズツとお供したじゃないですか」
「それこそ懐かしい……」

長門が弾薬が入った補給コンテナを海上に設置する。

「黒の艦隊は至急補給を頼む。後続部隊は副司令と大鳳に任せている。なに、私の信頼する部下と那智の信頼する友がいるんだ。私達は目の前の鬼を退治するぞ」

戦いの果てに

「戦闘機^{ヤークト・インエーガー}呐喊始めるぞ!!」

『了解!』

那智の指揮のもと深海棲艦の空母へ向けて攻撃を開始する。

周囲には終わりが見えない砲撃の雨が降り続けている。だが、彼女たちは足を止めることはない。信じることのできる仲間と経験を抱え、ひたむきに敵空母に向けて進み続ける。後にこの様子を見ていた帝国海軍軍人は語った。

『戦場に鬼がいたんだ。それはいち小隊の形をした鬼だった。誰一人として欠けちや鬼にはならない。とにかく鬼神がごとく進み続ける彼女たちには、正直なところ恐怖も覚えたよ。だけど、味方としてあれほど頼れる存在はいない』

それは伝説となる戦いの一つだった。後に語られることとなる第666部隊の表の世界史では決して語られることのない伝説。

「敵までの距離500、魚雷発射態勢に入ります」

「全員魚雷発射用意! 軌跡を残したところできまさら躲すことなどできまいっ! 一
気に2隻沈めるぞ」

「あれだけの巨体。中央のタンクを狙って真つ二つにできるはず」

五十鈴、那智、初月の矢継ぎ早の指示が飛ぶ。

指示を聞いて吹雪は発射態勢を取る。

近づいてくる敵戦闘機は的確に南沖ノ鳥島司令部の指示によって撃墜されていき、部隊に損害が広がることはなかった。これだけの状況がそろうチャンスは一度しかない。ここで仕留めるしかない。

「撃てッ！」

魚雷が一斉射される。

海上戦闘においてほぼゼロ距離で発射された高速体を躲すことなど出来るはずもなく、順番に魚雷は着弾していく。

「やった！」

「いや、まだだッ！」

マックスが珍しく喜びの声を上げるも那智が静止する。

空母の一隻は咆吼と爆炎を上げながら、徐々に体を割かれ沈んでいった。しかし、もう一隻はまだ耐え続けギリギリのところまで撃沈することができずにいた。痛みを感じているのか、目を赤く光らせながら、第5陣となる戦闘機の離陸準備を始めているのが見える。

盛り上がりを見せていた後方部隊から絶望の気配が伝わってくる。

この攻撃のためだけに多くの損害が出たのは間違いない。

重巡棲鬼じゅうじゆんせいぎを倒す又は撤退させることが本作戦の目標であるというのに、ついに見つけ

た突破口への進撃は失敗しようとしていた。

空母が沈まなくては、永遠と増え続ける物量に押しつぶされることは目に見えていた。

敗戦……誰の脳内にも思い浮かんでいた言葉だろう。ただ一人、彼女は覗いては……急いで残弾を確認する。

虎の子の一発がまだ残っている。距離はまだ離れていない。今から撃つても充分大打撃を与えられる。

「まだですッ!」

「吹雪……?」

「これで……終わりだああああ!」

吹雪は最後の一発を撃ち出す。

軌跡を描きながら離陸を始める空母へ向かって一発の魚雷が進んでいた。

それに気がついたのか重巡棲鬼が慌てたように迎撃の魚雷を発射する。

魚雷で魚雷を撃破するなど並の人間では出来ない芸当であるが、海上戦闘に特化して

いる深海棲艦にとっては朝飯前なのだろう。

続けて、無数のト級が海中へ向けて砲撃を開始する。数の暴力の前に希望の一発となっていた吹雪の魚雷の命は風前の灯火と化していた。

たった一発ではあるが、この一発が両陣営の勝敗を決するだけの力を持っていた。

「そ、そんな……」

吹雪が諦めの声を漏らす。彼女の隣を高速で何かが通り抜ける。

「な、何をしているんですかっ！」

『私が壁となる！』

「バカなことはやめてください！」

『心配するな。私はこれでも元戦艦だ。魚雷一発守り切るだけの城壁にはなってみせる

や』

「いや……いやですよ！ 長門司令！」

『吹雪、お前が繋げた希望だ』

長門から突然名指しで呼ばれる。

『どんな時でも諦めない気持ちには希望となる。吹雪、いかなる時でもそれでもつと反抗し続けるんだ。兵器ではなく、人として生きろ』

「司令ッ！」

『那智……偉くなると苦勞が増えるばかりだ。お前も私も……妙高も』

「長門司令ッ!!!」

巨大な爆炎が上がる。

上がる咆吼は誰のものなのだろうか。

誰もが固唾を呑み、静寂を守っていた。体が動かない。目の前に広がっている光景を見ていることしかできない。

気がつくくと大軍を率いていた深海棲艦は撤退をしていた。

『何をしている！ 長門の救援に迎え！』

無線封鎖が解除されたことにより、沖ノ鳥島司令室から橋本の声が聞こえる。その声に弾き出されるように各員が長門がいたと思われる海域に集った。しかし、そこに肝心の長門の姿はない。長門が誇りにしていた36cm砲の艀装がボロボロになりながら無常にも浮かんでいるだけだった。

太平洋上から侵攻していた深海棲艦の大軍を退けることに成功したニュースは、瞬間に大日本帝国全土に広がり帝国民達は喜びの声を上げていた。迫っていた危機がなくなつたことにより、今だけは浮かれていたのだろう。それを誰もとがめることはできない。ただし、大日本帝国軍の広報隊がもつと正確な情報を伝えていたならば、人々ははたしてただ喜ぶことができただのだろうか？

死者一万人、失われた艦娘不明。事実上、長門という柱を失った沖ノ鳥島司令部の崩壊。

再度、深海棲艦が大軍を率いて同じ海域に現れた時、今度こそ大日本帝国海軍は為す術なく侵攻を許すしかないのは目に見えていた。

一大海戦は終わりを迎えた。最後の一弾を放った吹雪は、英雄として祭り上げられ、ひっきりなしに取材の依頼を受けた。だが、彼女が取材に応じることはない。第666部隊は非情で秘密性の高い部隊であり続けなければいけない。



「浮かない顔だな英雄」

「提督」

待合室で呆然としていた吹雪に橋本が声をかける。

幸いにも司令部に直接的な攻撃はなく、設備が破壊されることはなかった。

それでも、次なる戦いに向けて参謀本部は新たな組織図を作成しているらしい。現に司令部の上層部の軍人は慌ただしく働き続けていた。

「私は……英雄じゃありません。本当の英雄は命を落としてまで、一発の魚雷を守り切った長門司令です」

「それでも世間ではお前が英雄だ。残念ながら、死んだ人間を評価することは非情に難

しい。それも……血の五月雨事件に関わっていた彼女ならば尚更な」

「……長門司令は最後、どうして私に人として生きろと言ったのでしょうか」

「……彼女は艦娘であることを誇りとしていた。人々のために戦い、平和を築くことを人生としていた。そして誰よりも……艦娘は兵器ではないことを主張していた」

橋本が吹雪の頭に手を置いた。

大きくて温かな手だった。だが、吹雪は感じていた。橋本の手が震えていることを。長門は橋本のかつての敵であり、秘書であり、戦友だった。彼だつて人間なのだ。大切な人を失えば憤り悲しみに暮れたくなる。しかし、彼はそんな素振りを一切見せない。偉くなつてしまふと部下の気持ちに寄り添うことを考え、自分の気持ちを押し殺さなくてはいけないのだろう。

「血の五月雨事件で最後まで長門が主張していたのは艦娘の人権確保だった。兵器として運用される彼女たち対して軍部は、前戦への投入を続け、人としての尊厳を無視していた。那智や妙高といった艦娘達はその仕打ちに對して不満を爆発させていた。長門は本当に……良い奴だった。やり方には問題があつたがな」

「たしか、提督があ的事件を収束させたんですよね？」

「……そうなっているな」

「え……それってどういう……」

私が疑問を口にしようとするとは不知火が慌てたように走ってきた。橋本の姿を見ると敬礼をする。

「提督、緊急事態です」

「どうした」

「横浜鎮守府がクーデターを起こしました」

「なにッ?!」

「それも……国連軍が捕虜にされ、現在各国の首脳が大日本帝国への大規模な軍事侵攻の準備をしているそうです」

「どこが主導かを言っていたか」

「ドイツです!」

暴虐の狼煙 殲滅編

永遠絶対の地獄

時は少し遡る。

沖ノ鳥島では迫り来る重巡棲鬼との決戦を間近に戦いの準備を続けていた時。本土にある横浜鎮守府でもまた、大きな戦いの狼煙が上がるうとしていた。

横浜鎮守府は国連と大日本帝国が合同で利用している世界にも類を見ない規模の巨大な鎮守府だ。とはいっても、戦力が十全にあるわけではない。極東の守りの要となつている大日本帝国に国連の息がかかっている施設を置くことで、大日本帝国に世界各国が期待をしているという重圧を与えるために利用しているに過ぎないからだ。艦娘の技術も未だに大日本帝国とドイツ以外では、進んでいるとは到底言える状況ではない。誰もが寝静まり巡回の憲兵だけが起きているだけの真夜中。鎮守府の地下にある一室では怪しげな顔をした面々が密会をしていた。

「準備は整つたでありますか？」

「当然。間もなく祖国から大規模な兵隊達が来るわ」

「それはよかつたであります。やはり、ドイツの方々にも甘い汁を吸っていただきたい

ですから」

ビスマルクの顔がピクリと動く。だがその前に早かったのがレーベだった。彼女はホルスターから銃を抜くとあきつ丸へ向ける。引き金には指が掛かっており、いつでも発射できることがわかる。

「祖国へのそのような物言い。あまり関心はできません」

「可愛い顔をしているのに怖いことをしますね……冗談ですよ冗談。日本の冗談です。自分は心の底から同盟国であるドイツには敬意を払っていますから」

「下ろしなさいレーベ。ここで彼女を撃ってしまったても良いことはないわ」

「……わかりました、グラーフ中尉」

グラーフに窘められ、レーベは銃を下ろす。

あきつ丸は笑みをこぼさぬように必死に堪えた。

予想を遙かに超えている。やはり彼女達は無能だ。海上戦闘においては世界有数の力を誇るドイツであるだろうが、情報戦においてはザルとしか言いようがない。実際のところ、私だつてしよせんは陸軍の末端でしかない。私を殺したところで、計画に損害など発生するわけがない。もちろん私が独自に創り上げた情報網を活用できなくなるという痛手は被るだろうが、今回のクーデターを成功させるためだけなら、私の仕事は終わっている。誰の目から見ても明らかかなことを彼女たちはわかっていない。

頭でつかちの軍国主義の女狐め……本当の恐怖はまだ始まったばかりだ。

「まあまあ、自分も言い方が悪かったと思うでありますし、グラーフ中尉、そこまで言わなくても良いでありますよ」

グラーフが困った顔をしながらレーベを見る。

レーベは今にも泣きそうな顔をしながらも、グラーフに対して申し訳なさそうな様子だ。

「話を戻そうか。明朝、クーデターは決行する。黒の艦隊を含むあらゆる戦力が沖ノ島島周辺に展開している今が最大の好機。だが問題もある。奴らが横浜鎮守府鎮圧のために戦力を向けてきた時、海上防衛は誰に任せろ？」

「もちろん、我々艦娘の出番でしょう」

「……では準備は済んでいるのだな？」

「ええ、入ってきてください」

あきつ丸が呼ぶ。その声に導かれ扉が開き、一人の少女が部屋の中に姿を現した。

目は虚ろで生気がない。ブツブツと何かを言っているようだが、何も聞き取ることはできない。

「思っていたよりも小柄ですね」

「駆逐艦ですから」

「私が見つけた人材ですが、大丈夫なのでしょうね？」

「当たり前じゃないですか。相当な恨みを買っていますからね、彼女達は」

ドイツ艦娘達の表情が強ばる。

部屋の外から尋常ではない程の殺気を感じた。もちろん、部屋の中に入ってきていた深雪からもだ。

あきつ丸の一言で彼女たちは黒の艦隊と海軍に対する不満を爆発させたのだ。

「たった数日でここまで仕上げるとは……」

「私は戦うことは出来ませんが……物資の調達でしたら得意ですので」

「恐れ入ったよあきつ丸」

「最高の褒め言葉です」

あきつ丸がこの数日の間、海軍や黒の艦隊に恨みを持つ艦娘や軍人を探し回っていたのはいうまでもない。

口説き文句はいつもの一言。

『海軍は深く癒着をして仲間を見殺しにしている』

もちろん根も葉もない出鱈目だ。

そんなことはないし、陸軍が都合良く海軍を潰すために人材を雇うために作った殺し文句だ。

だが、恨みという負の感情を抱いている者達はまつとうな判断をすることができなくなっている。

ようは一番理解しやすい、一番恨みやすい対象を教えてあげれば良いのだ。

それがコツだ。海軍はもつと傷ついた彼ら彼女達に手厚い介護をしていけば、こんなことにはならなかった。気がついた頃にはもう遅い。組織内部の深部に潜り込んだ時限爆弾が爆発しているのだから。今更ジタバタとあがいたところで、海軍という一大組織が崩壊するのは時間の問題だ。

「さあ、では夜明けのために始めようか」

裏切りの刃

「提督起きてください！ 提督ッ！」

「どうした？」

「クーデターです！」

「なに？」

横浜鎮守府国連海軍提督葛城は知らせを聞き、意識を覚醒させる。先程まで執務室の机の上で微睡んでいたが、そんな場合ではないことを第六感が告げていた。息を切らしながら入ってきた部下にねぎらいの言葉をかける間もなく彼は動き出した。

急ぎ緊急事態用に海底ケーブルから繋がっているワシントンへ連絡を繋げようと試みる。

「動かないでください、提督」

「……なるほど。どうりで見ない顔だと思った」

葛城の眉間に銃口が向けられる。

先程飛び込んできた部下は国連軍の証明と言える星の印の付いた軍帽を捨て去り、旭日旗が突いている軍帽を被った。

「そうですか。さて、葛城提督を殺すような命を受けてはいけません。おとなしく付いてきてくれれば危害は加えません」

「長生きをすると様々なことが起きるものだ」

葛城はやれやれと首を振りながら両手を挙げる。

葛城の無力化を試みるために近づいてきた反乱軍の兵士が突然倒れた。後ろからは鉄パイプを持った夕張がいる。

「お怪我はありませんか？」

「無論。助かったよ。まさか橋本の艦娘に助けられるとはな」

「橋本提督はこのクーデターを予期していました」

「……やはりな」

葛城の言葉に夕張はキョトンとする。

「とにかく今は離脱しよう」

そう言うのと葛城は大きな本棚の前に立った。

しばらくすると本棚は巨大な音を立てながら横にずれ始める。そこに地下へと続く階段が現れた。

「旧帝国海軍は本土決戦に備えて非常口を用意していたわけだ」

「なるほど」

「さて、行くのでしょうか」

薄暗い階段を下り始める。どこへ続いているのかは葛城しか知らない。

夕張はフと疑問を口にした。

「葛城提督。なぜ橋本少佐は今回のクーデターを予期していたのでしょうか？」

「決起の五月雨は知っているな？」

「もちろん」

「あの事件解決の裏で糸を引いていたのがドイツ軍だった」

「噂では聞いていましたが……」

「そしてドイツ軍と旧帝国陸軍とのパイプ役としていたのが橋本だった」

「まさか……!」

夕張は最悪のシナリオを想像する。

まさか、橋本提督は今回のクーデターに絡んでいる……?」

葛城はそんな夕張の姿を見て首を横に振った。

「橋本は今回の件に絡んではないだろう。彼はドイツ軍と陸軍との泥沼の癒着を見て嫌気がさして内部告発をしようとした。だが、それは巨大な組織を敵に回すことだ。結局、告発は失敗に終わった。それでも陸軍は決起の五月雨解決の英雄である橋本を殺す

わけにはいかなかった。そして橋本が流れ着いたのが最も前線に向かい危険がつきまとう黒の艦隊の提督というポジションだった」

「そんな過去があつたんですね」

「然り。おおよそ今回も日本国内の掌握を企む陸軍とドイツ軍が裏で何かしらの工作をしたのだろう。まったく、敵は目前だというのに暢気なことだ」

葛城は怒りのこもった口調で吐き捨てた。

彼の言っていることは正しい。現在、沖ノ鳥島海域では日本の存亡をかけた一大決戦が行われている。その最中に今回のクーデター。仮に沖ノ鳥島海域での戦闘で海軍が敗退すれば、日本に深海棲艦の脅威が迫るというのに、なぜこんなことができるというのか。理解に苦しむ。

「このタイミングだからこそ、なのかもしれないがな」

「そうですね……現在、横浜鎮守府の近場にある鎮守府の艦娘達は出払っています。そして都合良くやってきたドイツ軍からの査察。完全に罠でしかありません」

階段の終わりが見える。

葛城は古びた鉄に扉をゆっくりと開いた。

その先には大きな潜水艦ドッグがある。

「こんな大規模な施設が……」

「ここは旧司令部が有事の際に高級士官が脱出できるように用意していた場所だ」
「こういつては何ですが、昔の軍人達はクスですね」

「面目次第もない」

葛城と夕張が話していると足音が聞こえてきた。

徐々に足音は近づいてくる。夕張は手に持っている鉄パイプを握りしめながら振り返り、鉄パイプを振り上げた。

「誰ッ!」

「やめなさい。彼女は味方だ」

「味方……?」

暗がりから一人の少女が姿を現す。

どこからどう見てもドイツ海軍の軍服を着ている。夕張の脳裏に葛城にも裏切られたという文字が浮かんだ。

「ユーは敵じゃない」

「待っていたよ。君をね」

「どういうことですか葛城提督」

「彼女はいわゆる二重スパイだ」

夕張は葛城が何を言っているのかがわからなかった。

「第二次世界大戦中……彼女の前身ではる潜水艦U-511は日本海軍に貸し出された。その際、不慮の事故に遭い沈没寸前だったところを救助したのが海軍だった。その時、U-511の船員達は誓った。日本海軍の有事の際には必ず味方になる、とね。そしてその誓いは艦娘としてU-511の魂を宿した彼女にも受け継がれた。つまり、彼女と帝国海軍は魂の親友ということさ」

「葛城提督、まったく意味がわかりません。論理的に話してください」

「ははは、まあ良いじゃないか。とにかく彼女は味方だ」

納得はいかなかったが小柄なユ-は夕張にべこりとお辞儀をしてきた。その姿を見ていると確かに敵に見えなくなってきた。

ドイツ海軍も一枚岩とは言いがたいようだ。そう納得して心の疑心を治めることにした。

「それで集まったかね？」

「もちろん。一言で大勢の同士が集まりました」

「よろしい。では我々も始めるとしようかね。土足で志を踏みこむ不埒者への天誅を」

影は進撃ス

沖ノ鳥島司令部には重い空気が漂っていた。

重巡鬼棲鬼との激闘を制し、なんとか撤退させることには成功した彼女たちであるが、帰る場所を失ってしまっていた。

「提督、どうしますか？」

「ふむ……今回の件、海軍省と連絡が取れない点から察するに横浜鎮守府だけではなく海軍省もクーデター部隊によって占拠されたと考えるのが打倒だろう。しかし、それは我々だけではなく戦いの果てに疲弊している沖ノ鳥島司令部にも一切の労がないことを示している。このままここに居続けたところで、解決策の糸口は見えない」

「では強行突入を試みますか？」

那智の問いに対して橋本は返事をするのではない。そのまま、軍帽を深く被り「ひとりにしてくれ」と那智に退室を促した。こうなってしまうては橋本に何を聞いても無駄ということはずぐにわかった。那智は何も言わずに部屋を後にした。

廊下には戦いで負傷しながらもベッドに収容仕切れない負傷兵が大勢横たわっていた。走り回りながら傷病者の看病をしている軍医や看護師の姿が見えるがその数は十

分とは言えない。共に命がけで戦った戦友に黒の艦隊はまた何も出来ないでいた。

「何か言っていましたか?」

「いや、何も言っていない」

五十鈴も珍しく不安そうだ。

他の者も同様に不安に押しつぶされそうなのを必死に耐えているように見える。

「落ち込んでもしかたないネ!」

突然背中をバシリと力強く叩かれ那智は振り返った。そこには派遣された戦艦部隊の隊長である金剛と霧島の姿がある。

「金剛大尉か……」

「水くさいネ。金剛でよろしくデース!」

「では金剛。何か解決のための妙案でもあるか?」

「現在、榛名と比叡の両者によって我々の鎮守府である大洗に連絡を取っています。我々以外だけではなく、他の艦娘及び傷病者の收容を要請している次第です。本部が混乱状態であることもあり、鎮守府司令は快く受け入れてくれる次第となっています」

「それは助かる。ありがたい」

「それこそ水くさいネ! 私達は戦友。困っているならば手助けするのは当たり前デース!」

「だが……」

脳裏によぎるのは今まで見捨ててきた者達の姿。それによって浴びせられる罵詈雑言。私達は命という世界にひとつしかないものを見捨てて、目の前の勝利にこだわり続けて来た。誰も助けることがないのだから、誰かに助けられる権利などないと思つて来た。

だがそれは違った。目の前にいる金剛やその妹達は黒の艦隊の事情をしつていながらも手助けしてくれた。

金剛は「ん？」と首をかしげる。正直見た感じはえせ日本語を使う不真面目な奴と思つていたが、長女であるだけあり頼りになる。ならば今だけは……その申し出を受けていいのかもしれない。

「では早速、私達も提督に……」

その時地鳴りがした。続けて爆発音がする。

「艦砲射撃だ!!」

見張りの兵士が叫ぶ声がスピーカーを通して聞こえた。

その物言いから深海棲艦がやってきたのではないことを察する。クーデター部隊がこの司令部を破壊するためやってきたのだろう。

「全員、急いで艦装をつけるぞ」

那智に続いて隊員が走り始める。

「吹雪、何をしているの!」

一人動き出さない吹雪に不知火が声をかける。それでも吹雪は窓の外から艦砲射撃を続けている様子を見ながら動き出そうとしなかった。しびれをきらした初月が回れ右をし、吹雪の腕を掴む。

「急がないといけない」

「違うんです……違うんです……」

「何が違うの」

震える手で吹雪は窓の外を指さした。

艦砲射撃をしている艦娘の後方で指揮をしている者がいる。見た感じ駆逐艦だろうか。大きな見た目をしているわけではないが、その指揮は的確で確実に弾薬庫や重要な沿岸警備設備を破壊させている。

「どうしたの?」

五十鈴までもが不安そうに吹雪の元へと走ってくる。

吹雪はきつく唇を噛み、次に続ける言葉を放って良いものかと迷っているように見える。数秒後、司令部に砲弾が落ちた。

天井が激しくゆれ、廊下の一部から火の手があがる。傷病者達は「死にたくない」と

叫びながら逃げ惑い、重傷ではない兵士達は逃げる誘導を続けている。こうしている間にも続々と砲弾の雨は司令部へと降り注いでいた。

「いい加減にしなさい吹雪少尉！　いったい誰がいるというの！」

「妹が……」

数秒の間だけ沈黙が続く。やがて吹雪は意を決したように続きの呪いの言葉をいう。

「深雪ちゃん……深雪ちゃんが私達を攻撃しているんです……！」

アナタにアイたい

続く艦砲射撃。響く轟音と充満する火薬の臭い。

この臭いを私は大嫌いだ。この音を私は大嫌いだ。思い出すのは大好きな白雪の笑顔。そしてその笑顔は数秒後に紅蓮の炎に焼かれ、悲鳴が鳴り響く。忌々しい記憶。助けを求めようと答える声はない。無常なまでの返事は今でも頭の中でリピートされる。

沖縄戦線での戦いの後、私は少しだけ自暴自棄となった。戦場に行けば最前線を希望し、死ぬことを率先した。

だが、その生活は長く続かなかった。ある日、私は気がついてしまったのだ。私は生きて白雪ちゃんが死んでしまった意味を。最後の最後まで白雪は諦めることをしなかった。死から逃れるために抗い続けた。それでも彼女は敵に討たれ、味方から見放されて死んでしまった。対して私はあの戦場でも死ぬことを受け入れていた。誰もいない寂しい海で姉妹の二人が敵に討たれて死ぬヴィジョンを受け入れ、死ぬ間に白雪ちゃんに何と声をかけようかすら考えていた。

抗った白雪ちゃんは死んで受け入れた私は生き残った。

私は白雪ちゃんを見捨てた第666部隊を……吹雪を憎み続けた。許すことが出来ないと思った。それでも戦争という混沌極める時に全ての救いを長女であるという理由で吹雪に求めることは間違っているのかもしれないと考え始めた。許すまでに多くの時間を要するとしても、少しずつ許すことが出来れば良いと思っていた。

しかし、現実は違った。海軍のあまりにも耐えがたい腐敗。私の大切な白雪ちゃんは、上層部のくだらない思想や腐った信念のせいで死んだ。そしてあの第666部隊も味方を見捨て、自身の利益にしか繋がらないことしかない。命を天秤にかけ、ひとりよりも多くの命を救うために行動をしているというならば第666部隊を許すことは出来た。だがしかし、それは幻想であった。だから私は赦すことが出来ない。腐敗の温床となっている第666部隊をここで排除しなくては、もつと多くの同胞の命が失われしてしまう。なんとしてもここで癌は切除しなくてはいけないのだ。

「隊長、これ以上の砲撃を続ければ備蓄砲弾数の30%を消費してしまいます」

「かまいません。砲撃を続けてください」

「アナタは……憎くないのですか？」

深雪は睨み付ける。今回、海軍の腐敗を許すことが出来ず、多くの戦友を失った同士として集っている伊勢と日向は一瞬ひるんだように後退った。

彼女達には強い意志が足りない。

深雪はため息がでそうなのを堪えた。駆逐艦として部隊を率いた経験はない。それでも隊員の士気を落とさないようにどのようには振る舞えばいいかは本で学んだ。伊勢と日向には思うことはたくさんあるが、今だけは堪えよう。ここで第666部隊を仕留めるためには戦艦である彼女達の攻撃力が必須だ。失うわけにはいかない。

「少し強く言いすぎました。間もなく摩耶さん率いる第二陣が到着するはずですよ。通常よりも多くの弾薬を積載している手はずですので、補給の心配はいりません。私達は今は一発でも多くの砲弾の雨を降らせて、深海棲艦との戦いで疲弊し、司令を失っている沖ノ島司令部の戦力をより削ぐことです。そして……虎の子である第666部隊を引きずり出して……ここで仕留めます」

「わかりました。日向、続けるよ」

「は……」

日向と伊勢が戦線に戻る。

深雪は腕を組み、戦場を見つめた。残念ながら今の距離から有効打を与える艦砲を彼女は所持していない。深雪率いる第一陣は日向と伊勢という戦艦級と一般将兵が搭乘している通常装備の戦艦から司令部の破壊をすることだ。

陸軍は海には疎いと思っていたが、立案作戦を聞いた時はそれは間違いであることがよくわかった。彼らは最重要機密であるはずの各艦娘の所属している鎮守府や作戦行

動まで事細かに知っていた。あきつ丸というひ弱な艦娘は情報部所属と聞いていたが、バカには出来ない才能があることはすぐにわかった。

「いた……」

頭がズキンと痛む。

数週間前から続いている痛みだ。この痛みは何だろうか？ 私は心のどこかで後ろめたさをかかえて蜂起しているのだろうか？ そんなはずはない。私がしているのは手術だ。悪性の部位を排除することは正しく、この蜂起が終われば私達は英雄として賞賛されることが約束されているのだから。

『隊長、第666部隊です！』

通信がはいり、深雪は水平線の先を見つめる。小さな影が高速で近づいてきていた。

「待ちかねたよ……お姉ちゃん……！」

装備を確認する。問題は見当たらない。

「これより通常装備の戦艦は後退するように。伊勢、日向、大潮、阿武隈……秋月、私は第666部隊迎撃任務にあたる。各員、奮闘を期待します」

水面を蹴り、第666部隊へと近づいて行く。

胸が高鳴っていく。艦娘同士の戦いは、かつて起きた五月雨事件の時の軍事蜂起以来だろうか？ 私達が新しい歴史を作るためには必要なことを必要なぶんだけするまで

だ。

「お待たせお姉ちゃん……今から私が……白雪ちゃんに分まで苦痛を与えて殺してあげるからね……！」

そして運命は笑う

話は数分前に遡る。吹雪が深雪の姿を見つけ困惑しているその時、もう一人もまた同様に世界の残酷さと己の使命の間に揺れ動いていた。

『聞こえているわね、マックス』

「なあ………」

インカムから聞こえてくるその声を忘れることなどできない。

グラーフ・ツェッペリン中尉。マックスが本来の所属しているドイツ海軍の正規空母。歴史上では完全に完成させることができなかった空母だが、仮に完成していたならばその運用能力からドイツ海軍の歴史を大きく変えていたことは間違いないはずだ。そしてマックスは……彼女に怯えていた。彼女とたいまんで戦つたとしても勝てるわけがない。武装の面ではもちろんのこと、グラーフの完璧なまでに研ぎ澄まされた祖国への忠誠心は、一種のカルト宗教じみた様子を見せていた。

総統に対して少しでも不審な様子を見せる者がいたら、即座に射殺をする。部下に任せるわけではなくグラーフは自らの手で肅正をしている珍しい士官だ。

そしてマックスの……本来の姉妹達は殺されていた。はるか昔、目の前で順番に脳天

を撃ちぬかれていく姉妹達の光景を思い出す。あの時、私は何も出来ず震えているしかなかった。吐き気がこみ上げ、マックスは口を手で覆った。嗚咽が止まらない。グラーフの声はマックスを一瞬にして恐怖に落とし入れた。

『あなたへの命令はただ一つ。第666部隊の動きを報告しなさい』

「そ、それでは私は二度と部隊へは戻れなくなります」

『いいじゃないそれでも。そろそろドイツの空気が吸いたい頃でしょう？　こんなサル
の国の部隊なんて見捨てなさい』

「……中尉、僭越ながらお伺いいたします。今回の武装蜂起、まさかドイツ軍が絡んで
いるのでしょうか？」

『……ふふ、ふふふ。お姉様は何でもお見通しなの。だから……サル
の国が内部ではとんでもなく脆いことも知っている。その脆さは、私達のドイツの鉄血が修正して……国
ごといただくわ』

グラーフがお姉様と呼ぶ存在はひとりしかない。ビスマルク大尉。艦娘でありな
がらも、実質のドイツ海軍参謀。泣く子も黙るビスマルク宰相の名前を継いでいる彼女
に逆らうドイツ海軍は誰もいない。

『話はわかったわね。期待しているわよマックス。また……あなたの姉妹を殺したくは
ないからね』

「そ、それだけはやめて！」

『冗談よ。でも……あなたの代わりにマックスを名乗る準備が出来ている妹達はいつでも殺せるわよ。忘れないようにね』

通信が切れる。話しているうちに吹雪は五十鈴に説得されたのか、深雪を止めるためと覚悟をきめ出撃の準備を始めていた。

だが、マックスは動かない。訝しんだ初月が声をかける。

「中尉？」

「私は出撃できない」

「なにを言っているんですか？　ひとりでも多くの戦力がいないと勝てないことは見ればわかるでしょう！」

「黙れ！　貴様はドイツ海軍のマックスになんたる口をきいている！　私は出ない！」

貴様等、矮小な存在だけで戦え！」

「し、しかし！」

「もういい、初月」

那智が初月の肩へと手を置いた。那智がマックスを見つめる。その視線が痛かった。那智にも暗い過去が存在する。

どこまで真実を私が知っているかはわからない。だが、少なくとも那智は自身の過去

と向き合って戦っている。大して私はどうだ？ 過去の出来事に囚われ今だに絡め取られている。あの吹雪でさえも一步を踏み出したというのに……私は何をしているんだ……！

マックスは拳を握りしめた。理解はできているのに体が動かない。

第666部隊の面々が私に背を向けて走り去っていく。ようやく部隊に慣れたと思っていた。ようやく私は新しい居場所を手に入れたと思っていた。それは大きな勘違いだった。私はなにも進歩していない。

しばらくすると窓から第666部隊と武装蜂起軍が戦闘を開始する様子が見えてきた。この戦いを見届けることが私の役割だ。

「それでいいのかマックス。ドイツに帰れないことは怖い。それでもマックス、私は部隊という家族を見捨てて良いのか……？」

「第666部隊の方ですよね？」

唐突に声をかけられた。振り向くとそこには片腕を吹き飛ばされている兵士がいる。

「そうだが」

「あなた達には感謝をしています。長門司令も僕達も諦めなかったのは、第666部隊がいたからです」

意外な言葉が兵士から話される。マックスは何も答えることができない。

「最初は第666部隊が仲間になると聞いて怖かった。あの部隊は味方を見捨て、戦果を得ることしか考えないと聞いていましたから。でも実際は違います。皆さんは常に決断を続け、最良の報告に戦局を動かそうとしている。僕はあなた達を尊敬します。どうか、ご武運を。怪我のせいで何もできませんが、それでも僕は僕の戦いをします」

兵士はそれだけを言うとして残っている左で敬礼をして去って行く。

けが人でさえ戦おうとしているのに、私は傍観者でいることに甘んじている。

このままでいいのか？ 否、いいわけがない。私の戦いは……今の私に勝つことだ……！

インカムを取り、私は投げ捨てた。これであの煩わしい声を聞くことは二度とない。

「私……戦うよ」

マックスは出撃するために走り出した。

朽ち果てる、我が愛しの人

背筋が凍る。死んだはずの人間と出会った時の感覚とはこういうものなのだろうか。震えが止まらない。嬉しさからなのか？ 否、そんなわけがない。恐怖だ。自分は彼女達の忠告を聞かずに自分勝手に動いてしまったが故に彼女達を殺してしまった。許されるべきではない凶行。

しかし、帰投した私を責める者は誰一人としていない。皆が口を揃えて言う。

「英雄の帰還だ！」

愛しい姉妹達の命を犠牲にして得ることが出来た名誉に価値などあるのだろうか？ 傍にいる大切な存在を守ることができなかった愚者に英雄という賞賛を与えるなど、どうしてこの世界は残酷なのだろうか。

「どうして……」

戦闘は既に始まっている。仲間達は先の防衛戦の傷が癒えぬまま、分相応な敵と対峙している。僕も仲間達と共に戦場を駆け回るはずだった。

彼女に会うことさえなければ……

「どうして生きているの……！ あの時、死んでしまったはずなのに……！」

「ひどいなあ……久しぶり妹に会えて私は嬉しいよ」

「僕はあの時……あの時ッ！」

「大丈夫、大丈夫だから。落ち込まないで？ 艦娘だって人間だもの。間違えてしまうことはあるよ。だから仕方なかったんだよ」

視界が霞んでいく。涙が止まらない。あの時の愚行を許してもらえた。止まっていたあの時の時間が動き始める。心の中で淀みとして沈殿していた何かが消えて行く。

「秋月……僕は……本当にごめん」

「だから大丈夫だって。それに謝る必要なんかないんだよ」

不自然に言葉が切られる。続きが気になり初月は涙を拭い、秋月を見つめた。彼女は今まで一度も見ることがないような笑顔を浮かべている。

「だってさ、だって、謝ったって死んだ人は帰ってこないんだもん。だから初月。続きは死んでから、何回も何回も後悔しながら地獄で償ってよ」

「……ッ！」

10cm高角砲が火を噴く。砲弾は一直線に初月へと飛んでいき、着水と共に爆発を起こした。

何が起こきたの……!?

一瞬の迷いが初月の動きを鈍らせた。続けて発射された酸素魚雷に反応することが

できず、初月は直撃を喰らった。幸いにも機関部に被弾することはなく、作戦行動を継続することはできそうだ。

「許されるわけがないじゃん。だつて殺しちやつたんだよ！ 姉妹をツ！ さすがの私も怒るよツ！ それにさ……あの時と同じ秋月がいると思つた？」

「どういう意味……」

「秋月の艦装は回収され、新しい艦娘候補へと譲渡された。そうして生まれたのが私。艦装を初めて装着した時、前に秋月だった人の記憶や感情がなだれ込んできた。こう言つていたよ」

「……」

「許さない」

再び秋月から魚雷が発射される。

初月は回避行動を取り、速射砲を秋月へ構えた。だが、引き金を引くことが出来ない。中身は違うが、目の前にいるのは同じ格好をした姉なのだ。どれだけ会いたかつたか、どれだけ一緒にいたかつたか、謝りたかつたか……！ そしてどれだけ罪を償いたかつたか。それが今、叶おうとしている。ここで負けてしまえば、ここで討たれてしまえば姉の恩讐は果たされ、僕の償いも完了する。

「……で死ねば……許される」

「死んじやえええええ！」

動きが止まる。

「ここで死ぬことが僕が出来る唯一の贖罪なのだ。ならば受け止めるしかないだろう。ふざけるなアアア！」

向かつてきていた魚雷の前に無数の銃弾が撃ち込まれる。数発が命中したのか、魚雷は誘爆し海の藻屑と消えていった。

近づいてくる影がある。高速で接近してきた彼女は僕の隣につくや否や、僕に平手打ちをした。

「貴様ツ！ なにをしている！」

「マックス中尉……」

「貴様の過去に何があつたのかはしらん。興味もない。だがな、貴様が戦意喪失をすれば、再び貴様のせいで犠牲が増えるんだぞ」

体に電流が走る。

僕はまた、あの時と同じような愚行をしようとしていたのか……？ その答えを僕は持ち合わせていない。それでも目の前のマックスは答えを僕に教えてくれた。

「過去は過去だ。今を生きることを諦めてどうする。私だつて過去に打ち勝つことが出来たんだ。貴様はそのまま負けるのかッ！」

「……僕は」

「立ち上がれ初月少尉ッ！ 貴様の目の前に守りたい者がいるならば、貴様にまだ戦う闘志があるならば、貴様の望む居場所があるならばッ！」

「……！」

「仲間を守つて償え。仲間を信じて戦え。それが今できることだとわかれ、黄色人種の低脳サル！」

「当然出てきて失礼しちゃうじゃない。そんなに死にたいなら殺してあげるよ、政治将校さん！」

「あいにく政治などくそ食らえだ。私は私の意思で戦うッ！」

いつの日かと謳い続け

砲弾がすぐ隣の海面に着弾し爆発を起こす。当たれば甚大な被害は免れない。一撃必殺の攻撃に対してこちらは数で押し切るしかない。しかし、戦力はほぼ互角でありながら装備の差があまりにも大きすぎる。艦娘同士の戦いがこれほどまでにも熾烈極めるものだと知らなかった。

周りを見る。戦意を喪失していた初月だったがマックスの参戦により、今は気力を取り戻している。吹雪は相変わらず防戦一方だが、同じ駆逐艦クラスならば易々と落とされることはないだろう。不知火と五十鈴は黙々と斉射を続けている。練度の差が出ているのだろう。敵対する阿武隈と大潮はかなり手こずっているようだ。

「よそ見をするなんて連れないわね！」

「伊勢、行くよ！」

「わかった！」

伊勢と日向が加速を始める。那智はあえて前進を選択する。戦艦クラスの砲台で動きながらの精密射撃はかなり難しい。

「突っ込んでくる……！」

「ひるんじやだめ！ 日向、一斉射撃！」

35. 6cm砲が近付いてくる。

ひるんではいけない。このまままっすぐに行く。

「うおオオオ！」

雲間から太陽が姿を現す。水面の煌めきが勢いを増していく。

それはまさに奇跡だった。那智の負けるわけにはいかないという強い意志が生んだ活路。

水面からの光の反射によって砲弾は那智に着弾するまえに爆発を起こした。爆炎と煙りが一瞬だけ那智の姿を隠す。その隙で充分だった。第666艦隊の隊長にとってそれは天恵。

「ぐはア！」

「装備に頼らずともッ！」

「そんな！ 拳なんてッ！」

那智の鉄拳が日向の鳩尾を捉える。反応できぬまま日向はもろに喰らうと意識を失い海面に仰向けに倒れ伏した。

那智が次の標的を捉える。伊勢はあまりにも予想外の出来事にショックを隠せないのか一步も動けないでいた。

「貴様等にどのような思いがあるのかは知らん。だが私達の道を阻むというならばここで討たれてもらう！」

「ひいー！」

めちやくちやに速射砲が那智に向かって放たれる。数発が那智の頬をかすめるが那智は歩みを止めない。

彼女は心底ガツカリした顔をしていたと後に対峙していた伊勢は語った。彼女は戦鬪の鬼であると。

実際に彼女がなぜ、残念そうな表情をしたのかは今になってはわかりようもない。しかし、彼女なりに確かな信念を持ち同胞である艦娘と戦っているというのに敵対者のだらしない姿を見て、その意思のなさに失望したのかも知れない。それだけ彼女にはやらなくてはいけないことがあった。それだけ彼女には託された想いと守るべき仲間がいた。

「これで終わりにするッ！」

急接近をしかけ酸素魚雷を発射する。

だが魚雷が発射されることはなかった。

急降下の音が聞こえる。爆撃機だ。気づいた時には対処ができる距離ではなかった。

「ぐッー！」

続いて38cm連装砲が放たれ那智へと着弾する。連続する攻撃の前に那智は為す術なく的となるしかなかった。

「まるで射的の的だね」

攻撃が終わり大破しながらも那智はヨロヨロと立ち上がり声の方へと視線を向ける。

金色のなびく髪。赤と黒の鍵十字がついたシンボル。深々と被っていた軍帽を彼女は指で押し上げ、顔を見せた。愉悦に満ちた笑みを浮かべている。その表情を忘れるわけがなかった。那智が必ず討たねばならないと決めている諸悪の根源。探し続けるも手掛かりをつかめなかった最悪の象徴。

「ビスマルクッ！」

「覚えてもらえて光栄だわ、那智大尉！ あの日ぶりね」

「貴様を……貴様を忘れるわけなどあるものかッ！」

「そうね、わかっているわ。邪魔よ伊勢中尉。さっさと妹を連れてどきなさい」

ハツとした顔を見ると伊勢は日向の腕を肩にかけ戦線を離脱していった。

「さて……使い方なんてまるでわからなかったけれどもまずまずね。あとでグラーフにお礼を言っておきましょうか」

「戦艦の癖にどうやって発艦なんかさせたんだ」

「簡単な話よ。艀装を拾ったの。さつき、ね」

「それはッ！」

見覚えのある。それは私が……私がいつも大切に思っているあの人の艦装。本来は水偵を発艦させるための装備。それを無理矢理使ったというのか？ 彼女はどこまでも私と妙高の思い出を踏みにじる。妙高の死後、彼女の艦装が全てそろわなかった。紛失として処分されたが、ドイツ海軍によつて持ち出されていたなどと知れば、帝国海軍は激怒したことだろう。最も、今ではその帝国海軍も本国のクーデターによつて崩壊寸前に危機であることは間違いない話だが。

「さて、長話は嫌いな。死になさい、貴方、すごく目障りなのッ！」
世界がスローモーションになる。

砲弾が放たれる瞬間がハッキリと認識できる。火花が散り、炎を巻き上げ38cm砲が近付いてくる。だが、体を動かすことが出来ない。

「那智大尉ッ！」

「隊長ッ！」

隊員の声が聞こえる。

「ああ……私つて意外と慕われたいた……のかもしれない」

冷たい。

海の水は冷たい。

身も心も凍ってしまふ。

重力に引き寄せられ深く深く底へと沈んでいく。

手を伸ばしても届くものはない。

光が遠のいていく。

因果応報だろうか。

今まで見捨ててきた者たちの怨念が私を引き寄せる。

「これで……終わるか……」

されど、踊り続けよ傀儡よ

第666艦隊が沖ノ鳥島司令部で蜂起軍の攻撃に遭っている頃、横浜鎮守府の地下に逃げ込んでいた者達にも動きがあった。

夕張はただ黙って状況に流されるしかなかった。葛城はユーと合流をするとそのまま地下道を進んでいき、他の抵抗軍達とも対面を果たしていた。皆がどこか暗い影を抱えていることがわかる。中には海軍の中でも秘匿部隊とされている精鋭中の精鋭、特殊鎮圧部隊の姿まである。彼らはたしか海軍省と陸軍省が管轄している部隊のはずだが、ここまで海軍に肩入れをする形となつて大丈夫なのだろうか？

「艦娘はいませんね」

夕張は葛城へ話しかけた

しかし、葛城はニヤリと笑つた。

「いるさ。だが、今はこの場にはいない。別の任についているからの」

「なるほど……葛城提督、質問があるのですが勝算はあるのですか？ 重要施設は蜂起軍に抑えられてしまっていますし、仮に私達が横浜鎮守府奪還のために動き出すとしても他国から見れば海軍が国連施設を襲っているように見えませんか？」

「見えるだろうな……まさにそこだ。奴らの巧妙なところだ」

「ではどうしようもないのでは……」

「方法がありますよ」

ユーが会話に割り込む形で入ってきた。

気がつくとも彼女は臙装をつけ、いつでも出撃できるような体勢となっている。

「どうするのですか？」

「内部から崩壊させるのです」

「内部から……？　ですが、今回査察の名目で来ているドイツ海軍の方々は秘密警察ゲシュタポの息がかかっていると聞いています。秘密警察は各国にも多大な影響を与える存在……しかも国内は完全掌握をしている……内部崩壊など狙えるのですか？」

「狙えます。いえ、させます。ドイツのこんな言葉を聞いたことがありますか？　隣

人を信じるな、家族を信じるな、友人を信じるな」

「……いいえ？」

「皆、疑心暗鬼なのです。誰が敵で味方なのかをハッキリとわかっています。だからこそ、そこにつけいる隙があります。少しついであげれば、張りぼての城を陥落させられますから」

ユーは自信に溢れているようだった。

それは彼女が一度経験したことあるからこそ溢れでている自信のようにも感じられる。

いったい彼女に何があつたのだろうか？

夕張の好奇心が刺激された。しかし、ここで聞くにはあまりにも無粋過ぎるだろう。今は聞けなくても、いつか聞いてみよう。

夕張が自己解決をしていると葛城が咳払いをして歩き出し始めた。さび付いた階段を上がり、広間の2階へと上がる。吹き抜けとなつているため、2階から1階にあつまる抵抗軍の姿がよく見えるだろう。

「では諸君、これより我々正規海軍はさらなる増援と合流をすることとなる。現在わかつているだけでも呉、大洗、仙台、大間の鎮守府はクーデターを最小限の被害として食い止めることができている」

「おお……！」

どよめき起きた。

東京の海軍省が陥落したと聞かされた時は誰しもがもはやこの鎮守府も横浜と同じようにクーデター軍の手に落ちていと思つていた。しかし、実際はクーデターから逃れている鎮守府が存在している。しかも、あの巨大な敷地と強大な戦力を所持してる呉が仲間にいる。それだけで彼らのやる気は湧いていた。

「だが、この横浜は他鎮守府と同様に武力抗争のみで今回のクーデターを解決するわけにはいかない。ここは国連直轄の施設でもある。万が一、武装蜂起軍が我々がクーデター側だと偽りの情報を流せば各国から狙われるのは我々である」

どよめきが消える。沈黙が場を支配した。

誰しもが薄々感づいていたことではあるが、言葉にされると事の重大さをより理解せざるおえない。

「さて、では諸君に問おう。世界の敵になる覚悟はあるかね？」

「……」

「ハツキリ言って、言葉だけでの穏便な解決はもはや不可能である。かつての同士と銃口を向けあい、銃弾という脅威を持つてしてでしか我々の明日はない。ここで諸君達に問いを投げかけた理由はただ一つ。やるならば徹底的に且つ迅速にだ。躊躇をしてはいけない。日の丸に銃口を先に向けたのは彼らである。昨日までの友は今日の敵だ。諸君等は戦う覚悟はあるかね？」

「……」

誰も言葉を発せない。それでも葛城は彼らを静かに見下ろしていた。即答は求めていないのだろう。じっくりと考えた末の答えを期待していることが彼の眼からうかがえる。

昨日、食堂で馬鹿話をした友がいるかもしれない。戦後に愛を誓った恋人がいるかもしれない。育ててくれた師や親がいるかもしれない。曲がり角から誰が出てくるのかわからない。知人であつても引き金をひくことができるか否か……横浜鎮守府奪還のためには武力だけではなくは早さも求められている。

ドイツ海軍は本当に性格が悪い。国内が深海棲艦の脅威にさらされ、疑心暗鬼を隠しながらも平生を保っていた今を見計らつて今回のクーデターの糸を引いているのだから。

「やります」

誰かが答えた。

誰がはなつた言葉なのかわからない。

続くように決意の言葉を口にする者が続々と現れた。

この場にいるほぼ全員の覚悟を聞くと、葛城は静かに右手を挙げて静寂を求める。

「わかった。では抵抗を始めようか」

命、散りゆき、悲しき思い出に

あれから何が起きたのかは覚えていない。

沖ノ鳥島海域で武装蜂起軍とドイツ海軍の強襲を受けた私達は、那智という隊の柱を失い崩壊しようとしていた。

絶対的な君主であり、最強の異名をもつ隊長の敗北が与えた隊員へのダメージは計り知れない。戦意喪失となっていた私達はビスマルクの言うとおり射撃の的となっていた。無数に飛来してくるであろう砲弾の雨によって那智の後を追う海の藻屑となると思っていた。しかし、状況はそうはならなかった。武装蜂起軍の護衛艦が次々と爆散していくと同時に、艦娘達にも魚雷が発射されていた。軌跡を残さない酸素魚雷と見えないう敵の前に知将でもあるビスマルクは撤退の指示を出した。結果として謎の勢力の参戦によって第666部隊は壊滅の危機から脱することができた。

そして……今、彼女達は当初の予定通り大洗鎮守府にいた。大洗鎮守府は本来は存在しないはずの幻の鎮守府だった。かつて計画されていた鎮守府建造計画は、血の五月雨事件の影響で頓挫し、僅かな建造物を残して放棄されたと記録には残されている。だが、実際には地下へ建築を進め地上には老朽化している倉庫をダミーとして残している

秘匿施設となっていた。

「なににせよ、無事に辿り着いたみたいでなによりです」

「……」

水着姿の彼女はニコリと笑いながら私達に話しかけた。

伊58、秘匿性の高い任務につくことで知られている潜水艦の艦娘。大洗鎮守府に配属されている噂は前々から聞いたことはあったが、実際に会ったのは初めてだった。それでも気さくに話しかけてくるのは彼女の性格なのだろう。

「提督のところへご招待しますね」

黙りこくっている部隊の面々を先導しながら伊58は歩き続ける。地下空間にある施設のせいなのかどこかジメジメとしている暑さがあった。やがて一番奥の扉の前で彼女は止まるとノックをして部屋の中へと入っていった。中には口ひげを立派に蓄えた提督が静かに座っている。

「?」橋提督、第666部隊の面々をお連れしました」

「ご苦労だね。それじゃあ、申し訳ないんだけど全艦娘に招集をかけてくれるかな?」

「了解でち!」

その様相とは違い? 橋は穏やかな声で指示を出す。

「さて、ご苦勞様でした。遠路はるばるようこそ大洗鎮守府へ」

「……助けてくれたことには感謝します。ですが……目的はいつたいなんですか？ 正直なことをいうと？ 橋提督からはあまり良い噂はきかないのですが」

「さすがは政治将校殿……僕のこともよく知っているようですね。では包み隠さず話すとしましょうか。そもなぜ、大洗鎮守府は存在しているのか？ 記録上には存在しないはずの幻の鎮守府……その意義とは？ 答えは簡単です。我々は海軍の中の警察。もつと言うなれば秘密警察と言ひ換えればわかりやすいでしょうかね」

ピクリとマックスが肩を振るわせる。それでも彼女は氣丈に振る舞い続けようとしているのが吹雪の目から見てもわかった。

「大洗鎮守府の多くは潜水艦で編成されています。もちろん、金剛型のような戦艦も所属していますがいかなれば張りぼてのダミーです」

「……」

「海難、暗殺……あらゆる事件に関与しているのが僕達です。ですからもちろん、今回の武装蜂起も予期してましたし、それによって貴女方第666部隊の命が危険になることもあった。しかし、僕達の狙いはあくまでもドイツ高級将校であり、いつかの兵士や艦娘の命など勘定するつもりもない。それでも、貴女方の上官である橋本さんには恩がありますからね。一度は助けますよ」

言っている意味がわからなかった。目の前の提督は訳のわからないことを言い続けている。つまるところ、彼は彼の目標を確実に殺すために多くの将兵を見殺しにしているということなのだろうか？

「もつと早く……どうにかできたんじゃないですか！」

五十鈴が叫んだ。那智が死んで一番悲しんでいた彼女の悲痛の叫び。しかし、？橋は顔色をひとつ変えない。

「できましたよ。ですが……皆さんも目的達成のために多くの命を犠牲にしてきましたよね？」

「……」

「同じ穴の貉ですよ。僕達は目的のために手段を選ばない。違いますか？」

否定することはできなかった。

？橋の言っていることは事実だ。私達が永遠に他の将兵に思われていることだ。私達が生きてきていることを私達がされている。因果応報というものだろうか？ 巡り巡って必ず帰ってくる。

「橋本提督は……どうなつたんですか？」

沖ノ鳥島司令部に置いてきてしまった橋本安否を不知火が聞く。？橋は静かに首を振った。

「あの後、第三陣の攻撃部隊が沖ノ鳥島司令部に上陸し制圧したとの情報があります。おそらく……殺されているか……あるいは捕虜か」

「……橋本提督を助けてくれても」

「僕が任されたのは貴女達の保護だけですの」

命令以上のことはしない。命令や約束は絶対に守るが付加価値をつけることはない。生真面目生き方だ。

「さて……どうしますか？ 僕にはこれ以上貴女達にできることはありません？ 貴女達にできることはもはや傍観することだけだ。おとなしく、この鎮守府で事態が収まるのを待っていてください」

？ 橋はそれだけ言うと立ち上がり部屋を出て行こうとした。

納得ができない。見ているだけでいいわけがない。私達にはまだ……やるべきことがあるはずだ。

『その通りだ』

那智の声が聞こえた気がした。勇気を奮い立たせてくれる声があった。

「？ 橋提督ッ！」

吹雪が叫んだ。

「どうかしましたか？」

「提督はこのままどうするおつもりですか？」

「状況を見て収まってきたところで安心しきったところを今回の首謀者を殺します」

「でもその頃には完全に手遅れになっているかもしれないませんか？」

「……何が言いたいんですか？」

「やるなら今やるべきです。たたけるときにたたく」

「？橋が目を見開いた。一番言うとは予想できなかった吹雪からその言葉が出てきたのが意外すぎたのだろう。」

「事が全て上手くいって増長している今こそたたくチャンスです。そしてそのためには一種の神話性を持つ英雄が必要です。それは……私達、第666部隊だ」

「……いったいなにができるか？」

「本当はまだいるんですよ？ 武装蜂起軍に抗い続ける人達が。その人達に勇気をふるい立たせることができれば、戦況は一気にかえることができるはずですか？橋提督、私達を使ってください」

「……なるほど、なるほどなるほど」

「？橋が高笑いをする。しばらくするとおかしなものを見ているかのように彼は吹雪を指さした。」

「面白い、面白い！ いいでしょう！ わかりました。入ってきてください」

声と共に伊56や金剛型といった大洗鎮守府所属の艦娘達が部屋に入ってきた。「僕はその話にのりましようか。さあ……作戦会議の時間です」

捕虜の証

「目を覚ましてくださいよ」

「……」

「本当はもう起きているんでしょう？ わかっているでありますよ」

冷たい水が頭からかけられる。布袋をかぶせられているため、水に濡れた布が口と鼻を被い息ができなくなつた。その様子を楽しんでるのが感じられる。しばらくすると布袋が頭から取り外され、光が飛び込んでくる。呼吸困難に陥っていたからか息が荒くなる。そんな橋本の頭が乱暴に上げられる。まだ光に慣れていないせいで妙に眩しい。

「橋本提督、お久しぶりですね」

「誰かと思えばあきつ丸じゃないか。その制服……随分と出世したみたいだな」

「ええ、あの事件のおかげで」

「まだまだ一兵卒だったお前が今じゃ士官か。時の流れは驚く程に早いもんだ」

「その通りであります。そして今では……元上官をこうして尋問しているわけなのですから」

「いったはずだ。尋問と暴力は乖離するべきだと。嘘の情報を手に入れてしまったのは、今までの時間も労力も水の泡になってしまいうからな」

「時代は変わったんですよ」

鳩尾に思い一撃が入る。呼吸が詰まる。

「暴力で引き出した情報が嘘であつてもかまいません。どうせ結果は変わらないのであります」

「いったいぜんたい、陸軍省は何を考えているんだか」

「それだけは変わっていませんよ。軍の統一化。大日本帝国に最強の軍は一つだけで良い。海軍は海を支配することで図に乗っているようですが、そうじゃない。物資の運搬も兵員の育成も全て、元を辿れば陸で行われている。つまり、陸軍の支配下を借地しているからこそ海軍は存続できている。それを理解できない愚か者を粛正しようというだけであります」

「随分と偏った考えだ」

「……お喋りはもういいであります。さあ、第666艦隊がどこへ消えたのかを答えるでありますよ」

「断つたら？」

「殺します」

「殺したら情報は引き出せないぞ」

「勘違いしないでほしいであります。我々は未だに地下に潜伏している組織があることを知っていますであります。あえて放置しているに過ぎない。しらみつぶしに壊滅させてもいいであります。手間を省くためにわざわざ橋本さんに聞いていただけ。ここで殺してしまっても殺さなくても、第666艦隊の壊滅の未来は変わらないであります」

「そうかい」

沈黙が流れる。

尋問は我慢比べだ。あきつ丸が言ったことがどこまでハツタリなのかはわからない。少なくとも抵抗組織がまだ存在していることを認知していることは事実だろう。それでも、どこに潜伏しているのかはハッキリとわかっていないはずだ。嘘と真実を交えて対象を揺さぶる。古典的且つ効果的な方法だ。橋本がかつて教えたやり方だ。だからこそ橋本は何も語らない。自分の命はあの事件の時にとづくに終わっている。まだ生きつづけているのは、託された願いを成就させていないからだ。それでもここで命尽きて願いを叶えられなくても悔いはない。できることはやったはずだという自負がある。

結局先に根負けしたのはあきつ丸だった。

「相変わらず強情ですね。そこで頭でも冷やしてください」

散々水責めと暴力を繰り返したが得るものはなかった。あきつ丸は引き際をわきま

えている。彼女ならばこのまま丸一晚放置して、橋本の精神力を削ぐ作戦に移るだろう。

だが、それが命取りとなることをまだ彼女は知らない。相手が元上官という枠組みで見えてしまっていることが彼女の失敗だ。相手は陸軍で神格化され、海軍では死神と恐れられた男なのだ。

「いるんだろう?」

虚空に向かって話しかける。しばらくすると鉄の扉が開き、誰かが中へと入ってきた。

「お久しぶりですね」

「久しぶりだな。随分と雰囲気が変わってしまったようだ。残念だよ」

「貴方がそれを言いますか……!」

怒りのこもった言葉が浴びせかけられる。

橋本はやれやれとため息を付きながら顔を上げた。五月雨が生きていた頃と比べれば随分と容姿に気を遣わなくなってしまったようだ。それでも特徴的な髪型に見覚えはある。

「阿武隈、お前が武装蜂起に加わっていると知ったら五月雨は悲しむぞ」

平手打ちが橋本に放たれた。乾いた音が独房に響き渡る。

阿武隈の手は震えていた。怒りのためか、悲しみのためか、それとも別の理由なのか……橋本にはわからない。

「……失礼しました。やるべきことはわかっています」

「頼んだ」

必要最小限の会話だけがされた。阿武隈は橋本が縛られている縄を解く。自由になった橋本は自身の体に特に傷がないことを確認すると立ち上がった。

「どうして……貴方みたいな人に」

「五月雨は最初の犠牲者だった。彼女は俺に救いを求めた。しかし、俺はそれを受け止めることができず、最悪の事態に発展してしまった。俺にできることはあの時にはたせなかつた責任、艦娘の自由意志の尊重を叶える世界を創ることだけだ」

「……」

「阿武隈、お前のことは黙っている。だがな阿武隈、忘れるな。ここにいても未来などない。五月雨はお前の幸せを誰よりも願っていた。自ら幸せを手放すんじゃない」

「……もう遅いですよ」

阿武隈は静かに笑った。涙でぐしゃぐしゃに濡れている顔は一生忘れられない。

「そうか」

それ以上何も言わずに橋本は部屋から出て行った。

反撃の狼煙

冷たい夜風は吹きすさぶ。陸にここまで長く上がっていることは今までなかった気がする。

だがしかし、決して緊張の糸を解いてよい時ではない。これから始まる作戦を考えれば当然のことだろう。

話は数時間前に遡る。

海軍省の警察ともいえる大洗鎮守府の？橋提督に何とか認められ、第666艦隊の面々は作戦会議に参加していた。

大洗鎮守府と横須賀鎮守府のクーデターから生き延びた者達は既に連絡を取ることに成功していた。そこで夕張が無事であることを確認できたことは、不幸中の幸いだった。それでも、蜂起軍に対抗する組織がいても既に海上を完全に封鎖されている現状では、横須賀鎮守府奪還のために艦娘を使用しての攻撃は不可能となっていた。だが、武装蜂起軍にはドイツ海軍を中心とした艦娘がいる限り、人の手だけで奪還作戦を敢行することは無謀過ぎた。そこで、？橋提督は一つの提案をした。

「陸路を使つての艦娘の運搬」

艦装した軍用車両を使用して横須賀鎮守府の地下に艦娘を送りこみ、鎮守府内部から敵の戦力を切り崩していくものだった。上手くいく保証などここにもないが、砲弾の雨が降り注ぐ海上を無理矢理突つ切るよりかは、幾分増しに感じられた。元々第666部隊の副隊長であった五十鈴がそのまま暫定の隊長にシフトする形となり、第666艦隊及び大洗鎮守府所属艦娘の混成部隊は陸路にて横須賀鎮守府を目指すこととなった。

振動が一定の間隔で感じられる。艦装はつけているが、海の上ではないためどこまで通用するのは未知数だ。

それでも今は耐えるしかない。耐えて生きて、横須賀鎮守府に辿り着かなくてはならない。

「それにしても吹雪、すごかいと思いました。正直、不知火はまさか吹雪があんなことを言うとは思いませんでした」

「そ、そうですね……私も柄にないことを言ってしまったと思ってますよ」
「だけれど、吹雪のおかげで無事に作戦に参加することができたんだし、感謝してるわよ」

五十鈴が吹雪きの背中を叩く。吹雪は照れ笑いを浮かべていた。

「まったくだ。だが二度と冷や冷やさせるな。？橋提督はドイツ海軍内でも要注意人物

としてマークされているんだ。下手に刺激したら殺されていたかもしれないぞ」

「あの人はそんなにすごい人なのか？」

「ああ。処刑人？橋。今まで彼の指示によつて事故死した人物は数えられない程いるとされている。彼もまた、一切の躊躇なく任務を遂行する性格だからな。氷の男などとも言われている」

「そう言われると橋本提督も同じような雰囲気ですね」

「……吹雪、それは言っちゃいけないよ。橋本提督は本当は……」

不自然に五十鈴が言葉を切る。その先に何と続けたのかはわからない。五十鈴は迷いの表情を浮かべていたが、やがていつも通りの笑顔にもどると「なんでもない」と笑った。明らかにぎこちなさしか見えなかったが、今はそれ以上追求してはいけないと吹雪は感じた。

それは突然だった。爆発音がする。

「どうしたッ！」

初月が窓から顔を出すと、後ろから数台の車が追いかけてきていた。どこから情報をかぎつけた蜂起軍であることは間違いない。護衛の車両が応戦しているが、ことごとく破壊されていく。

「こんな時にも……いったい誰が……！」

マックスが後ろを振り向く。そこには車の屋根の場所に仁王立ちになり20. 3c m砲を躊躇なく発射している艦娘の姿がある。

「プリンツ少尉ッ！」

「ドイツ海軍のですか?!」

「そうだ……!! めんどくさな奴に見つかった。アイツは手強いぞ……艦娘でありながら、元はS Sの実働部隊に所属していた。整っている容姿を利用して、数々の政府要人に近づき暗殺を繰り返してきたきちがいだ」

「どうしてそんな人が艦娘になったの?!」

「そこまではわからない。誰かが応戦をしないと……おい、不知火なにしているんだ!」

「大丈夫、不知火は強いから」

「待って!」

「不知火さん!」

「不知火ッ!」

制止を聞かずに不知火は突然道路に飛び出した。幸いにも目の前の障害物を避けるために減速していたため、受け身を取ることで怪我はなさそうだ。不知火はそのまま敵車両の前に立ちはだかった。

「……お馬鹿さん。轢いてさしあげなさい」

「し、しかしプリンツ少尉。彼女は私達と同じ大日本帝国の軍人で……」

「お猿さんは言葉を理解できないのかしら？ 轢き殺しなさい」

プリンツの脅しに屈した運転手が速度を上げる。それでも不知火は退かない。

「私は不知火。かつてインド洋で深海棲艦の多くを海の藻屑と変えた。私は……私は……こういう戦いが大好きなのッ！」

「……ッ！ 止まりなさい！」

「む、無理です！」

「来なさい……不知火が粉々にしてあげるからッ！」

不知火は両手に酸素魚雷を掴むと接近する車両へと投げ捨てた。間を空けず機銃を魚雷へと発射する。信管を撃ちぬかれた魚雷は派手に爆発を起こした。そこへ車両が突っ込んでいく。爆発の炎と爆風をもちうけ、車両はひっくりかえった。数秒後、漏れ出したガソリンに引火してさらに爆発を起こし巨大な黒煙と炎を上げる。

邪魔な車両の残骸を蹴り飛ばして、プリンツは外へと這い出した。服についた誇りと煤を払い落とす。

「やってくれるじゃない、不知火先任少尉」

「不知火に落ち度などありえない。来なさい異端者。この国を土足で踏み荒らした罰を鬼が与えましょう」

反撃の狼煙 (2)

燃える車両の火が衰えることを知らない。深夜1時の街道は炎の影響で昼間のよう
に明るくなっていた。

遠ざかっていく抵抗軍の車両軍を確認すると不知火は目の前で不適に佇んでいるプ
リンツへと視線を向けた。彼女は笑みを浮かべたまま微動だにしない。

「プリンツ少尉……でしたね」

「不知火先任少尉、なかなかどうして面白いお方です。冷静沈着に見えてる貴官は実の
ところ根っからの戦闘狂なのですから。知っていますよ、インド洋での戦い。深海棲艦
3個中隊の単独撃破などそうそう簡単にはできませんよ」

「褒め言葉として不知火は受け取りましょう」

「もちろん皮肉などではありません。ですが……鬼はそろそろ退治されるお時間ですよ
！」

プリンツが機銃を斉射する。闇雲に撃たれた弾丸を躲しながら、不知火は瓦礫の影に
隠れた。残弾を確認する。沖ノ鳥島司令部から帰還してから、満足は補給は出来ていな
い。さつきは思わず貴重な魚雷を2本使ってしまった。長期決戦となれば、援軍が到着

する可能性の高いプリンツに軍配が上がることは間違いない。

「ならば、答えは出ています」

瓦礫から飛び出し、不知火はプリンツへと一気に距離を詰める。さすがに面食らったのか、プリンツは驚きのあまり攻撃の手を一瞬だけ緩めてしまった。

「もらいました」

「ぐッー」

渾身の右ストレートがプリンツの鳩尾に入る。続けて、左ストレートを顔面に叩き込み、反動を利用して肘打ちをする。悲鳴をあげ、血を流しながらプリンツは不知火と距離を取った。

想定外の事態を予想して、深海棲艦との肉弾戦の訓練の賜物だった。

「私の顔に……よくも……」

「ドイツ親衛隊もたいしたことありませんね。しよせん、群れを成してでしか強く出れない弱者ですか」

「なにを……!」

「覚えておくことです、私達大日本帝国海軍は一騎当千の強者揃い。一人が千体の深海棲艦を倒すことができる。生ぬるいドイツ海軍と同じに見られては困るッ!」

「言ってくれるじゃないですか……」

プリンツがユラリと立ち上がる。血を拭い、彼女は再び笑った。

目からは正気が失われていた。不知火の背筋に悪寒が走る。

あの目を彼女は知っている。命を惜しむことのない、兵器としての目。任務を完了するまで止まることがない暴走機関車の如き存在。

早く決着をつけないと……！

不知火は再びプリンツへと殴りかかった。だが、その拳がプリンツへと届くことはない。プリンツは不知火の拳を受け止めるとそのまま不知火を投げ倒した。ゼロ距離で倒れている不知火に向けて機銃を一斉射する。当然躲すことなどできるわけもなく、銃弾の雨あられをもろに受けた不知火は悲鳴を上げた。機銃の弾丸が尽きた隙をつき、不知火は飛び上がり後ろへと飛んだ。

「くく……良い顔になったじゃないですか……血塗れの貴女は最高です。惚れてしまいうですすから」

「狂人め」

「当たり前でしょう？ 戦争をしているんですよ。狂わなきゃ続けるわけがない。私達は艦娘です。人としてのたがなどどうの昔に外してしまっている」

「不知火は違う」

「いいえ、不知火先任少尉、貴女も同類ですよ。知っているんですからね？ 仲間が轟沈

していく中、貴女は笑顔で戦闘を続けた。それがインド洋での戦いの真実であることをッ！」

プリンツが高らかに叫ぶ。

ああ、知っていたのか。ふと昔を思い出す。あの海戦、あの戦場、旗艦の川内の命令を無視して戦いを続けた。戦友が沈んでいく中、私は戦い続けた。弾がなくなれば、沈み行く味方の艦装から無理矢理奪い取り利用した。1時間ほどの海戦の後、戦場にただひとり立っていたのは私だけだった。あの高揚感と虚しさを忘れたことはない。いつまでも永遠に背負い続けなければいけない罪だ。

だからこゝ、不知火はプリンツを見て思わず笑ってしまった。自信満々に私の心を揺さぶろうとして言葉を発したプリンツは滑稽以外の言葉で表すことが出来ない。

「それがどうした?」

「な……」

「それがどうした? 最後に立っていたのは不知火だけだった。それ以上も以下の結果は必要ない。弱ければ死ぬ」

プリンツが笑顔のまま固まった。その目は物語ってる。

自分が今対峙しているのは真正正銘の鬼である。殺らなければ殺られる。

「化け物がアアッ!」

プリンツが艤装に手をかけ20・3cm砲を発射する。

不知火は躲さなかった。それどころか砲弾に向かつて突撃する。砲弾が右腕に着弾した。しかし、砲弾一発で死んでしまう程艦娘の装甲はやわではない。痛みが全身に走るが無視をする。アドレナリンが体の隅々まで行き渡り、感覚をマヒさせている気がする。

「これで死にましようか」

「ムグッ！」

足を払い、プリンツを転ばせると不知火は彼女の腹部を蹴り飛ばした。痛みにもだえている彼女を尻目に、12・5cm連装砲を口の中へと突き入れる。

「狂ってる！ やめて！」

涙目にプリンツは訴えかけた。

外装はある程度の強度を持っているが、体の内部に直接攻撃を受ければ、無傷で済むことはまずあり得ない。とくに口腔内にゼロ距離射撃されるとなれば、死ぬことは確実だ。

不知火は訴えかけるプリンツに笑みを浮かべた。

「これ、戦争ですから」

トリガーを引く。

血飛沫と脳漿がぶちまけられる。派手に被った不知火は、ぺろりと舌舐めずりをした。

「不知火の口には合わないですね」

鬼は立ち上がると、仲間が進んだ道を歩き始めた。

狂い咲く

「プリンツが殺やられた？」

「そのようです。まさかプリンツ少尉が……」

「その情報は確かなんだろうな、レーベ少尉」

「僕の調べに間違いはありません」

「……艦装の回収は？」

「艦装も完全に破壊されていました。もう二度と、プリンツという船の魂を宿した存在はできないです」

「……黄色いサル目がッ！」

ビスマルクが机を叩く。

大きな音に数人の兵士達は体を震わせた。

それだけの覇気がビスマルクから感じることができた。

「落ち着いてビスマルク」

「グラーフ……」

「プリンツのことはすごく残念よ。それでも未だに戦況が変わったわけじゃない。彼女

のためにも私達は必ず今回の作戦を完遂させるの」

「……ああ。黒の艦隊は今どこに」

「現在、陸路と使つて横須賀へ向かつてきています」

「迎撃部隊は？」

「既に向かつています」

「誰に行かせている」

「秋月と摩耶です」

「……せいぜい派手に暴れてもらうとしようか」

○●○○●○

「お前は どうして武装蜂起に加わつたんだ？」

隣で同じく車に揺られている摩耶が声をかけてきた。

正直な話うるさいと思つたが、なんとなく自分語りがしたくなつた。不思議なもので時より自分が何者なのかを、自分がなにをするべきなのかを誰かに話さなくてはただの名無しに戻るような時があつた。今はたまたまそんな気分だつたからこそ、話したくなつてゐる。そう自分に言い訳をした。

「私ではない、でも私の中の魂が恨みを持っている。秋月として初月には死んでもらわなくてはいけない」

「そうなんだな」

「貴女はどうして？」

「理由はない」

意外な回答に少しだけ驚く。

海軍の中でも任務に忠実で姉御肌で仲間を率いていくことで有名な彼女らしからぬ

答えだと感じた。

「意外ね」

思ったことをそのまま口にした。

摩耶はなぜかニヤリと笑う。

「意外じゃないぜ。アタシはアタシの力を存分に引き出せる場所を見つければ誰の味方にも敵にもなる。少しだけ飽きてたんだ、深海棲艦の相手をする事にな」

「……」

意思も信念も感じられない軽い言葉。吐き気がした。それでも秋月は何も言わない。ここで仲違いをしても意味はない。摩耶が私の思っているよりも幾分おつむの弱い存在であっても利用価値は充分にある。ならば、利用するだけして最後は見殺しにでもすれば良い。

一度死んでしまっている私の魂は、仲間を見捨てることに戸惑いなど持つわけがな

い。

「見えました!」

運転手の声が聞こえた。

フロントガラスには対向車線を走る車両が目に入る。

「さあ……次こそは死んでもらう!」

秋月は荷台から飛び出した。

突然の乱入者に向かってきていたハンドルを切り、バランスを崩して横転した。

倒れた車から這い出してくる者がいる。

「次こそ……来ると思った」

「初月ツ! 待っていた!」

「おいおい、一人だけか?」

「私達はチーム。他の味方を逃がすために囷にもなる」

「それが一度、仲間を見殺しにした奴がという言葉かツ! 手を出さないで摩耶! 貴女

は他の奴らを追いなさい」

「へいへい、わかってるよ」

摩耶を止めようとする初月に速射砲が放たれる。初月は摩耶を取り逃がし、悔しそうに秋月を睨み付けた。

「貴女に私を睨むことができて？」

「私は二度と仲間を見捨てない。一度捨ててしまった魂を仲間が取り戻させてくれた」
「綺麗事を言うな」

「秋月、貴女の魂はいつまで死んでいるの？」

「……」

こいつは何を言っているんだ？

怒りで頭がぼうつとする。

誰のせいで深い深い憎しみを背負っていると思う。

秋月としての生を阻害した張本人が言つて良いことと悪いことの区別もつかなくなつてしまったようだ。

「お前が言うかアアア！」

私は連射砲を初月へ放つた。

卓越した信者達

「こちら五十鈴、無事に合流ポイントまで到着いたしました」

『へえ……僕の予想では移動途中に襲撃に合つて今頃は果てていると思つただけども……さすがは獣の数字を持つ部隊。なかなかにしぶといね』

「……」

『冗談だよ。そちらに迎えが間もなく到着するはずだ。彼らは君達と同じくドイツ海軍の武装蜂起に反発する者達……さて、この戦いを大洗から高みの見物をさせてもらうよ』

通信が切れる。五十鈴は黙つて通信機をマックスへと返した。

「底が見えない男ね、？橋提督」

「そうだね……それにしても……もう3人しかいない」

「五十鈴中尉、貴様がしよげてもどうにもならないぞ。不知火に初月はまだ戦っている最中かもしれない。いずれ合流できるはずだ」

「そうですよ、五十鈴中尉！ 今……私達に出来る事をしましょう」

「吹雪にまでそういわれると私の立場としては何だか辛いわね」

「い、いめんさい……」

しよげる吹雪の頭の上に五十鈴が優しく手を置いた。

「でも、吹雪はその前向きな姿勢を絶対に失っては駄目。そうでなくちや吹雪じゃないんだから」

五十鈴が笑った。沖ノ島海域で激戦を繰り広げてから始めて彼女が笑った姿を見た気がする。

「五十鈴中尉こそ、笑ってヘラヘラしているくらいが良いですよ！」

「それは褒めてないぞ?!」

五十鈴が乱暴に吹雪の頭を撫でる。

「やめてくださいよ」と吹雪は言っているがその顔には笑みが浮かんでいる。今ばかりはマックスも止めようとはしない。

仲間が死んでいく様を誰しもが久方ぶりに味わっていた。第666部隊は那智の智将の采配により、誰も死ぬ者はいなかった。しかし今は違う。那智がない今、第666部隊は本当の意味で試されていた。艦娘同士の争い、人間対人間の戦いでどれだけ生き残れるのかを、どれだけ希望の光となり、大日本帝国という存在を守る標となることができるのかを……その重荷を背負いながら彼女達は進み続けている。横須賀鎮守府奪還は第一歩に過ぎない。だが、横須賀鎮守府を正当な理由で奪還することが出来れ

ば、俯瞰を決めている周辺諸国の協力を取り付け、ドイツ海軍を国外に追いやることのできるかもしれない。そうなれば、大日本帝国はまたやり直せることができる。その希望を忘れてはいけない。

「誰ッ!」

五十鈴が暗闇に向かって叫んだ。緊張が走る。隠れることを諦めたのかハッキリとした足音を立てながら、小柄な少女が姿を現した。その姿はドイツ海軍の紋章が入っている軍服を着ている。

「ユー特務中尉……」

「ドイツ海軍……!」

「待つて欲しい。ユーは敵じゃない」

「よくもそのような事が言えますね。私に黙って大日本帝国を支配しようとしていたのは、貴女方でしょう」

「マックス中尉。ユーはビスマルク達の暴走を止めるために来た」

「嘘を言うなッ!」

マックスがユーに向かって銃を向ける。一瞬だけユーは驚いた顔をしたがため息を一つ付くと構うことなくマックスへと近づいて行く。

「ユーは嘘をついていない」

「ならば味方だという証拠はッ！」

「証拠はないけれど証人にはなれるよ」

懐かしい声が聞こえた。ユーの後ろを見ると元気そうな笑顔の夕張が立っていた。彼女とは久々の再会だ。

横須賀鎮守府に居残り組となっていた彼女がどうなってしまったのかを誰しもが心配していた。

夕張の意表を突く登場にマックスは啞然としたまま固まってしまった。

「銃を下ろしてあげてよ、マックス中尉」

「あ、ああ……」

夕張に諭され、マックスは銃をホルスターへとしまった。

「私は味方だとわかってくれましたか？ ユーは貴女達を迎えにきた」

「ということは、ユー特務中尉達が武装蜂起軍に対して抵抗している者達を従えていると……？」

「横須賀鎮守府の国連軍提督の葛城提督が今は指揮を執っている。もうすぐ、戦いが始まる。早く貴女達にも来て欲しい」

「……わかりました」

「それと、ユー特務中尉は長い。ユーでいい」

そう言いながらユーは歩き始めた。暗い回廊が続くと思うと地下へと下る長い階段へとぶつかる。ユーと夕張は何のためらいもなく下っていく。第666部隊の面々もそれに続いていった。

「五十鈴、数が足りないんだけど……」

「……那智大尉は行方不明、不知火と初月は道中襲いかかってきた武装蜂起軍の相手をしている」

「……そっか。私の知らない間に色々とおつたんだね」

「そうだね、色々ありすぎて頭がどうにかなつちやいそうだよ」

五十鈴と夕張が現状の報告をしあっている。那智を戦死ではなく行方不明と言ったのは、五十鈴なりに那智が死ぬわけがないと信じているからだ。吹雪は思った。あるいは……那智が死んだと信じたくないだけかもしれない。実際、吹雪自身も那智が死んだとは思いたくなどなかった。納得できない命令を下すことが多いが、それでも那智は信頼に値するだけの背中をいつも見せてくれた。そんな那智が死んだなどと……絶対に信じたくはない。もしかしたら、この先に既に大日本帝国を守るための衛士達と集まっているかもしれない。

「吹雪少尉」

マックスが唐突に吹雪へと話しかけてきた。その顔は妙に暗い。

「これから多くの仲間が死んでいく。深海棲艦との戦いではなく、利を得るためだけの戦いで、それも人間同士の戦いで死んでいく」

「……はい」

「それでも前へ進み続けろ。お前にはそれが出来る覚悟があるはずだ。自分の生きていく足下に屍などない。そこにあるのは、お前が救ってきた者達の栄光だけだ」

「どうして今、私にそんなことを……?」

「……気にするな」

マックスは歩みを早め、吹雪を追い越した。

妙に気になることばだと感じる。しかし、マックスの真意はわからない。

マックスはこの戦いの果てに何を見ているのだろうか……? 政治将校としてドイツから派遣されてきている彼女の苦悩を吹雪は理解できないでいた。

魂の怒り

「お前が言うのか？ お前がそんなことを言う権利があると思っっているのかッ！」

終わることのない秋月の罵声と銃弾の中、初月は思い出していた。

いつの日かこうなる時が来る気がした。見殺しにした姉妹達に罵声を浴びせられ、死ぬことを求められる時が必ず来る気がしていた。その時、潔く死を選ぶことができるのだろうか？ それとも再び殺す道を選ぶのだろうか？ 艦娘という兵器は罪深い存在だ。肉体が滅ぼうとも、艦装に刻み込まれた魂ははがれ落ちることはない。ここで秋月を殺すことが出来たとしても、第二、第三の秋月は魂に従い私を殺そうと動き続けるだろう。これは負の連鎖だ。自らが背負わなくてはいけない罪だ。

「……僕が出来ることは数少ない。それならもう二度と後悔も間違いもない選択をする」

初月は秋月の射線上に飛び出した。その様子を見た秋月が不敵な笑みを浮かべる。

ようやく殺せる時が来た。その視線は初月を殺す事への甘美を味わうことだけを求めている目だ。使命も理念もない。欲望のままに獣のごとく生きるそれを見た初月は悲しくなった。

走りだす。陸上戦闘には不向きな艦装を装備しながらも移動は難しかった。海上ならば躲すことができる砲弾に命中し続ける。腕の感覚が消えていく。足が妙に重たい。腹部が焼けるように痛い。このまま意識を失えばどれだけ楽になれるだろうか……考えてはいけない事が脳内を占める。それでも止めるわけにはいかなかった。

ふと光が見えた気がした。そこには初月も秋月も照月も涼月もいる。彼女達と別れる運命の戦いへと赴く前の僅かな幸せなひととき。あの時、誰だっただろうか写真を撮ろうと言った。乗り気ではなかったが、何故だかこれが最後の姉妹の再会のような気がして私も写真にうつった。いつでも身につけ、手放したことはない。

「許して欲しいわけじゃない」

懺悔などするつもりはない。今更遅いことはわかっている。

『ならばなぜ走る?』

心の声が聞こえた気がした。

『ならばここで死ねば良い。お前がころした女はお前の死を望んでいる』
相手に望まれることだけを叶えることが全てではない。

そうしてしまつたら、無秩序に復讐が横行する災厄の世界となつてしまう。

『では生きたいと抗っているのか?』

それも違う。私は十分に生き続けた。これ以上は生き汚く這いつくばるつもりは毛

頭ない。

『……では改めて聞こう。なぜ走る?』

彼女と添い遂げるためだ。

『……』

我儘と言うか?

『傲慢で素敵な答えだ』

「ありがとう」

「なあ……!」

初月が秋月の首筋にナイフを突き立てた。血液が飛び出す音がする。驚愕の表情を浮かべたままの秋月が最後の力を振り絞り、初月の胸に銃弾を撃ち込んだ。お互いに精根尽き果て、もつれ込むように倒れる。そこを初月は秋月を支えるように手を回した。もう腕の感覚などない。それでも彼女を抱きしめる意思が突き動かした。

「私をまた殺した……」

「僕を殺したのは君も同じだ」

「私は違う……!」

「もう止めよう、こんなことは」

「勝手を……言うなッ！」

「我儘なことはわかっている。だけれども、僕達の敵は艦娘じゃない。目の前で苦しんでいる人を救うために戦うことを放棄してしまつては、秋月としての魂は壊れてしまふ」

「それでも……かまわない……！」

僅かな力で秋月は初月を遠ざけようとする。しかし、初月は秋月が離れようとするればするほど強く引き寄せた。

「ごめんね、秋月」

「……」

秋月が息を呑んだ。静寂が走る。誰も邪魔をする者などいない。地獄の戦火の中にあるたった一瞬の姉妹の時間。それは永遠に続くように感じられた。秋月が涙を流す。手にしていた銃を落とした。

「たったその一言が言えないままでいたんだ」

「……その言葉をいう相手はもう死んでいる」

「そうだね。でも今の秋月は君だから」

「本当に勝手……だけど……私、もう疲れた。私が持っているわけじゃない恨みで動き

続けるのは大変なの」

「そうだね。そろそろ……休もうか」

「……おやすみ、初月」

「おやすみ、秋月」

意識が遠のいていく。

これが幸せなのかと問われると難しい。初月は秋月が恨んでる思いを勝手に言い続けることで撥ね除けて、一緒に死そい遂げる選択を果たしたのだ。大勢の人間は悪手だとあざ笑うだろう。

それで構わなかった。これは大きすぎる姉妹の喧嘩なのだ。体は別人なのに、魂が同一であるという悲劇が招いた回りくどすぎる復讐劇なのだ。艦娘ゆえにありえてしまった最悪の場面。

「月が……綺麗だね」

その一言が言葉となったのかはわからない。

空には月が煌々と輝いている。

そろそろ月へと帰る時間が来た気がした。

暴虐の狼煙 叛逆編

叛逆の刻

「久方ぶりの再会となつたな、第666部隊の諸君」

「葛城提督……お久しぶりです。よくぞ無事でした」

「君達の提督……橋本くんには感謝をしなくてはいけないな。彼が事前に危機的状況に陥っていることを知らせてくれなければ、今頃は私も死んでいただろう」

「……提督はご無事なのですか？」

「残念ながら生死も行方も不明のままだ。私としても彼とは何としても合流を果たした
いのだが……そう上手くは事を運ぶことができないようだ」

葛城の言葉を聞き、第666部隊の三人は落胆する。なんとなく予想は出来ていた事
態だが、橋本提督も横須賀鎮守府鎮守府の地下で合流できるのではないかという淡い期
待を抱いてしまっていた。

夕張は「元気出して」と言ってくれているが、彼女もまた疲れと悲しみに満ちている
表情だ。仕方のないことだ。彼女も命からがら逃げ出したばかりであるし、久しぶりに
部隊と合流出来たと思えば五十鈴とマックス、吹雪の3人の姿しか見当たらないのだか

ら。詳しくは聞こうとはしないが、彼女なりに他のメンバーは死んでしまっているかもしれないことを覚悟しているはずだ。

「さて具体的な作戦を説明させてもらおう。ユー特務中尉お願いできるかな？」
「わかった」

ユーは葛城の指示を聞き地図を机の上に広げた。

そこには事細かに武装蜂起軍の警備状況が記されている。回りの建物の名称を見るからに横須賀鎮守府の周辺地図のようだ。鎮守府へと繋がるあらゆる海道には×の印がついており、同様に鎮守府へと続く陸路にも×の印が付いている。

「バツがついている場所には既にトーチカや警備施設が建造されている。大きな交通網からの侵入するには大きな戦いをしなくてはいけない。だけれども、耐久戦となればこちらが不利。だから無理な突入策戦は首を絞めるだけになるからオススメできない」

「うむ……残念ながら十分な人数と装備があるとはいえないからの……陸軍に応援要請することも考えたが、ドイツ海軍とズブズブ汚職に塗れている彼らが協力するなどあり得ない。空軍は実質的な被害があるまでは我関せずを貫くようだ」

「あの……」

「吹雪くんだったね。どうかしたかね？」

「大洗鎮守府のように軍の警察機関に協力をお願いするのはどうでしょうか？」

「妙案だが意味はないだろう。表舞台に出ることを嫌っている彼らが他国が関わっている武装蜂起をまともに取り扱ってくれるとは思いがたい」

「そうなんですか……」

吹雪は思う。

大日本帝国の存亡の危機である今こそ、組織という枠組みを超えて手を取り合う必要があるのではないだろうか。だというのにくだらな足引の引つ張り合いを続けている。何もしない選択をする者達も出てきている。これでいったいどうやって祖国を守れるというのだろうか。

随分と昔に那智から聞いた言葉を思い出した。

『血の五月雨事件は艦娘の人権を守るために行われた。だが、その根幹は祖国の在り方に疑問を持ち、祖国が一つになることを願った者達が起こした事件だ。アレは……褒められるべきことではないが誰にも責めることはできない事態だったんだ』

あの日あの時、大日本帝国の在り方が変わっていたら、今のような事態にはならなかったのかもしれない。この事件を通して、真にあるべき姿に戻す必要がある。

「私達は今、横須賀鎮守府を奪還しなければいけないですけど……それで全てが終わるわけじゃないんですよ」

「いかにも。ドイツ海軍をこの国から追い出さなければいけない」

「……申し訳ない」

「マックス中尉が謝ることじゃないよ。それに、私達はマックス中尉がいることで色々と救われているのだから！」

「……すまないな五十鈴中尉。気をつかわせた」

「その当たりにおこう。それで……ユート務中尉、どう攻めれば落とせる？」

「ユーが考えるに海路と陸路の同時攻撃で戦力を分散するしかないと思う。だから……第666部隊には海路攻略をして欲しい。ここを見て」

ユーが指を指す。そこは日用品の搬入に使われる狭く細い海路だった。

「ここならば敵は奇襲をかけにくい。おまけにこの先には下水管があるから、そこから鎮守府内に侵入も出来る。注意して欲しいのは鎮守府に近付けば近付くほど浅瀬となるから座礁には気をつけてほしい」

「大丈夫！ 無理難題も私達ならなんとか出来る。その任務……任せてください」

五十鈴が葛城へ言い放つ。葛城もその気持ちに伝わったのか「任せる」の一言で返事を済ませた。

「陸路は我々一般へいが攻め入るとしよう。ここには軍用トラックをはじめ戦車まで取りそろえてある。生半可な戦力では進撃を止めることはできないだろう」

「わかった。ユーは内部から侵入した後に進める経路を確保しておく」

「これで布石は打ち終えた。では……叛逆の刻だ。全部隊の幸運を祈る」
「了解ッ！」

馬の骨

第666部隊が横須賀鎮守府から逃げた者達と合流を果たしたという情報はドイツ海軍側も直ぐに掴むことができた。これで武装蜂起軍には大きな敵勢力が出来ることとなる。しかも相手は戦闘のプロ集団だ。海軍省のネットワークをダウンさせることには成功しているが、現状横須賀鎮守府しか掌握できていないドイツ海軍側にとって早い段階での明確な敵勢力の誕生はあまり好ましいものではなかった。加えて、今回の騒動の裏に隠れるように海軍の地下組織が暗躍をしているらしいとの噂も掴んでいる。実態をいつまでも掴ませることのない海軍の秘密警察。その組織まで出張ってきた時、陸軍がどこまで役に立つのかは未知数すぎる。よってビスマルクは陸軍は戦力にカウントしないことを決めた。加えて、未だに各地にくすぶっている反海軍派の者達も戦力に加えることができない。ここまで大きな事態に発展していながら、己の覚悟を決めることが出来ない生半可者はいつ裏切りに出るかわかったものではない。

「誰かが手を貸している？」

迅速な第666部隊の対応……海軍の秘密警察の暗躍……本来は交わるはずのない戦場の闇同士が早くも手を組んだことには誰かの入れ知恵があったことは間違いない

だろう。

第666部隊の提督である橋本はあらゆる派閥に顔がきく影の権力者の一角と言われていたことは知っている。だが現在、彼は沖ノ鳥島司令部総攻撃の時に捕虜として捕まえたはずだ。安易に事を起こせばすぐに察知できるはず……彼は何かをした痕跡はない。

「遙か前から我々の行動に気がついていた……?」

可能性は充分にあり得る。橋本には一度だけ会ったことがある。血の五月雨事件……あの事件を迅速に解決するために私達ドイツ海軍と大日本帝国海軍、そして大日本帝国陸軍は密約を取り決めた。密約の中身を決めるあの場所に橋本はいた。無口でどこにでもいるような男であるが、計り知れない闇を抱えている様子もうかがえた。あの男ならば、あの事件の時から私達ドイツ海軍の胡散臭さに気がついていたらのかもしれない。

「それでもたったそれだけではピースは足りない」

橋本以外にも裏で動いている人物がいるはずだ。

「ビスマルク」

「どうしたグラーフ」

「ユーと連絡が取れないの」

「アイツは今、沖ノ鳥島で残存する敵勢力の殲滅任務に……」

そこまでいって合点がいった。

私達の目を悠々とかいくぐることでできる存在。それは私達の仲間以外にあり得ない。

ユー特務中尉は作戦決行直前にチームに加わった。誰の差し金なのかは不明だが、対潜能力の乏しい私達は潜水艦級である彼女の合流は願ったり叶ったりだった。あの時から怪しさを感じる事ができなかったのは私の失態に違いない。最初から目の前で裏切りを働いている者がいながら、自由を許し、あらゆる権利を渡していた。

「至急ユーに連絡を取れ」

「わかったわ」

執務室にはグラーフの応答を求める声と無機質な砂嵐の音が鳴り響いた。

潜水中は連絡が取ることが出来ないと彼女はよく言っていたが至急連絡できるように取り決めた暗号を使っても反応はない。この時点で彼女への判決は有罪となっていた。

ビスマルクはグラーフに「もういい」と言うと思わずに執務机を叩いた。机の上に乗っていた資料がバラバラと崩れ去る。因果なことにその中にはユーの資料もあった。

彼女が元に所属していたのは第8潜水艦小隊となっているが、第8小隊は数年前に全滅している。ならば全滅した後の数年間彼女はどこで何をしていたのか？ おそらく

ひみつけいさつ

SSSに特殊訓練を受けていたのだろう。穏健派が一定するいるあそこで親日シンパに教育を受け、いつか来る強行派の妨害をするために……

大日本帝国という島国で戦っていると勘違いしていたが、実のところドイツ国内の内政政治までが今回の件には深く絡んでいることがわかった。

ここまでくれば確証が得られずともグラーフの取るべき選択はただ一つとなっていた。

「サーチ&デストロイ」

「え……？」

グラーフは艦内スピーカーに繋がっているマイクの前に立った。

『全英雄達に通達する。ユー特務中尉は我々を裏切っていることが判明した。これより彼女も敵対するべき者と断定する。姿を見たものが即刻処分せよ。なお、艦装を残す必要はない。完膚なきまで破壊し尽くせ』

スイッチを切るとグラーフは困惑したように話しかけてきた。

「ど、どうということなのビスマルク」

「どうもこうもない。我々の中にネズミが混じっていた」

「ネズミ……」

「汚らしいネズミには海の底に帰ってもらわなければいけない。これは聖戦だ。負ける

わけにはいかないのだ」

ビスマルクは忌々しげに窓の外を眺めた。

空は黒い雲が被っており、今にも雷雨が降りそうな天気となっている。

窓には鬼の形相をしたビスマルクが映っていた。

南の島へ

「失礼するであります」

重厚の扉の向こうからは「どうぞ」と声が返された。慎重に扉を開き、あきつ丸は部屋の中へと滑り込んだ。恰幅の良い男は「よく来てくれた」と満面の笑みを浮かべながらソファへ座るように促した。

「春日井陸軍参謀長から招集が掛かったのであれば、不肖あきつ丸、どこに居ようともかけつけるであります」

「君のその忠誠心は新兵達のお手本そのものだ。素晴らしいと賞賛を送ろう」
春日井はそう言いながらあきつ丸の対面に座った。

「それで、緊急の招集の理由はいかほどに？」

「あきつ丸くん、君の活躍はとてよく聞こえている。君がドイツ海軍内の過激派、それもゲシユタポと深い繋がりがある派閥に働きかけてくれたおかげで、横須賀はもはや砂上の城同然となった。まもなく、この神聖なる大日本帝国から異国の息がかかった者達を排除できるのは間違いないだろう。さらには海軍の権威も地に墜ち、我々陸軍がさらなる躍進をする場所へと活動の段階を広げることとも時間の問題だ。これも全て君のお

かげだよあきつ丸くん。君の素晴らしい働きかけのおかげだ。この仕事の報酬は君にだけ与えられるものだ」

「もったいないお言葉です。自分などまだまだひよっこでありますゆえ」

「謙遜などするものではないよ。上官からの賛辞は素直に受けるのもまた、軍人の誉れ」
「では遠慮なく。ありがとうございます」

「で、だ……」

一瞬にして場の空気が凍り付く。

何かがおかしい……そう感じた時にはもう遅かった。

「おっとすまない……」

そう言いながら春日井はテーブルの上の書類を床へとばらまいた。

その中の一枚の写真を見てあきつ丸は凍り付く。そこには、あきつ丸と密談をしているプリンツが鮮明に写っていた。ふと見上げると、そこには冷たい眼差しでありながらも満面の笑みを浮かべる春日井がいた。

「君は横須賀鎮守府に随分と最近に着任した青葉という艦娘を知っているかね？」

「青葉……」

名前は聞いた事がある。

数ヶ月前に日本海で勃発した偶発的な深海棲艦との戦いで轟沈したという情報を聞

いた事がある。だがまさか、こんなにも早く重巡洋艦青葉の魂を継ぐ新たな艦娘青葉が着任しているとは思ひもよらなかつた。

「そ、それは今、初めて知りましたな……」

「そうか。彼女の記者根性には見上げたものがあるようだ。まるでどこまでもどこまでも、気になることは追求を続けて絶対には話さないマムシのような艦娘だ」

まさかあの場面を取られているとは思ひもよらなかつた。細心の注意を払って密会に向かつたはずだ。いったいどこで、この情報が漏洩したというのか？　まるでわからない。

「今回の陸軍とドイツ海軍の繋がりに始まるあらゆる事象だが……君が全ての功績と責任を負ってくれるという理解でかまわないかな？」

「な、し、しかしッ！　自分はッ！」

「軍人ならつべこべとくだらない言葉を放つなッ！」

春日井の怒声が部屋中に響き渡つた。しばらくすると春日井は咳払いをひとつして「すまない、ついつい声を荒げてしまった」と謝辞を述べた。だが、相変わらずその目は笑っていない。

春日井はサイドテーブルにあるティーポッドを手にとるとマグカップにそそぎあきつ丸の前へ置いた。

「君は随分と働きすぎてしまったようだ。フィジーは好きかね？ あそこは随分と気候が穏やかで休暇を過ごすにはうってつけのようだ。もつとも、海水浴を楽しむにしては深海棲艦が多いようだが……」

「じ、じぶんは……」

「それとも……少し、この部屋で休んでいくかね？」

「ヒッ！」

「極上の茶葉で入れた紅茶だ。なかなかお目にかかれるものではない。さあ、選びたまえよ。この部屋で少し休むか、常夏の島で休暇を取るかを……さあ、さあ、さあ、さあッ！」

「じ、じぶんはッ！　じぶんは……！」

「少し休みたまえ。随分と疲れているようだ……ほら」

数分後、参謀室から下級士官の宿舎へと電話がかかってきた。

『わるいが部屋に大きな虫が紛れ込んでしまったようだ。庭の焼却炉で燃やしてくれないか。ああ、丁重にしつかりと燃やしてくれよ』